

# 郡山遺跡 ほか

## 発掘調査報告書

今泉遺跡第 17 次、大野田遺跡第 5 次、大野田官衙遺跡第 22 次  
郡山遺跡第 320 次、北目城跡第 21 次、富沢遺跡第 153・155 次  
富沢館跡第 22～24 次

2023 年 3 月

仙台市教育委員会



# 郡山遺跡 ほか

## 発掘調査報告書

今泉遺跡第 17 次、大野田遺跡第 5 次、大野田官衙遺跡第 22 次  
郡山遺跡第 320 次、北目城跡第 21 次、富沢遺跡第 153・155 次  
富沢館跡第 22～24 次

2023 年 3 月

仙台市教育委員会



## 序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日頃からご理解、ご協力を賜り、感謝申し上げます。

仙台市内には旧石器時代から近世にいたるまで数多くの埋蔵文化財が遺っております。これらの一つ一つは、先人たちが残した貴重な文化遺産です。

平成23年3月11日の東日本大震災より12年が経ち、復興・創生期間7年目を迎えておりますが、個人住宅等の建築に伴う発掘届や発掘調査の件数は、平成23年度以降、震災前を上回る状況が続いております。仙台市教育委員会といたしましては、復旧・復興事業との調整を図りながら、埋蔵文化財の保護と啓発に日々努めているところです。

本報告書には、各種事業に伴って令和3年度から令和4年度にかけて発掘調査を実施した、今泉遺跡第17次、大野田遺跡第5次、大野田官衙遺跡第22次、郡山遺跡第320次、北目城跡21次、富沢遺跡153・155次、富沢館跡22～24次調査の調査結果を収録しています。

文化財は、地域の歴史を伝えるために将来へ守るべき大切な財産です。先人たちの遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ、次の世代へと継承していくことは、現代に生きる私たちの使命であると思います。地域が育んだ文化を語る上で歴史や文化資源がその根底をなしているからです。つきましては、本報告書が学術研究のみならず学校教育や生涯学習などの文化活動に寄与し、皆様の埋蔵文化財へのより深い関心とご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査や報告書の作成に際して、ご協力いただいた多くの方々に心より深く感謝申し上げます。

令和5年3月

仙台市教育委員会  
教育長 福田 洋之

## 例 言



1. 本書は、令和3年度から令和4年度にかけて実施された各種開発事業に伴う発掘調査報告書であり、今泉遺跡第17次、大野田遺跡第5次、大野田官街遺跡22次、郡山遺跡第320次、北目城跡21次、富沢遺跡153・155次、富沢館跡22～24次の各発掘調査報告を合本にしたものである。
2. 本書の本文執筆・挿図・表・写真図版の作成等については以下のように分担し、編集は須貝慎吾が行った。  
第1章-須貝慎吾 第2章-及川謙作 第3章-柳澤楓 第4章-吉田大  
第5章-妹尾一樹 第6・8章-須貝慎吾 第7章-早川太陽  
遺物の基礎整理～実測図作成-須貝慎吾、早川太陽、吉田大、荒井格、向田文化財整理室作業員  
遺物図・遺構図デジタルトレース-向田文化財整理室作業員  
遺物観察表作成-須貝慎吾、早川太陽、吉田大、荒井格 遺構註記表作成-各担当職員  
遺物写真撮影・図版作成-向田文化財整理室作業員 遺構写真図版作成-各担当職員
3. 本書の内容は、すでに公開されている遺跡見学会資料や、各種の発表会資料に優先する。
4. 出土陶磁器の鑑定は、佐藤洋氏に依頼した。
5. 発掘調査および報告書作成にあたり、下記の方々および事業者から多くのご協力を賜った。記して感謝の意を表す次第である。(敬称略順不同)  
株式会社サンワ、伸和興業株式会社、大和ハウス工業株式会社、積水ハウス株式会社、タマホーム株式会社  
早川昌幸、タカラ工業株式会社、株式会社フィオレンテ、千葉築設計事務所
6. 本書に係る出土遺物、実測図、写真などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

## 凡 例

1. 本文中の「遺跡と周辺の遺跡」は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図を、「調査区位置図」などは仙台市発行の2千5百分の1都市基本図を、それぞれ修正して使用した。
2. 図中の座標値は世界測地系を使用している。
3. 遺構の略称は以下の通りで、遺構番号は各調査別の通し番号である。  
SI：堅穴住居跡 SB：掘立柱建物跡 SD：堀跡・溝跡 SE：井戸跡 SK：土坑 SR：自然流路跡  
SX：性格不明遺構 P：ピット
4. 遺物の略称は以下の通りである。  
A：縄文土器 B：弥生土器 C：土師器（非ロクロ調整） D：土師器（ロクロ調整）・赤焼土器  
E：須恵器 F：丸瓦 G：平瓦 H：その他の瓦 Ia：土師質土器 Ib：瓦質土器 Ic：陶器  
J：磁器 K：石器・石製品 L：木製品 N：金属製品 O：自然遺物 P：土製品
5. 土色については、「新版標準土色帳」（小山・竹原1999）を使用した。
6. 遺構図に使用したスクリーンパターンは以下の通りである。また、各図に必要なに応じて凡例を付した。

：柱痕跡 ：水田耕作土

7. 遺物実測図に使用したスクリーンパターンは以下の通りである。

：黒色処理 ：敲打痕

8. 遺物観察表の（ ）がついた数値は図上復元した推定値ないし残存値である。
9. 遺物写真の縮尺は、遺物図版に掲載した同一個体のそれに準ずる。また、異なる場合は各写真図版の右下に表記している。写真掲載のみの遺物は、特別な記載がない限り3分の1で掲載している。
10. 本文中の「灰白色火山灰」（庄子・山田1980）はこれまでの仙台市城の調査報告や東北地方中北部の研究から、「十和田a火山灰（To-a）」と考えられている。その降下年代は西暦915年と推定されている。  
庄子貞夫・山田一郎 1980 「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城跡・昭和54年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡調査研究所  
仙台市教育委員会 2000 『沼向遺跡 第1～3次発掘調査』仙台市文化財調査報告書第241集  
小口雅史 2003 「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題—十和田aと白頭山（長白山）を中心に」『日本律令制の展開』吉川弘文館

# 目 次

第1章 調査計画と実績	1
第1節 調査体制	1
第2節 調査計画	1
第3節 調査実績	1
第2章 今泉遺跡の調査	3
第1節 遺跡の概要	3
第2節 第17次調査	3
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
	5. まとめ
第3章 大野田遺跡の調査	11
第1節 遺跡の概要	11
第2節 第5次調査	11
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
	5. まとめ
第4章 大野田官衙遺跡の調査	37
第1節 遺跡の概要	37
第2節 第22次調査	37
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
	5. まとめ
第5章 郡山遺跡の調査	43
第1節 遺跡の概要	43
第2節 第320次調査	43
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
	5. まとめ
第6章 北目城跡の調査	69
第1節 遺跡の概要	69
第2節 第21次調査	69
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
	5. まとめ
第7章 富沢遺跡の調査	79
第1節 遺跡の概要	79
第2節 第153次調査	81
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
	5. まとめ
第3節 第155次調査	87
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
	5. まとめ



第8章 富沢館跡の調査	93
第1節 遺跡の概要	93
第2節 第22次調査	94
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
	5. まとめ
第3節 第23次調査	98
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
	5. まとめ
第4節 第24次調査	102
1. 調査要項	2. 調査に至る経過と調査方法
3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
	5. まとめ
第9章 総括	109

## 挿図目次

第1図 令和3～4年度調査地点位置図 (国土地理院地図を一部改変)	2	第25図 第22次調査区位置図	38
第2図 今泉遺跡と周辺の遺跡	3	第26図 第22次調査区配置図	38
第3図 第17次調査区位置図	4	第27図 第22次調査区平面・断面図	40
第4図 第17次調査区配置図	4	第28図 郡山遺跡と周辺の遺跡	43
第5図 第17次調査遺構配置図	5	第29図 第320次調査区位置図	44
第6図 第17次調査区断面図	6	第30図 第320次調査区配置図	44
第7図 第17次調査出土遺物	8	第31図 第320次1区調査区平面図	45
第8図 今泉遺跡 検出堀跡位置図	9	第32図 第320次1区調査区断面図	46
第9図 大野田遺跡と周辺の遺跡	11	第33図 SI2621 竪穴住居跡平面・断面図	47
第10図 第5次調査区位置図	12	第34図 SI2621 竪穴住居跡出土遺物	48
第11図 第5次調査区配置図	12	第35図 SA2622 柱列跡平面・断面図	49
第12図 第5次調査区平面図	13	第36図 SB2623・2624・2625 竪立柱建物跡平面・断面図	50
第13図 第5次調査区断面図	14	第37図 SB2626・2627 竪立柱建物跡平面・断面図	51
第14図 SB1 竪立柱建物跡平面・断面図	15	第38図 SD2628・2629 溝跡平面・断面図	52
第15図 第5次下層調査区平面・断面図	17	第39図 第320次2区調査区平面・断面図	53
第16図 SK1 土坑出土遺物	18	第40図 SI2 竪穴住居跡平面・断面図	54
第17図 遺物包含層出土遺物(1)	19	第41図 SI2 竪穴住居跡出土遺物	55
第18図 遺物包含層出土遺物(2)	20	第42図 SI3 竪穴住居跡平面・断面図	56
第19図 遺物包含層出土遺物(3)	21	第43図 SI3 竪穴住居跡出土遺物	57
第20図 遺物包含層出土遺物(4)	22	第44図 SB6 竪立柱建物跡平面・断面図	58
第21図 遺物包含層出土遺物(5)	23	第45図 SB6 竪立柱建物跡出土遺物	59
第22図 遺物包含層出土遺物(6)	24	第46図 その他の出土遺物	60
第23図 遺物包含層出土遺物(7)	25	第47図 周辺の調査区	62
第24図 大野田官衙遺跡と周辺の遺跡	37	第48図 北目城跡と周辺の遺跡	69
		第49図 第21次調査区位置図	70

第50図	第21次調査区配置図	70	第64図	富沢館跡と周辺の遺跡	93
第51図	1T調査区平面・断面図	71	第65図	第22次・23次・24次調査区位置図	94
第52図	2T調査区平面・断面図	72	第66図	第22次調査区配置図	94
第53図	3T調査区平面・断面図	72	第67図	第22次調査区平面・断面図	95
第54図	第21次調査出土遺物	73	第68図	第22次調査出土遺物	97
第55図	北目城跡検出堀跡位置図	75	第69図	第23次調査区配置図	98
第56図	富沢遺跡と周辺の遺跡	79	第70図	第23次調査区平面・断面図	99
第57図	第153次調査区位置図	80	第71図	第23次調査出土遺物	100
第58図	第155次調査区位置図	80	第72図	第24次調査区配置図	102
第59図	第153次調査区配置図	81	第73図	第24次調査平面・断面図	103
第60図	第153次調査区平面図・断面図	83	第74図	第24次調査出土遺物(1)	104
第61図	第155次調査区配置図	87	第75図	第24次調査出土遺物(2)	105
第62図	第155次調査区平面・断面図	89	第76図	富沢館跡 検出堀跡位置図	108
第63図	富沢遺跡における条里型土地画復元図	90			

## 挿表目次

表1	令和3年度 公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧	2
表2	令和4年度 公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧	2
表3	SBI・2・3掘立柱建物跡土層注記	51

## 写真図版目次

写真図版1	今泉遺跡第17次調査(1)	9	写真図版18	郡山遺跡第320次調査(3)	65
写真図版2	今泉遺跡第17次調査(2)	10	写真図版19	郡山遺跡第320次調査出土遺物(1)	66
写真図版3	今泉遺跡第17次調査出土遺物	10	写真図版20	郡山遺跡第320次調査出土遺物(2)	67
写真図版4	大野田遺跡第5次調査(1)	27	写真図版21	郡山遺跡第320次調査出土遺物(3)	68
写真図版5	大野田遺跡第5次調査(2)	28	写真図版22	北目城跡第21次調査(1)	76
写真図版6	大野田遺跡第5次調査(3)	29	写真図版23	北目城跡第21次調査出土遺物(1)	77
写真図版7	大野田遺跡第5次調査(4)	30	写真図版24	北目城跡第21次調査出土遺物(2)	78
写真図版8	大野田遺跡第5次調査(5)	31	写真図版25	富沢遺跡第153次調査(1)	84
写真図版9	大野田遺跡第5次調査出土遺物(1)	32	写真図版26	富沢遺跡第153次調査(2)	85
写真図版10	大野田遺跡第5次調査出土遺物(2)	33	写真図版27	富沢遺跡第153次調査(3)	86
写真図版11	大野田遺跡第5次調査出土遺物(3)	34	写真図版28	富沢遺跡第155次調査(1)出土遺物	91
写真図版12	大野田遺跡第5次調査出土遺物(4)	35	写真図版29	富沢遺跡第155次調査(2)	92
写真図版13	大野田遺跡第5次調査出土遺物(5)	36	写真図版30	富沢館跡第22次調査・出土遺物	97
写真図版14	大野田官衙遺跡第22次調査(1)	41	写真図版31	富沢館跡第23次調査・出土遺物	101
写真図版15	大野田官衙遺跡第22次調査(2)出土遺物	42	写真図版32	富沢館跡第24次調査	106
写真図版16	郡山遺跡第320次調査(1)	63	写真図版33	富沢館跡第24次調査出土遺物	107
写真図版17	郡山遺跡第320次調査(2)	64			

## 第1章 調査計画と実績

## 第1節 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課

令和3年度

【文化財課】 課長 都丸晃彦 主査(調整担当) 長島栄一

【調査調整係】 係長 平間亮輔

主査 及川謙作 近藤勇亮 菅原翔太 主任 堀江洋介

主事 庄子裕美 澤目雄大 相川ひとみ 柳澤 楓 木村 恒 早川太陽

専門員 斎野裕彦 会計年度任用職員 篠原信彦

【整備活用係】 係長 工藤慶次郎 主査 元山祐一 小浦真彦

主任 堀越 研 勝又 康 主事 五十嵐 愛 妹尾一樹

令和4年度

【文化財課】 課長 都丸晃彦 主査(調整担当) 長島栄一

【調査調整係】 係長 及川謙作

主査 近藤勇亮 主任 堀江洋介

主事 澤目雄大 相川ひとみ 須貝慎吾 早川太陽 吉田 大 山口沙織

専門員 荒井 格 会計年度任用職員 鈴木利枝

【整備活用係】 係長 工藤慶次郎 主査 小浦真彦 菅原翔太

主任 堀越 研 勝又 康 主事 庄子裕美 五十嵐 愛 妹尾一樹

会計年度任用職員 主演光朗

## 第2節 調査計画

国、宮城県、仙台市が実施する各種の整備事業（公共事業）および民間の開発に伴う発掘調査を想定し、計画した。

## 第3節 調査実績

令和3年度～令和4年度（令和4年1月～令和4年12月）にかけて実施された調査は表1、2の通りで、公共事業が6件、民間開発が30件、合計36件である。本書に収録したのはこのうちの8件と、それ以前に実施した2件の合計10件である。

表1 令和3年度 公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧

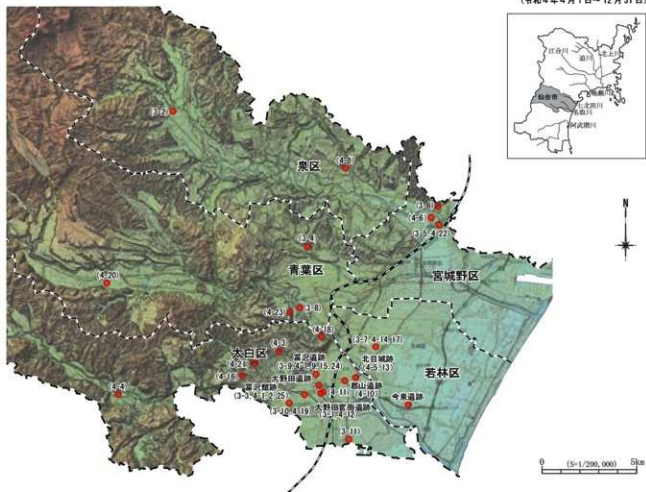
区分	調査№	公共・民間	遺跡名	所在地	調査理由	対象面積(m <sup>2</sup> )	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査期間	遺構・遺物	届出率%	報告書
3-1	R3-46	民間	大野宮古墳遺跡・舟形遺跡	仙台市太白区大野田5丁目	共同住宅	149.8	38.5	1月17～19日	溝溝9条、土師器	R3 109-98	-
3-2	R3-48	公共	櫻橋4遺跡	仙台市泉区福岡字榎森	水路改修	35	35.0	1月12日	溝溝、遺物なし	-	-
3-3	R3-51	民間	廣沢船跡第22次	太白区廣沢西1丁目	共同住宅	118.3	32.0	1月21～2月1日	堀溝1条、陶磁器・瓦	R3 109-121	第22次
3-4	R3-52	民間	穴田東遺跡	青葉区堀町2丁目	宅地造成	16.7	-	1月21日	溝溝、遺物なし	R3 109-109	-
3-5	R3-57	公共	橋ノ瀬遺跡隣接地	宮城野区岩切字高江	道路拡幅	約2800	180.6	2月14～3月18日	溝溝・ピット、土師器・埴輪器	R30 109-63	-
3-6	R3-58	民間	化粧坂遺跡	宮城野区岩切字羽黒原	療養住宅	92.5	6.0	2月14～15日	溝溝、遺物なし	R3 109-124	-
3-7	R3-59	民間	南小泉遺跡	若林区遠見塚2丁目	老人ホーム	554.57	36.0	2月16～18日	小塚1条・井戸跡1基、土師器	R3 109-120	-
3-8	R3-60	公共	桜ヶ岡公園遺跡	青葉区桜ヶ岡公園3丁目	公園整備	27.7	7.5	3月3日	土坑1基、陶磁器・瓦	R22 117-1	-
3-9	R3-62	民間	廣沢船跡153次	太白区泉原1丁目	共同住宅	203.08	32.0	3月14～3月24日	水田耕作土	R3 109-100	第153次
3-10	R3-63	民間	京ノ中遺跡	太白区廣沢西3丁目	宅地造成	767.53	120.0	3月22～24日	溝溝1条、土師器	R3 109-132	-
3-11	R3-64	民間	渡河原遺跡	太白区中田町字渡河原	宅地造成	376.16	65.0	3月24～25日	土師器・陶器	R3 109-130	-

(令和4年1月17日～3月31日)

表2 令和4年度 公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧

図号	調査種	公共・民間	道路名	所在地	調査事業	対象面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	調査期間	遺構・遺物	掘出率%	報告書
4-1	R4-4	民間	富沢駅前第23次	太白区富沢西1丁目	高岡住宅	237.1	36.0	4月25～28日	磁器、瓦	R2 102-129	第23次
4-2	R4-6	民間	富沢駅前第24次	太白区富沢西1丁目	高岡住宅	226.3	18.0	4月25～28日	磁器、灰磁器	R3 109-163	第24次
4-3	R4-6	民間	芥ノ口遺跡	太白区西の平1丁目	宅地造成	893.2	18.0	5月9日	遺構、遺物なし	R4 104-23	-
4-4	R4-7	公共	内城1遺跡	太白区坪田字山田	バイオ実験施設	2350.0	153.0	5月11～6月21日	陶磁器	R3 103-58	-
4-5	R4-11	民間	北日遺跡第21次	太白区鹿山字北首宅地	宅地造成	83.5	9.0	5月23～24日	磁器、陶磁器	R3 109-147	第21次
4-6	R4-12	民間	今市東遺跡	宮城野区岩切字今市東の一部	区画整理	1074.0	1107.7	5月23～8月8日	遺物包含箱、弥生土器	R01 102-60	次年度以降
4-7	R4-13	民間	富沢遺跡第155次	太白区富沢3丁目	事務所築造	79.1	18.0	6月1～9日	水田耕作土、陶磁器	R3 109-145	第155次
4-8	R4-14	民間	新道遺跡	泉区市毛原島舟形	高岡住宅	463.7	9.0	6月6日	遺構、遺物なし	R4 104-55	-
4-9	R4-16	民間	富沢遺跡第136次	太白区富沢南4丁目	療養住宅	62.6	18.0	6月13～15日	埴野2条(古代)・水田跡、陶磁器	R4 104-61	次年度以降
4-10	R4-17	民間	郡山遺跡第320次	太白区郡山3丁目	高岡住宅	313.4	230.0	6月23～9月30日	稲立柱礎跡、土師器・灰磁器、瓦・円面磁瓦	R3 109-161	第320次
4-11	R4-18	民間	元泉遺跡	太白区大野田5丁目	高岡住宅	333.2	30.0	6月18日	遺構、遺物なし(河川堆積層)	R4 105-11	-
4-12	R4-30	民間	大野田官舎遺跡第22次	太白区大野田5丁目	高岡住宅	140.7	57.0	6月23～26日	稲立柱礎跡、土師器	R4 105-18	第22次
4-13	R4-31	民間	北日遺跡第21次	太白区郡山字北首宅地	療養住宅	85.4	24.0	6月22～25日	磁器、陶器・磁器	R4 104-173・175・176	第21次
4-14	R4-33	民間	南小泉遺跡	若林区湯原2丁目	高岡住宅	147.7	30.5	6月29～31日	遺構、遺物なし	R4 105-21	-
4-15	R4-34	民間	富沢遺跡第156次	太白区富沢南4丁目	高岡住宅	455.6	115.0	6月22～10月7日	水田跡・埴野2・足持遺構、土師器・灰磁器・瓦	R3 109-143	次年度以降
4-16	R4-35	民間	引藤堂前B遺跡	太白区山田北郷町	療養住宅	65.5	12.0	6月6日	遺構、遺物なし	R4 104-152	-
4-17	R4-39	民間	南小泉遺跡	若林区湯原4丁目	宅地造成	240.0	28.0	6月21～22日	遺構なし、土師器片	R4 105-21	-
4-18	R4-40	民間	愛宕山麓A墓群	太白区山田4丁目	高岡住宅	100.1	12.0	10月3～4日	谷砂地、遺物なし	R4 105-20	-
4-19	R4-43	民間	宮ノ中遺跡	太白区富沢西3丁目	療養住宅	186.3	36.0	10月20～21日	ビット1基、灰磁器	R4 104-250・251	-
4-20	R4-45	民間	平治遺跡	青葉区上愛子字橋本	宅地造成	54.0	3.0	11月7日	遺構、遺物なし	R4 105-47	-
4-21	R4-46	民間	静養平遺跡跡地	太白区静養平地	区画整理	119000.0	2.0	11月14日	遺構、遺物なし	R4 109-119	-
4-22	R4-47	公共	鴻ノ巣遺跡跡地	宮城野区岩切字高江	道路拡幅	400.0		11月16～24日	埴野	R4 静養北郷293号	-
4-23	R4-49	公共	新台地跡	青葉区川内遺跡	緑化フェア	61.7	225.0	11月29～30日	石積遺構、静養口・陶磁器	R4 106-22	次年度以降
4-24	R4-50	民間	富沢遺跡156次	太白区富沢南4丁目	療養住宅	70.3	18.0	12月1～6日	燗鍋、埴野、水口、灰磁	R4 104-320	次年度以降
4-25	R4-55	民間	富沢駅前	太白区富沢西1丁目	水田跡	184.7	12.0	12月19日	磁器	R4 104-352	次年度以降

(令和4年4月1日～12月31日)



第1図 令和3～4年度調査地点位置図(国土地理院地図を一部改変)

## 第2章 今泉遺跡の調査

### 第1節 遺跡の概要

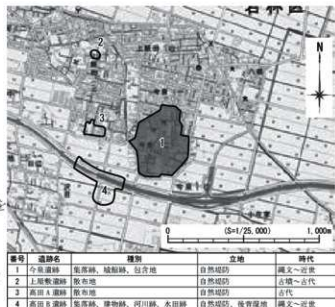
今泉遺跡はJR仙台駅の南東約6.5km、仙台南部道路今泉インターの北西約500mに位置し、標高約2～3mの自然堤防上に立地している。本遺跡は、文献などにより須田玄播が居住した中世の城館「今泉城」として古くから知られていた『仙台領古城書立之覚書』が、これまでの調査で、縄文時代後期から近世にかけての複合遺跡であることが明らかにされている。

遺跡の主体は、中世の城館である今泉城に関わる遺構群である。城館の構造は不明確であるが、外堀の範囲が想定されており、想定範囲付近から複数の溝跡が発見されている。その内側には、掘立柱建物跡や井戸跡、溝跡などの遺構が数多く発見されており、12世紀代に屋敷が造られ、その後、南北朝時代に城館として改変・整備され、17世紀前半頃まで使われていた変遷が推定されている。

### 第2節 第17次調査

#### 1. 調査要項

遺跡名	今泉遺跡 (宮城県遺跡登録番号01235)
調査地点	仙台市若林区今泉二丁目62 外7筆
調査期間	令和3年12月20日～22日
調査対象面積	282.01㎡
調査面積	97.12㎡
調査原因	道路、給排水、側溝および盛土を 伴う宅地造成
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課 調査調整係
担当職員	主査 及川 謙作 主事 早川 太陽



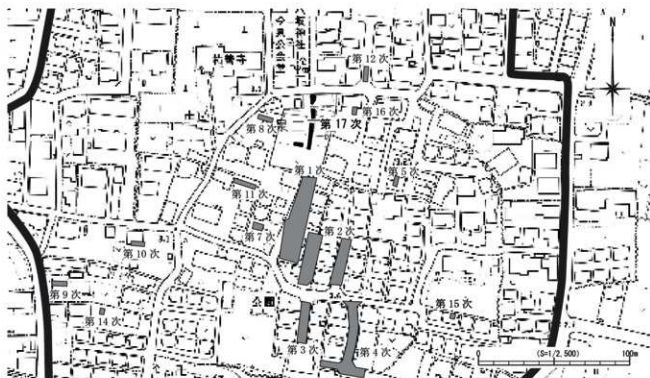
第2図 今泉遺跡と周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	今泉遺跡	堀原跡、埴原跡、堀井地	自然堤防	縄文～近世
2	上原敷遺跡	敷布地	自然堤防	古墳～古代
3	高田A遺跡	敷布地	自然堤防	古代
4	高田B遺跡	堀原跡、建物跡、河川跡、水田跡	自然堤防、後背盛地	縄文～近世

#### 2. 調査に至る経過と調査方法

本件は令和3年10月8日付で申請者から提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（令和3年10月14日付R3教生文第109-91号で回答）に基づき実施した。

調査は宅地造成工事予定地のうち、道路建設予定地内の給排水管設置に伴う掘削が遺構面に及ぶ範囲を中心に調査区（1～4トレンチ）を設定した。重機により各調査区の盛土および基本層Ⅰ～Ⅱ層除去後、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層上面（GL-0.5～1.0m程度）で遺構検出作業を行った。その結果、堀跡2条、溝跡1条、井戸跡1基、水田耕作層が検出された。遺物は各トレンチの基本層および遺構の堆積土中から陶器、磁器、瓦（近世以降）、種子などの自然遺物が出土した。調査は給排水管設置に伴う掘削が及ぶ深度までに留めているため、各遺構の調査は一部を除き検出までにとどめている。



第3図 第17次調査区位置図

遺構の記録は、調査区平面図および断面図 (S=1/20) を作製し、記録写真はデジタルカメラを用いて行った。

### 3. 基本層序

今回の調査では、基本層を5層、細別で12層確認した。遺構検出作業を行ったⅢ層上面までの深度は、1トレンチ付近でGL-0.5m、4トレンチでGL-0.9mである。

I a層 5Y2/2 オリーブ黒色シルト質粘土。灰オリーブ色粘土ブロックを斑状に含み、層厚は約10cmである。2Tで確認された。

I b層 5Y2/2 オリーブ黒色砂質シルト。ほぼ均質な層で、層厚は約14cmである。2Tで確認された。畑の耕作層か。

I c層 10YR3/3 暗褐色シルト質粘土。酸化鉄粒を斑状に含み、層厚は約8～35cmである。

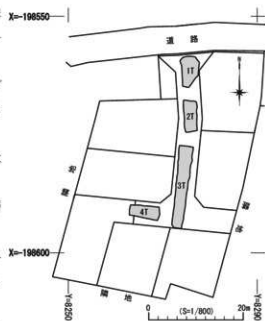
I d層 10YR3/3 暗褐色シルト質粘土。酸化鉄粒を斑状に、場所によっては炭化粒も少量含む。層厚は約0～49cmである。1T以外で確認された。

I e層 10YR4/4 褐色シルト。炭化粒を少量含む。層厚は約0～20cmである。4Tで確認された。

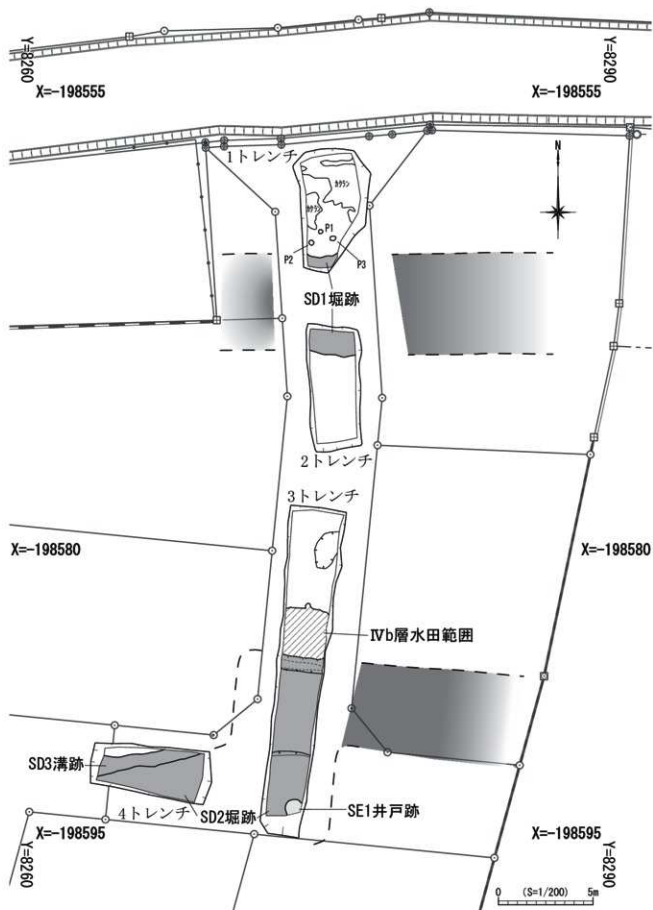
I f層 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。黒色粘土ブロックを少量含む。層厚は約0～26cmである。4Tで確認された。

I g層 10YR4/4 褐色シルト。黒色粘土ブロックを少量含む。層厚は約0～19cmである。4Tで確認された。

II a層 10YR4/4 褐色粘土質シルト。黒色粘土ブロック、白色粘土ブロックを斑状に含む。層厚は約0～8cmである。2Tで確認された。土層崩落後の耕作土か。

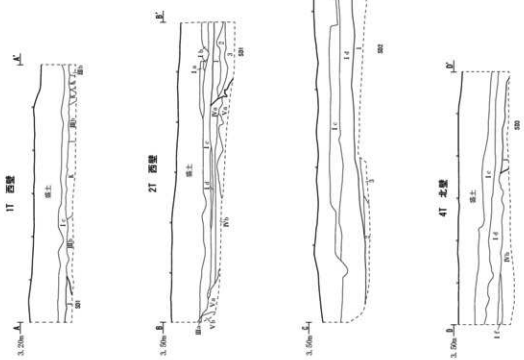


第4図 第17次調査区配置図



第5図 第17次調査遺構配置図

調査区	調査点	層位	地質	土質	備考・掘入時
1T	1	10193.1	砂質シルト	砂質シルト (φ 3 mm) 各層位に多量、灰化層 (φ 1 cm) を少量含む。	
	2	10193.2	黒褐色シルト	黒土	灰化層 (φ 2 mm) を少量含む。
	3	10193.3	黒褐色シルト	黒土	灰化層 (φ 2 mm) を少量含む。
2T	1	10193.1	砂質シルト	砂質シルト (φ 3 mm) 各層位に多量、灰化層 (φ 1 cm) を少量含む。	
	2	10193.2	黒褐色シルト	黒土	灰化層 (φ 2 mm) を少量含む。
	3	10193.3	黒褐色シルト	黒土	灰化層 (φ 2 mm) を少量含む。
3T	1	10193.1	砂質シルト	砂質シルト (φ 3 mm) 各層位に多量、灰化層 (φ 1 cm) を少量含む。	
	2	10193.2	黒褐色シルト	黒土	灰化層 (φ 2 mm) を少量含む。
	3	10193.3	黒褐色シルト	黒土	灰化層 (φ 2 mm) を少量含む。
4T	1	10193.1	砂質シルト	砂質シルト (φ 3 mm) 各層位に多量、灰化層 (φ 1 cm) を少量含む。	
	2	10193.2	黒褐色シルト	黒土	灰化層 (φ 2 mm) を少量含む。
	3	10193.3	黒褐色シルト	黒土	灰化層 (φ 2 mm) を少量含む。



第6図 第17次調査区断面図



- II b 層 10YR4/4 褐色粘土質シルト。白色粘土ブロックを少量含む。層厚は約0～22 cmである。3Tで確認された。
- II c 層 10YR4/4 褐色粘土質シルト。ほぼ均質である。層厚は約0～31 cmである。3Tで確認された。土塁構築土の可能性はある。
- III a 層 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。ほぼ均質である。層厚は約0～15 cmである。3Tで確認された。
- III b 層 10YR3/4 暗褐色シルト質粘土。場所によってはグライ化している。ほぼ均質である。層厚は約0～20 cmである。
- IV a 層 2.5YR4/2 暗灰黄色シルト質粘土。全体的にグライ化しラミナ状堆積である。1Tで確認された。層厚は約0～25 cmである。
- IV b 層 10YR3/4 暗褐色粘土。部分的に炭化粒を含み、一部グライ化している。層厚は約0～25 cmである。2～4Tで確認された。水田耕作層である。
- IV c 層 10YR2/2 黒褐色粘土。酸化鉄を多く含む。層厚は不明である。3Tで確認された。水田耕作層である。
- V a 層 2.5Y3/1 黒褐色粘土。全体的にグライ化している。ほぼ均質。層厚は約25 cm以上である。2Tで確認された。隣接するIV b 層の畦畔の可能性はある。
- V b 層 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土。酸化鉄が上層との境に堆積。層厚は約20 cmである。2Tで確認された。

#### 4. 発見遺構と出土遺物

遺構は堀跡が2条、溝跡が1条、ピットが3基、井戸跡が1基検出された。遺物は各遺構および基本層中から土師器、陶器、磁器、種子などが出土した。

##### SD1 堀跡

1 トレンチの南側から2 トレンチの北側にかけて検出された。東西方向の堀跡で、本調査区外へ延びる。II層上面から掘り込まれている。検出長は約2.6m、幅は約5.1m、深さは約0.5m以上である。堆積土は3層確認された。いずれも自然堆積と推測される。断面形状は不明だが南側の肩は傾斜角度約40度で掘り込まれている。遺物は桃ヤクルミ等の種子が出土した。

##### SD2 堀跡

3 トレンチから4 トレンチにかけて検出された東西方向の堀跡で、本調査区外へ延びる。また検出された位置関係から3 トレンチ付近で北側に屈曲しているものと推測される。SE1 井戸跡とSD3 溝跡と重複し、SE1 井戸跡とSD3 溝跡よりも古い。検出長は約12.0m、幅約8.6m以上、深さは約55cm以上である。断面形状は不明だが、3 トレンチで検出されたの北側の肩は傾斜角約52度で掘り込まれている。堆積土は3 トレンチでは5層、4 トレンチでは3層確認された。3 トレンチで確認された堆積層はいずれも自然堆積であると推測されるのに対し、4 トレンチで確認された堆積層はいずれもIII層以下の基本層を主体的に含んでいることから、人為的に埋め戻された層と判断される。層序の方向から西側から埋め戻されており、埋め戻しの際には堀に付随していた土塁の積み土を利用した可能性がある。

遺物は3 トレンチから磁器などが出土した。磁器は肥前、波佐見および大塚相馬産で、いずれも18世紀代に比定される。

##### SD3 溝跡

4 トレンチの北側で検出された。東西方向の溝跡で、方位はE-14°-Nで本調査区外へ延びる。SD2 堀跡と重複

## 第2節 第17次調査

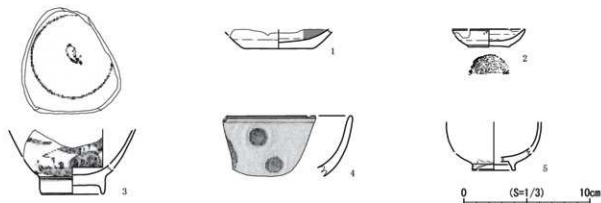
しこれよりも新しい。検出長は約5.7m、幅約1.0m、深さは約0.5m以上である。堆積土は1層確認された。遺物は出土していない。

### SE1 井戸跡

3トレンチの南側で検出された。SD2堀跡と重複しこれよりも新しい。平面形状は円形を呈するものと推定される。検出規模75×84cmだが、約1.0mの規模になるものと推定される。遺物は出土していない。

### その他の出土遺物

3トレンチを中心に土師器や土師質土器などが出土した。基本層中から出土しているものの油煙の付着している土師質土器 (Ia-1) は、SD2堀跡に付随していた可能性がある。



図録番号	発掘番号	出土遺物	層位	種別	器種	寸法 (cm)		外面	内面	備考	写真掲載	
						口径	高さ					
1	0-1	3T		土師器	深	—	(5.4)	(1.3)	黒色処理	ロクロナデ	3-1	
2	Ia-1	3T	1 m	土師質土器	小皿	(5.7)	3.2	1.4	ロクロナデ 口・スス付着 蓋：割断面切取	黒色処理	ロクロナデ	3-2
3	J-1	SD2 (3T)		磁器	碗	—	4.9	5.1	染付 山水文 (湯山・翠)	彫曲	18c 後半	3-3
4	J-2	SD2 (3T)		磁器	碗	—	—	—	染付 丸文	彫曲	18c くらわん小茶碗	3-3
5	J-3	SD2 (3T)		磁器	碗	—	(3.4)	(3.4)	白磁焼	白磁焼	大坂前期 18c 後半	3-5
-	0-1	SD1	-	植物遺体	種子	-	-	-	-	焼	写真掲載のみ	3-6
-	0-2	SD1	-	植物遺体	種子	-	-	-	-	クルミ	写真掲載のみ	3-7

第7図 第17次調査出土遺物

### 5. まとめ

調査地点は今泉遺跡の中央部のやや北側に位置する。これまでの調査で、今回の調査区北側の道路の両脇に沿うような形で城を区画する堀跡や区画溝等が確認されており、今回の調査地点も同様の堀が検出される可能性が考えられた。

今回の調査では、調査区内から堀跡2条、溝跡1条、ビット3基、井戸跡1基が検出された。このうちSD1堀跡は第8・11・16次調査で検出された堀跡の延長線上に位置しており、同一の堀跡であると推測される。SD1堀跡の推定範囲上に現在も地境が存在するが、これは過去の堀跡の区画を踏襲したものと推測される。SD2堀跡はSD1堀跡の内側を区画した堀跡であると推測され、第11次と第16次で検出された堀跡も一連の遺構の可能性はある。堀の検出状況から3トレンチはSD2堀跡の屈曲部分にあたるものと推測される。幅などの規模は不明だが、調査区北側の道路を挟んだ位置に八坂神社が現存することから、何らかの関連性が窺える。堀の堆積土は3トレンチではいずれも自然堆積で、出土遺物から18世紀代には埋没していったものと推測される。4トレンチで確認された土層はいずれも埋戻土であり、土層の状況から周囲には土塁が存在し、その土を用いて埋戻しを行ったものと推測される。またSD1堀跡とSD2堀跡に隣接する形で、より古い時代の水田耕作層が確認された。SD1・2堀跡の間の遺構検出面は堀跡のレベルよりも約20～40cm高くなっており、比較的低い部分を選んで古い時期には水田が営まれ、その後堀が掘り込まれたものと推測される。





1. SD1 掘跡範囲 (東から)



2. 2T 遺構検出状況 (南から)



3. 3T 調査区西壁土層断面 (SD2 掘跡周辺・東から)



4. 4T 遺構検出状況 (東から)



5. 4T 調査区北壁土層断面 (南東から)



6. 4T 調査区南壁土層断面 (北西から)

写真図版2 今泉遺跡第17次調査 (2)



写真図版3 今泉遺跡第17次調査出土遺物

## 第3章 大野田遺跡の調査

### 第1節 遺跡の概要

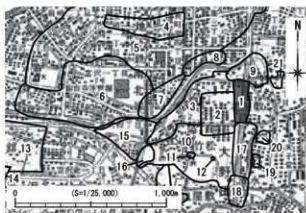
大野田遺跡は仙台市太白区大野田に所在しており、JR 太子堂駅の西約500m、地下鉄南北線富沢駅の北東約700mの地点に位置する。名取川の支流の笹川が名取川に合流する前に大きく蛇行する右岸の自然堤防上に立地し、標高は9～10mで、東西約100m、南北250mで、面積は約24000㎡である。南側には王ノ塚遺跡、西側には袋前遺跡、六反田遺跡などが所在しており、遺跡の周囲は仙台市内でも数多くの遺跡が所在する地域である。この他にも縄文時代から奈良時代の集落である下ノ内遺跡、多数の円墳が検出された大野田古墳群、奈良時代の官衙跡とされる大野田官衙遺跡（当遺跡と一部範囲重複）と隣接している。この他にも周辺の遺跡からは縄文時代から近世の遺構や遺物が多数確認されている。

本遺跡の発掘調査次数はこれまでに4回を数え、縄文時代の祭祀遺構、古代の集落跡、畑跡が確認されている。特に都市計画道路建設に伴い1993～1995年に実施された第1次調査では、縄文時代後期前葉の環状集石や配石遺構などが検出され、多量に出土した遺物の中でも土偶は300点を超えており、大野田遺跡が居住域から外れた祭祀に関わる地域であったことが考えられ重要である。

### 第2節 第5次調査

#### 1. 調査要項

遺 跡 名	大野田遺跡 (宮城県遺跡登録番号01094)
調 査 地 点	仙台市太白区大野田五丁目5-2
調 査 期 間	令和3年10月25日 ～12月24日
調査対象面積	316.94㎡
調 査 面 積	約120㎡
調 査 原 因	事務所新築工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部 文化財課調査調整係
担 当 職 員	主査 及川謙作 主任 堀江洋介 主事 柳沢 楓 早川太陽



番号	遺跡名	種別	立地	時代	
1	大野田遺跡	自然堤防	乳溝跡	縄文(後)・弥生(中)・古墳～平安	
2	大野田官衙遺跡	自然堤防	官衙跡	古墳～奈良	
3	六反田遺跡	自然堤防	乳溝跡	縄文(中～後)～近世	
4	袋崎遺跡	自然堤防	水田跡・墓地	縄文(後)・弥生～古墳・平安	
5	富沢遺跡	後背遺地	乳溝跡・水田跡・墓石地	旧石器～近世	
6	山口遺跡	自然堤防	後背遺地	乳溝跡・水田跡	縄文～平安
7	下ノ内遺跡	自然堤防	後背遺地	乳溝跡・墓跡・水田跡	縄文(早・前・後)～中世
8	袋前遺跡	自然堤防	包苜地	古墳・平安	
9	三森遺跡	自然堤防	乳溝跡	奈良～平安	
10	大野田古墳群	自然堤防	古墳・乳溝跡	縄文～中世	
11	春日社古墳	自然堤防	古墳	古墳	
12	鳥居塚古墳	自然堤防	古墳	古墳	
13	富沢古墳	自然堤防	墳墓跡	戦国	
14	袋崎集石前遺跡	自然堤防	乳溝跡	縄文・奈良～中世	
15	下ノ内遺跡	自然堤防	乳溝跡・墓地	縄文(中～後)～中世	
16	伊古田遺跡	自然堤防	乳溝跡	縄文～平安	
17	王ノ塚遺跡	自然堤防	乳溝跡・居敷跡	縄文(後)～中世	
18	鹿野敷遺跡	乳溝跡・生産遺跡・居敷跡・古	自然堤防	奈良～平安・中世	
19	長町水田遺跡	古墳跡	自然堤防	古墳跡	
20	北原敷遺跡	乳溝跡	自然堤防	奈良～平安	
21	新田遺跡	乳溝跡	自然堤防	奈良～平安	

第9図 大野田遺跡と周辺の遺跡



第10図 第5次調査区位置図

## 2. 調査に至る経過と調査方法

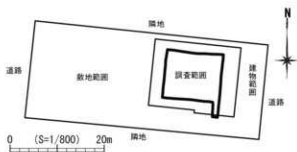
今回の調査は、申請者から令和3年7月21日付で提出された「埋蔵文化財の取扱いについて(協議)」(令和3年7月28日付R3教生文第109-55号で回答)に基づき実施した。

調査では対象地内に東西約12.0m×南北約10.0mの調査区を設定し、重機により盛土および基本層Ⅰ層除去後、Ⅱb層上面(GL-1.3～1.4m)で遺構検出作業を行った。結果、溝跡3条、土坑2基、ピット22基が検出された。Ⅱb層上面の調査終了後、調査区を狭めて下層調査のために掘り下げを行ったところ、基本層Ⅲ～Ⅳ層中からは縄文土器や石器などが多く出土した。基本層Ⅴ層上面で遺構検出作業を行ったが、遺物は出土しなかった。

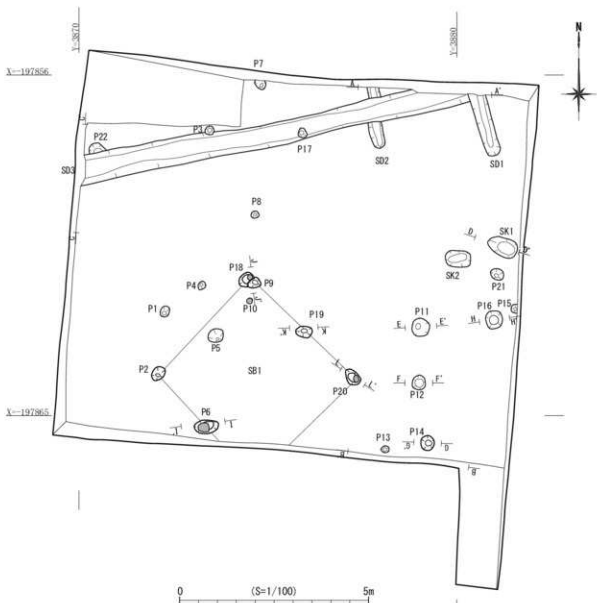
調査では必要に応じて、調査区平面図(S=1/20)および調査区断面図(S=1/20)を作成し、デジタルカメラにより記録写真の撮影を行った。

## 3. 基本層序

今回の調査では、基本層が大別5層、細別8層確認された。遺構検出作業を行ったⅡb層上面までの深さは約1.3mである。



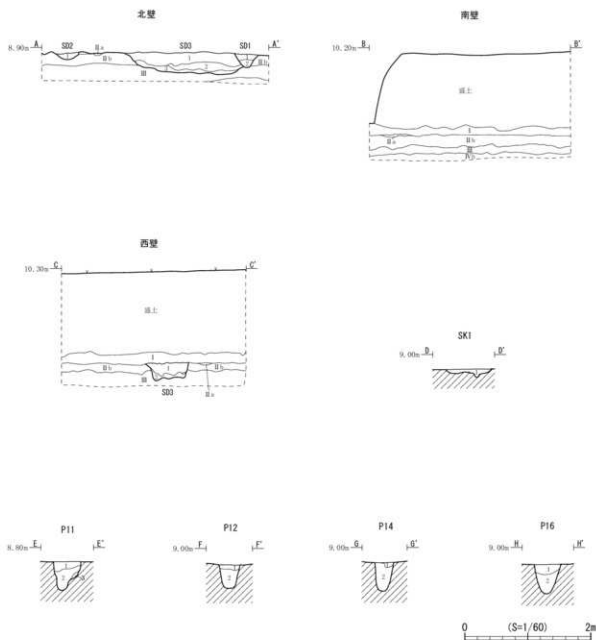
第11図 第5次調査区配置図



第12図 第5次調査区平面図

- I 層：10YR6/1 粘土。グライ化している。層中に現代のゴミ等を含む。盛土以前の水田耕作土である。
- II a 層：10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト。I 層との境に酸化鉄が集積する。マンガンを多く含む。部分的に検出された。II b 層上面で上層の水田耕作土の影響を大きく受けた部分であると考えられる。
- II b 層：10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト。I 層との境に酸化鉄が集積する。マンガンを含む。古代の遺構検出面であり、縄文時代の遺物包含層である。第1次調査で確認された基本層Ⅲ層に対応する。
- III 層：10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト。マンガン粒を含む。縄文時代の遺物包含層である。河川の流れ込みによる堆積層と推定される。
- IV a 層：10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト。部分的に確認された。10YR4/2 灰黄褐色粘土を含む。縄文時代の遺物包含層である。河川の流れ込みによる堆積層と推定される。
- IV b 層：10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。IV a 層に比べ色調が暗い。河川の流れ込みによる堆積層と推定される。
- V a 層：10YR4/6 褐色シルト質砂。粗砂、礫（ $\phi$  3 mm）を含む。河川の流れ込みによる堆積層と推定される。
- V b 層：10YR4/6 褐色砂。礫（ $\phi$  5 mm～10 cm）、粗砂を多く含む。河川の流れ込みによる堆積層と推定される。

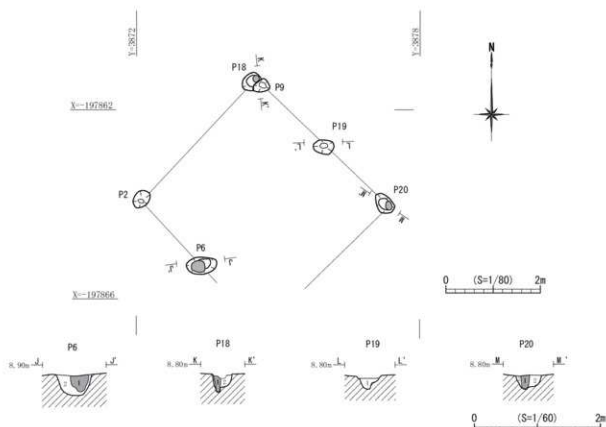
第2節 第5次調査



遺構名	層位	色調	土質	備考・記入物
SK1	1	T.33K3/2 黒褐色	砂質シルト	基本層B層含む
	2	T.33K3/2 黒褐色	砂質シルト	基本層B層含む
S01	1	T.33K3/2 黒褐色	砂質シルト	基本層B層含む
	2	H03R4/4 褐色	砂質シルト	基本層B層多く含む。
S02	1	H03R4/4 褐色	砂質シルト	基本層B層含む
	2	H03R3/3 緑褐色	粘土質シルト	基本層B層を少量含む。
S00	1	H03R3/3 緑褐色	粘土質シルト	基本層B層を含む。
	2	H03R3/3 緑褐色	粘土質シルト	基本層B層を含む。
	3	H03R4/4 褐色	砂質シルト	基本層B層主体。緑褐色粘土ブロックを少量含む。マンガンを少量含む。
P11	1	T.33K3/2 黒褐色	粘土質シルト	基本層B層を含む。
	2	H03R4/4 褐色	粘土質シルト	基本層B層含む。
P12	1	T.33K3/2 黒褐色	粘土質シルト	基本層B層含む。
	2	H03R4/3 に近い黄褐色	粘土質シルト	基本層B層含む。
P14	1	H03R4/4 褐色	砂質シルト	基本層B層含む。
	2	H03R4/3 に近い黄褐色	粘土質シルト	基本層B層含む。
P16	1	H03R4/4 褐色	粘土質シルト	基本層B層含む。
	2	T.33K3/2 黒褐色	粘土質シルト	基本層B層含む。

第13図 第5次調査区断面図





第14図 SBI掘立柱建物跡平面・断面図

遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
P6	1	10YR4/3 濃い黄褐色	粘土質シルト	柱痕跡、基本層B層含む。
	2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	基本層B層主体、暗褐色粘土ブロック含む、磁方礫土
P18	1	7.5YR3/2 濃褐色	粘土質シルト	柱痕跡。
	2	10YR4/1 褐色	粘土質シルト	基本層B層主体、暗褐色粘土ブロック含む、磁方礫土
P19	1	7.5YR3/2 濃褐色	粘土質シルト	基本層B層含む。
	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物含む、柱痕跡。
P20	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	基本層B層含む、炭化物含む、磁方礫土
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	基本層B層含む、炭化物含む、磁方礫土

#### 4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、II b層上面から掘立柱建物跡1棟、溝跡3条、土坑2基、ピット17基が検出された。遺物は、各遺構およびII b層～V a層中で縄文土器、石器、土製品等が多数出土した。

V a層上面からピット4基、性格不明遺構1基が検出された。いずれも堆積土がIV層に色調・土質が似ているため、遺構ではなくIV層の土がくぼみに堆積したものである可能性もあるが、断面形がU字や皿形を呈していたため、遺構として調査を行った。

#### 【II b層上面検出遺構】

##### (1) 掘立柱建物跡

##### SBI掘立柱建物跡 (第12・14図)

調査区の南側で検出された。P2・6・18・19・21から構成される。検出された建物の規模は東西3間（北側長4.0m、南側長不明）、南北2間（西側長3.6m、東側長不明）である。南東隅の柱跡は調査区外南側にあると想定されるため、建物跡が調査区の南側へ広がる可能性がある。建物を構成するピットの平面形状は円形または楕円形を呈し、直径は約40～60cmである。P6・18・21で柱痕跡が確認された。規模は直径約16～24cmである。遺物は出土していない。

## 第2節 第5次調査

### (2) 溝跡

#### SD1 溝跡 (第12・13図)

調査区の北東側で検出された、南北方向に延びる溝跡である。SD3より新しい。検出長は1.6mで調査区外北側へ延びる。幅は0.4mで、深さは20cmである。断面形状はU字形を呈し、堆積土は2層である。遺物は出土していない。規模や方向から、第2次調査で確認された小溝1と一連の溝跡と考えられる。

#### SD2 溝跡 (第12・13図)

調査区の北側で検出された、南北方向に延びる溝跡である。SD3より古い。検出長は1.6mで調査区外北側へ延びる。幅は0.4mで、深さは10cmである。断面形状は皿形を呈し、堆積土は単層である。遺物は土師器片がわずかに出土した。規模や方向から、第2次調査で確認された小溝2と一連の溝跡と考えられる。

#### SD3 溝跡 (第12・13図)

調査区の北側で検出された、東西方向に延びる溝跡である。SD1、P3・17よりも古く、SD2、P22よりも新しい。検出長は10.4mで調査区外北東方向に延びる。幅は約0.7mで、深さは30cmである。断面形状は逆台形を呈し、堆積土は2層である。遺物は出土していない。

### (3) 土坑

#### SK1 土坑 (第12・13図)

調査区の東側で検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸0.8m、短軸0.5m程度である。断面形状は皿形を呈し、深さは約10cmである。堆積土は1層確認された。遺物は玉髓製の両面加工のある石器が1点出土した。石鏝の未成品の可能性がある。基本層II b層中に含まれていた遺物が混入したものであると考えられる。

#### SK2 土坑 (第12図)

調査区の東側で検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸0.7m、短軸0.4mである。断面形状は皿形を呈し、深さは約10cmである。堆積土は1層確認された。遺物は出土していない。

### (4) ビット

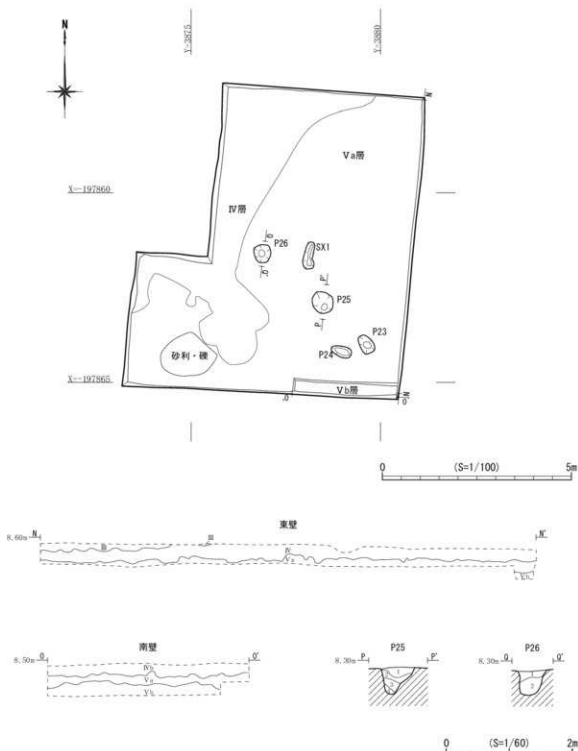
合計22基検出された。上述したようにP2・6・18・19・21は、掘立柱建物跡を構成する。P11・12・14・16は、柱痕跡は確認されなかったが、それぞれの位置関係から、掘立柱建物跡を構成する可能性がある。平面形状は円形および楕円形を呈し、直径20cm～60cm程度である。深さは15cm～43cmで、遺物は一部のビットから土師器片が出土した。

## 【基本層V a層上面検出遺構】

### (1) 性格不明遺構

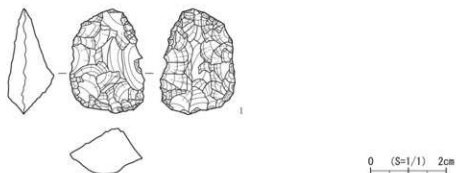
#### SX1 性格不明遺構 (第15図)

平面形状は長円形を呈し、長軸70cm、短軸20cmである。V a層上面で検出されたビットとは形が大きく異なるため、区別するため性格不明遺構とした。堆積土は1層で、粘土質シルトを主体としており、基本層IV層に似る。遺物は出土していない。



遺構名	層位	色調	土質	備考・埋入物
P23	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	砂粒を含む、小礫 (φ 5 cm) 含む。炭化粒わずかに含む
	2	10YR3/4 暗褐色	シルト	砂粒多く含む、炭化粒を多く含む。
P24	1	10YR4/2 二色・黄褐色	粘土質シルト	黒灰色砂を含む、白色砂含む
	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	基本層V層少量、黒灰色粘土少量
P25	2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	基本層V層少量、黒灰色粘土多く含む
	3	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	基本層V層少量、2層より黒粒あり。
	4	10YR4/2 灰黄褐色	砂	φ 5 mm程度の砂粒が主体
	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	黒灰色粘土を少量含む。
P26	2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	黒灰色粘土を多く含む。
	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	基本層V層少量含む、炭化物粒が含む
SX1	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	黒灰色粘土を多く含む。
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	

第15図 第5次下層調査区平面・断面図



第16図 SK1土坑出土遺物

## (2) ビット

## P23～26 (第15図)

ビットは4基検出された。平面形状はP25・26が円形を呈し、直径約40cm～50cm、P23・24は、楕円形を呈し、長軸約50cm、短軸約30cmである。いずれのビットからも柱痕跡は確認されていない。堆積土は、粘土質シルトを主体としており、基本層IV層に似る。遺物は出土していない。

## 【遺物包含層からの出土遺物】

## (1) 縄文土器

第17～19図は縄文土器である。出土したうちの38点を掲載した。内訳はII b層から6点、II b～III層から6点、III層から20点、IV a層から6点である。

第18図2・3、第19図1は深鉢である。第18図2・3は体部が口縁部にかけてやや内湾しており、第18図2はRL縄文、第18図3はLR縄文が施文されている。第17図8、第19図1は体部～口縁部が欠損しているが口縁部に向かって体部が外傾する器形と考えられ、底部に木葉痕が施文されている。

第17図11は鉢である。体部が口縁部に向かって緩やかに外反する。摩滅が激しいが部分的に外面にRL縄文が確認される。第17図4は浅鉢である。底部は欠損しているが、残存状況から丸底と考えられる。外面・内面ともに入念に磨きが施されており、光沢が見られる。内面には2条の沈線が施文されている。第20図2は壺である。体部がやや縦長で膨らみを持ち、口頭部は外傾する。体部には多条沈線が施文されている。第20図3は注口土器である。大部分が欠損しており、器形は不明である。注口部周囲には多条沈線が施文されている。

文様は地文のほか、沈線文が多く見られる。沈線文の種類としては、多条沈線文(第19図5・10・14)、櫛歯沈線文(第19図12)、格子状沈線文(第19図17)が確認される。器種は深鉢が最も多く、次いで鉢、浅鉢、壺、注口、ミニチュア土器である。

## (2) 土製円盤

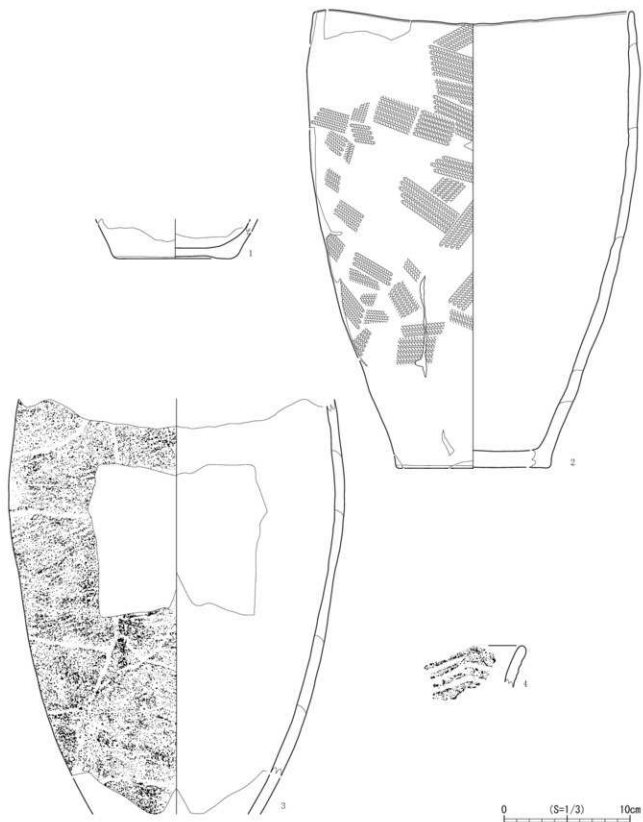
第22図5～14、第23図は土製円盤である。全体で34点出土した。内訳は、II b層から3点、II b～III層から8点、III層から20点、IV a層から2点、V a層から1点出土している。

今回出土したもので有孔のものは確認されなかった。平面形態の種類は、円形、楕円形、方形、不定形に分類される。



図版番号	登録番号	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
					口径	口径	器高				
1	A-21	II b	縄文土器	浅鉢	-	-	(4.3)	口：沈線文	体：沈線文		9-2
2	A-19	II b ~ III	縄文土器	浅鉢	-	-	(2.8)	口：繩物孔	口：沈線文		9-3
3	A-35	III	縄文土器	浅鉢	-	-	(3.4)	口～体：ナデ	口～体：沈線文		9-4
4	A-6	III	縄文土器	浅鉢	(15.8)	-	(7.2)	体：ミヅナ	口：沈線文 体：ミヅナ		9-5
5	A-13	II b ~ III	縄文土器	鉢	-	-	(5.9)	口～体：沈線文	-		9-6
6	A-16	II b ~ III	縄文土器	鉢	-	-	(4.6)	口：羽目目	-		9-7
7	A-34	II b ~ III	縄文土器	鉢	-	-	(2.0)	口：沈線文 沈線文	口：沈線文 沈線文	口：貫通穴2ヶ所	9-8
8	A-4	III	縄文土器	鉢	-	(12.4)	(5.0)	底：木葉痕	-		9-9
9	A-11	III	縄文土器	鉢	-	-	(7.3)	口：貫通孔 刺突文 体：除沈線文 L8 縄文	-		9-10
10	A-17	III	縄文土器	鉢	-	-	(4.7)	体：沈線文 紅 縄文 磨消	ナデ		9-11
11	A-5	IV	縄文土器	鉢	(10.3)	6.5	10.7	体：紅 縄文?	-		9-12
12	A-31	IV	縄文土器	鉢	-	-	(4.3)	体：沈線文	体：ナデ		9-13

第 17 図 遺物包含層出土遺物 (1)



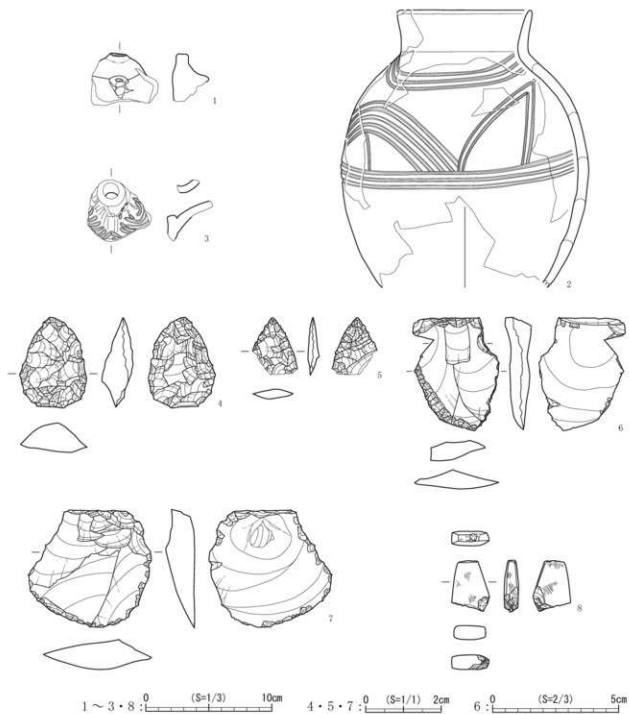
図面 番号	発掘 番号	層位	種別	器種	法量 (cm)		外面	内面	備考	写真 図版
					口径	底径				
1	A-7	II b	縄文土器	浅鉢	-	9.5 (12.8)			胎土に右肩小字 雑物により変色	9-11
2	A-1	II b	縄文土器	浅鉢	(25.2)	(12.0)	乱縄文			9-15
3	A-3	II b	縄文土器	浅鉢	-	-				10-1
4	A-20	II b	縄文土器	浅鉢	-	-	口：波縄文			10-2

第18図 遺物包含層出土遺物(2)



図録番号	登録番号	層位	種別	器種	法量 (cm)		外面		内面	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
1	A-23	IIb~III	縄文土器	深鉢	-	11.4	(1.3)	底：木炭痕			10-2
2	A-32	IIb~III	縄文土器	深鉢	-	-	(5.9)	口：跡み目 口：ナゲ	口：ナゲ		10-4
3	A-9	III	縄文土器	深鉢	-	(11.6)	(2.6)				10-5
4	A-24	III	縄文土器	深鉢	-	-	(3.5)	体：沈澱文 刺突文			10-6
5	A-12	III	縄文土器	深鉢	-	-	(8.3)	体：多条沈澱文	ナゲ		10-7
6	A-15	III	縄文土器	深鉢	-	-	(3.8)	体：L状縄文 沈澱文 磨消			10-8
7	A-14	III	縄文土器	深鉢	-	-	(4.6)	口~体：沈澱文 ナゲ	ナゲ		10-9
8	A-25	III	縄文土器	深鉢	-	-	-	口~体：沈澱文			10-10
9	A-22	III	縄文土器	深鉢	-	-	(5.9)	体：L状縄文			10-11
10	A-30	III	縄文土器	深鉢	-	-	(7.1)	体：多条沈澱文	体：ナゲ		10-12
11	A-23	III	縄文土器	深鉢	-	-	(3.1)	体：沈澱文			10-13
12	A-30	III	縄文土器	深鉢	-	-	(3.2)	体：磨削状沈澱文	体：ナゲ		10-14
13	A-37	III	縄文土器	深鉢	-	-	(5.7)	口~体：L状縄文 磨り消し	口~体：ナゲ		10-15
14	A-30	III	縄文土器	深鉢	-	-	(3.5)	体：L状縄文 沈澱文 刺突文			10-16
15	A-39	IV	縄文土器	深鉢	-	-	(6.0)	体：L状縄文			11-1
16	A-8	IV	縄文土器	深鉢	-	8.8	(2.2)			底部磨耗	11-2
17	A-26	IV	縄文土器	深鉢	-	-	(4.1)	口~体：沈澱文	口~体：筋子状沈澱文		11-3
18	A-43	IV	縄文土器	深鉢	-	-	(5.9)	口：沈澱文			11-4
-	A-40	III	縄文土器	深鉢	-	-	-			口：貫通孔 写真掲載のみ	11-5

第19図 遺物包含層出土遺物(3)

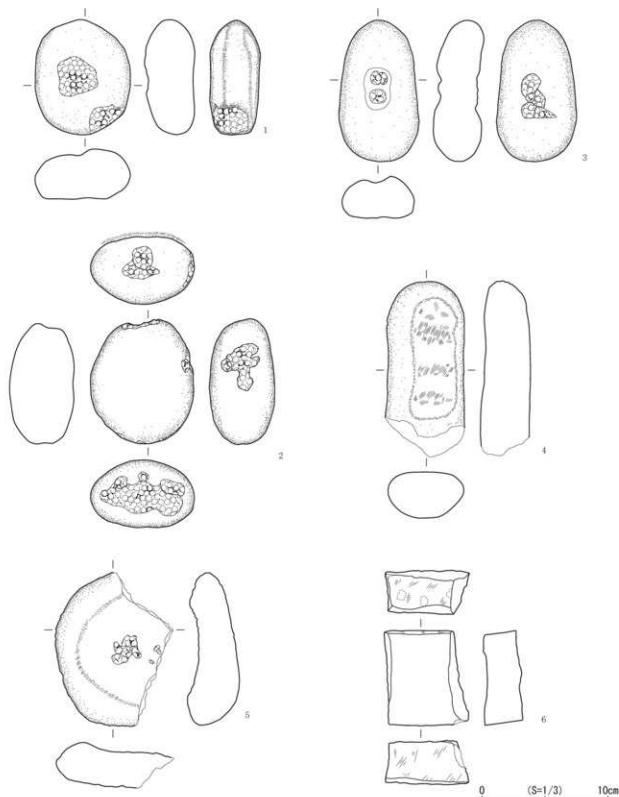


図版番号	登録番号	層位	種別	器種	法量 (cm)		外面	内面	備考	写真図版
					口径	器高				
1	B-41	Ⅲ	縄文土器	片断	-	(4.13)				11-6
2	A-2	Ⅲ	縄文土器	壺	106.41	(22.03)	体: 多条波線文	口縁部: 突起		11-7
3	B-29	Ⅲ	縄文土器	段口土器	-	(4.80)	注口: 波線文と波中			11-8
-	B-42	Ⅲ	縄文土器	壺片	-	-			把手: 写真掲載のみ	11-9

図版番号	登録番号	層位	種別	器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考	写真図版
					長さ	幅	厚さ			
4	B-1	Ⅲ	打製石器	石鏃	2.4	1.8	0.8	3.0	石鏃	11-10
5	B-5	Ⅲ	打製石器	石鏃	1.5	1.2	0.3	0.4	数石片	11-11
6	B-6	Ⅲ	打製石器	スクレイパー	4.5	3.4	0.7	11.2	打製片	11-12
7	B-3	Ⅲ	打製石器	スクレイパー	3.1	3.2	0.7	6.6	打製片	11-13
-	B-7	Ⅲ	打製石器	刮片	3.5	3.3	1.1	11.9	打製 欠ハネ痕あり 写真掲載のみ	11-15
8	B-2	Ⅲ	磨製石器	磨製石斧	(3.71)	(3.03)	1.1	23.7	磨製	11-14

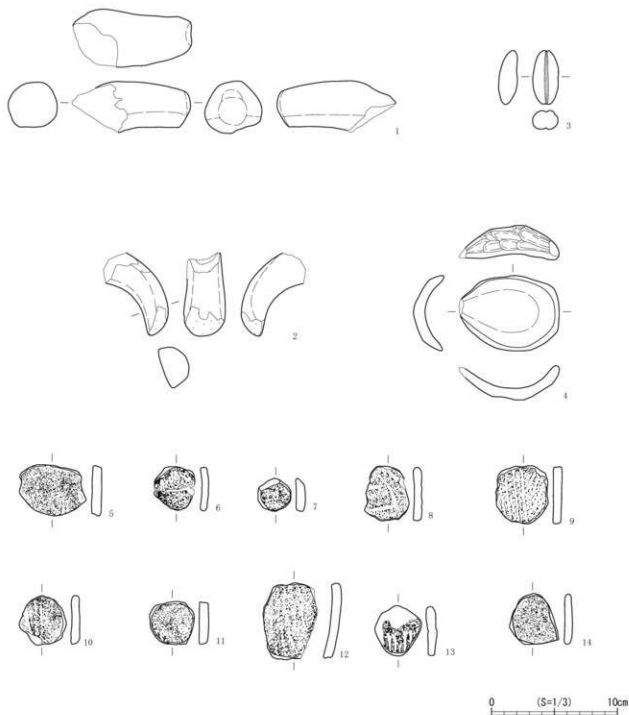
第20図 遺物包含層出土遺物(4)





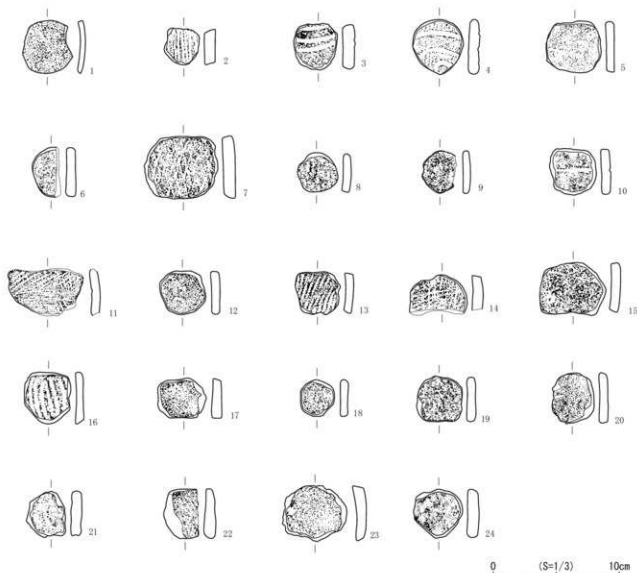
遺物 番号	発掘 番号	層位	種別	器種	寸法 (cm)			重量 (g)	備考	写真 収め
					長さ	幅	厚さ			
1	3-11	II b ~ III	磁石器	磨石	18.1	7.5	3.0	302	砂形 磨打版 2面 削2面 磨1面	12-1
2	3-12	IV	磁石器	磨石	19.7	8.2	5.2	490	砂形 磨打版 3面	12-2
3	3-10	III	磁石器	磨石	11.2	7.3	3.8	357	砂形 削2面	12-3
4	3-8	III	磁石器	磨石 (15.0)	6.3	3.9	490	安山岩 磨1面	12-4	
5	3-9	II b ~ III	石製品	石皿	12.2	18.2)	3.9	420	安山岩	12-5
6	3-13	II b ~ III	石製品	砥石	7.5	6.4	3.0	252	砂形	12-6

第21図 遺物包含層出土遺物(5)



図番 番号	登録 番号	層位	種別	器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考	写真 図版
					長さ	幅	厚さ			
1	P-38	Ⅲ	土製品	土物	2.7	(6.2)	3.0		陶器片	12-7
2	P-39	Ⅲ	土製品	土物	-	-	(4.4)		膠部	12-8
3	P-16	Ⅲ	土製品	香爐土埴	4.3	2.0	1.0	16.0		12-9
4	P-12	Ⅲ b	土製品	スプーン形土製品 (S.3)	4.0	1.8	18.9		指端正例 端部欠損	12-10
5	P-26	Ⅲ b	土製品	土製円盤	4.0	5.0	0.8	22.0	肌 縄文?	12-11
6	P-31	Ⅲ b	土製品	土製円盤	3.5	3.3	0.4	8.9	不明 磨滅顯著	12-12
7	P-32	Ⅲ b	土製品	土製円盤	2.1	2.6	0.7	4.3	肌 縄文?	12-13
8	P-1	Ⅲ b ~ Ⅲ	土製品	土製円盤	1.8	3.1	0.6	12.9	沈黙文	12-14
9	P-4	Ⅲ b ~ Ⅲ	土製品	土製円盤	4.6	4.1	0.7	17.9	多岐直線文	12-15
10	P-5	Ⅲ b ~ Ⅲ	土製品	土製円盤	3.9	3.6	0.6	11.4	沈黙文 1肌 縄文?	12-16
11	P-6	Ⅲ b ~ Ⅲ	土製品	土製円盤	3.4	3.5	0.7	11.3	不明 磨滅顯著	12-17
12	P-14	Ⅲ b ~ Ⅲ	土製品	土製円盤	6.9	4.2	0.8	29.0	肌 縄文	12-18
13	P-16	Ⅲ b ~ Ⅲ	土製品	土製円盤	4.0	3.7	0.8	11.4	沈黙文	12-19
14	P-18	Ⅲ b ~ Ⅲ	土製品	土製円盤	4.0	3.9	0.6	12.8	不明 磨滅顯著	12-20

第22図 遺物包含層出土遺物(6)



図版 番号	登録 番号	層位	種別	器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考	写真 図版
					長さ	幅	厚さ			
1	P-15	III a ~ III	土製品	土製円盤	4.1	4.0	0.4	8.9		13-1
2	P-2	III	土製品	土製円盤	2.9	2.7	0.9	9.3	1. 横糸文?	13-2
3	P-3	III	土製品	土製円盤	3.4	3.6	0.8	13.3	沈澱文	13-3
4	P-7	III	土製品	土製円盤	4.4	4.0	0.9	16.8	沈澱文	13-4
5	P-8	III	土製品	土製円盤	4.1	4.3	0.7	16.3		13-5
6	P-9	III	土製品	土製円盤	3.9	(2.1)	0.8	7.7		13-6
7	P-13	III	土製品	土製円盤	5.0	5.8	1.0	37.2	横糸 L	13-7
8	P-15	III	土製品	土製円盤	3.1	3.3	0.7	7.9	縦 横文?	13-8
9	P-17	III	土製品	土製円盤	3.5	(2.7)	0.6	6.0	不明 摩滅顯著	13-9
10	P-20	III	土製品	土製円盤	3.7	3.7	0.7	15.4	沈澱文	13-10
11	P-21	III	土製品	土製円盤 (3.8)	6.0	6.8	23.6		縦 横文	13-11
12	P-24	III	土製品	土製円盤	3.4	4.7	0.7	11.3	不明 摩滅顯著	13-12
13	P-25	III	土製品	土製円盤	3.5	3.7	0.6	11.2	1. 横 縦文	13-13
14	P-27	III	土製品	土製円盤 (2.8)	4.6	4.6	0.8	13.2	不明 摩滅顯著	13-14
15	P-28	III	土製品	土製円盤	4.0	5.3	0.8	23.6	沈澱文	13-15
16	P-29	III	土製品	土製円盤	4.2	3.8	0.6	12.1	沈澱文	13-16
17	P-30	III	土製品	土製円盤	3.2	2.9	0.8	12.2	不明 摩滅顯著	13-17
18	P-32	III	土製品	土製円盤	2.9	2.7	0.6	6.1	横糸文	13-18
19	P-34	III	土製品	土製円盤	3.7	3.7	0.7	13.7	不明 摩滅顯著	13-19
20	P-35	III	土製品	土製円盤	4.0	3.3	0.7	11.6		13-20
21	P-37	III	土製品	土製円盤	3.4	3.2	0.8	11.0	沈澱文	13-21
22	P-22	IV a	土製品	土製円盤	3.9	(2.8)	1.0	10.4	縦 横文? 摩滅顯著	13-22
23	P-23	IV a	土製品	土製円盤	4.4	5.1	0.9	21.9	不明 摩滅顯著	13-23
24	P-36	V	土製品	土製円盤	3.9	3.8	0.9	15.8		13-24

第 23 図 遺物包含層出土遺物 (7)

## 第2節 第5次調査

### (3) その他土製品

土製円盤の他に土製品は、Ⅲ層、盛土から土偶が2点(第22図1・2)、Ⅲ層から有溝土錘1点(第22図3)、Ⅱb層からスプーン型土製品が1点(第22図4)出土した。

土偶について、残存部分から、第22図1は左腕、第22図2は左脚と考えられる

### (4) 打製石器

Ⅲ層から石織が2点(第20図4・5)、スクレイパーが2点(第20図6・7)出土している。

### (5) 礫石器

Ⅱ～Ⅲ層、Ⅲ層から凹石がそれぞれ1点(第21図1・3)、Ⅳa層から礫石が1点(第21図2)、Ⅲ層から磨石が1点(第21図4)、Ⅱ～Ⅲ層から砥石が1点(第21図6)出土している。

### (6) 磨製石器・石製品

Ⅱ～Ⅲ層から石皿が1点(第21図5)、Ⅲ層から磨製石斧が1点(第20図8)出土している。

## 5. まとめ

今回の調査地点は、大野田遺跡の北側に位置する。第1次調査地点の西側、第2次調査地点の南側に隣接する。調査では、Ⅱb層上面で溝跡3条、土坑2基、ピット22基を確認した。近隣の調査からも同様の遺構が確認されており、周辺一帯は居住域であったと考えられる。

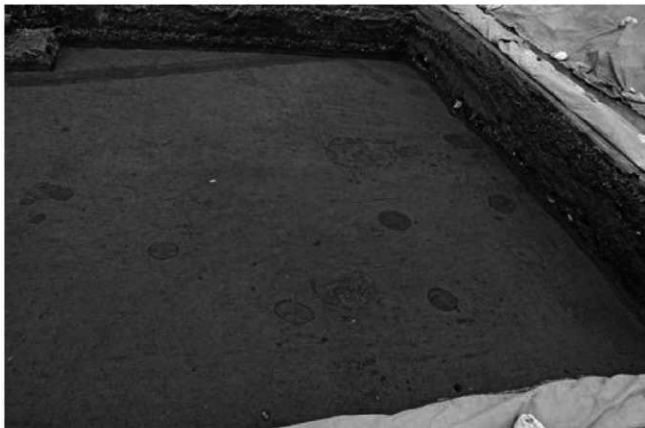
また、Ⅱb層上面の遺構調査終了後、下層の遺構の有無を確認するため、人力で掘り下げを行った。各層の上面で遺構確認作業を行ったが、明確な遺構は確認されなかった。基本層Ⅴ層上面で遺構状のプランを確認したため、調査を行ったが遺物は出土していない。平面形は不正形なものが多かったため、自然にできたかぼみに土が堆積し、遺構状のプランが形成された可能性がある。

遺物は、Ⅱb層～Ⅴa層中で縄文時代の土器、石製品、土製品が出土した。これらは遺構に伴うものではなく、層中に含まれていた遺物である。今回の調査で出土した遺物の出土状況を近隣で行われた第1次・第2次調査と比較するとほぼ同様であり、流れ込みによるものと判断される。

出土した縄文土器は沈線が施文されたものが多く、横位もしくは斜位のRL縄文が施される場合が多い。これらの土器群は第1次調査出土土器群と類似していることから、後期初頭の南境式の範疇にあると推測される。土製品に関しては、土製円盤が34点出土している。そのほか出土量はわずかではあるが祭祀関連遺物と考えられている土偶、スプーン形土製品が確認されている。このような出土傾向はこれまでの調査と概ね同様であり、大野田遺跡が縄文時代後期に機能した祭祀の場であった可能性が高いことが再確認された。

## 参考文献

- 仙台市教育委員会 2001 『大野田遺跡 第2次発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第252集  
仙台市教育委員会 2013 『大野田遺跡・元袋遺跡・伊古田遺跡ほか』 仙台市文化財調査報告書第414集  
仙台市教育委員会 2014 『大野田遺跡 第1次発掘調査』 仙台市文化財調査報告書第424集  
仙台市教育委員会 2014 『仙台平野の遺跡群24』 仙台市文化財調査報告書第428集  
仙台市史編さん委員会 1999 『仙台市史 通史編1 原始』



1. II層上面遺構検出状況(1) (南から)

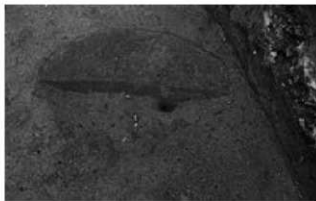


2. II層上面遺構検出状況(2) (南から)

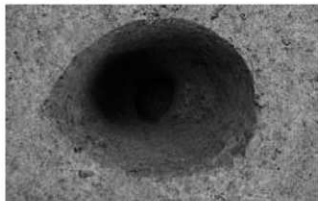
写真図版4 大野田遺跡第5次調査(1)



1. SD3 溝跡発掘状況（東から）



2. SK1 土坑断面（南から）



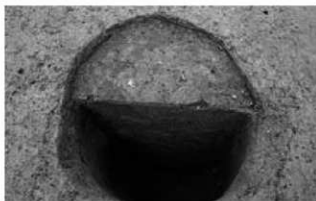
3. P2 発掘状況（南から）



4. P6 発掘状況（北から）



5. P11 土層断面（南から）



6. P12 土層断面（南から）



7. P14 土層断面（北から）

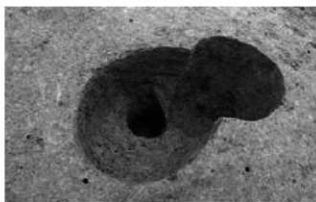


8. P16 土層断面（南から）

写真図版5 大野田遺跡第5次調査（2）



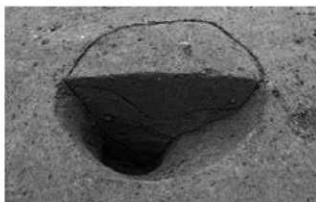
1. P18 柱痕跡確認状況（西から）



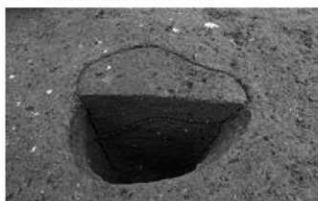
2. P18 完掘状況（南から）



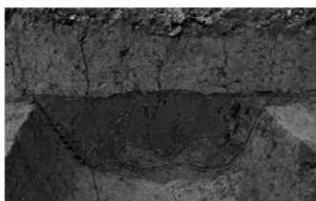
3. P20 柱痕跡確認状況（北東から）



4. P25 土層断面（東から）



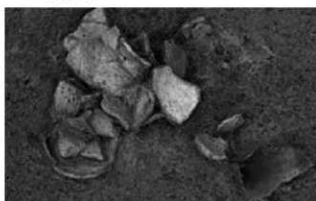
5. P26 土層断面（西から）



6. SD3 西壁断面



7. II b 層中遺物出土状況（南から）



8. II b 層中遺物出土状況（南から）

写真図版 6 大野田遺跡第5次調査（3）



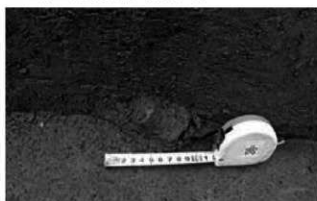
1. 掘立柱建物跡調査状況（南東から）



2. Ⅲ層上面確認状況（南西から）



3. 調査区南東部 Ⅲ層上面遺物出土状況（北から）



4. Ⅲ層中遺物出土状況（西から）



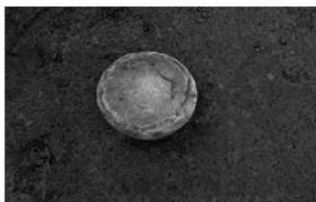
5. Ⅲ層中遺物出土状況（西から）

写真図版7 大野田遺跡第5次調査（4）





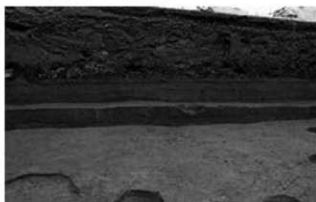
1. IV層中遺物出土状況（西から）



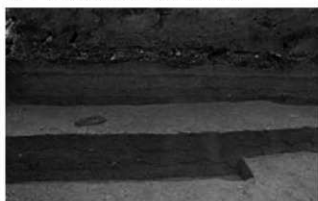
2. IV層中遺物出土状況（東から）



3. V（VI層）層上面確認状況（北から）



4. 調査区東壁断面



5. 調査区南壁断面



6. 調査区北壁断面

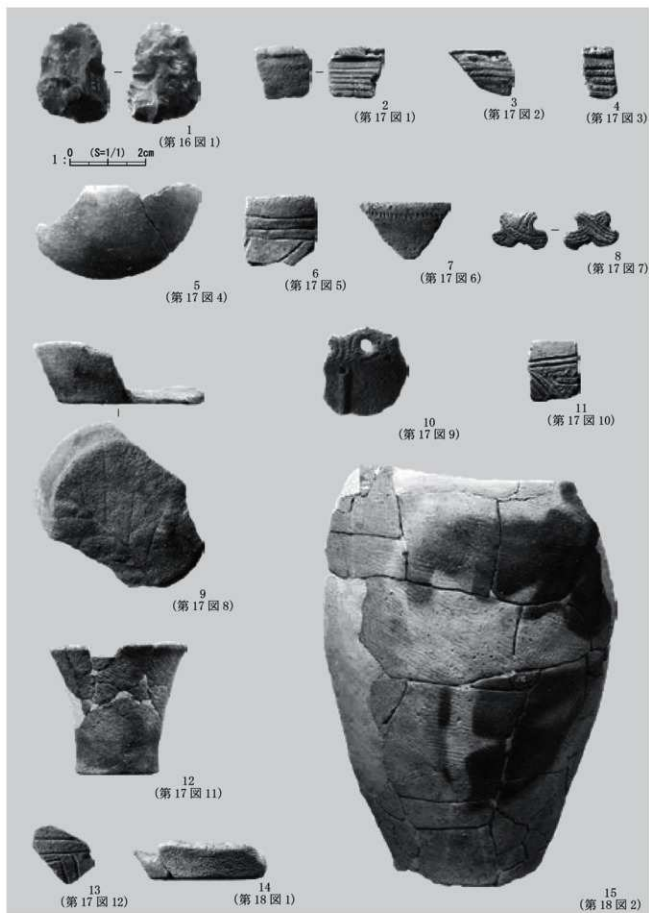


7. 作業風景

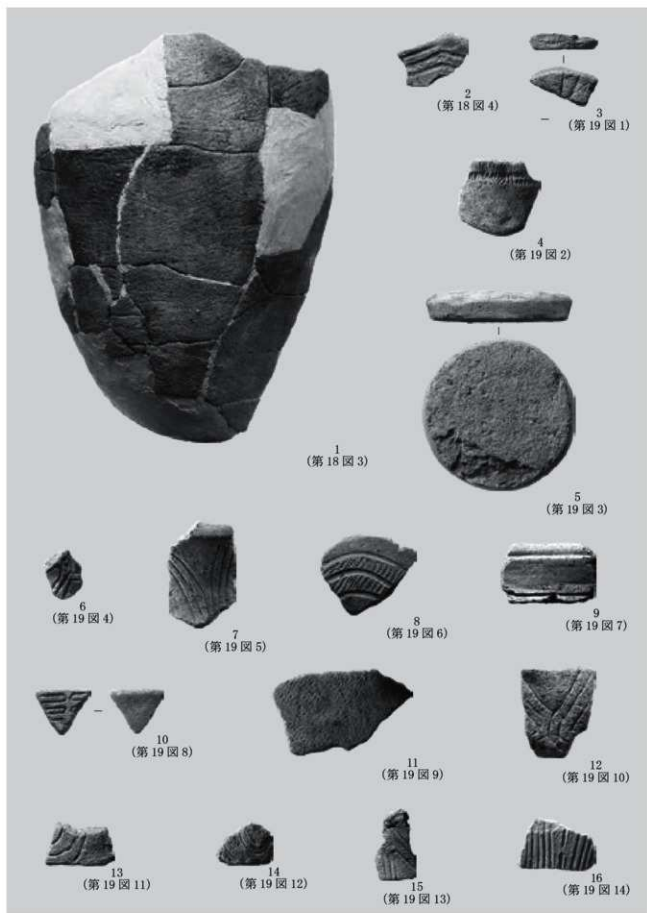


8. 下層調査風景（南から）

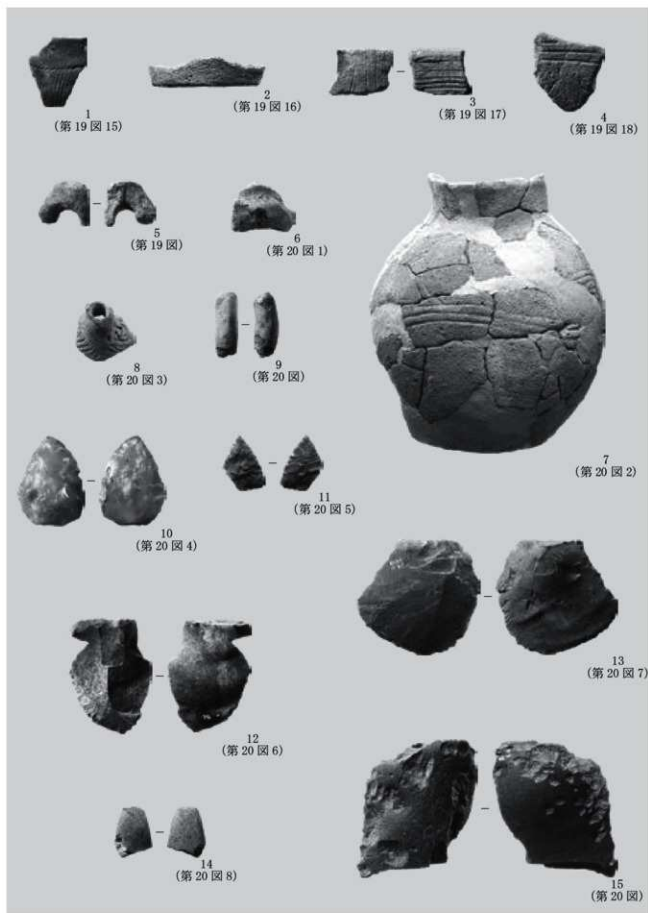
写真図版8 大野田遺跡第5次調査（5）



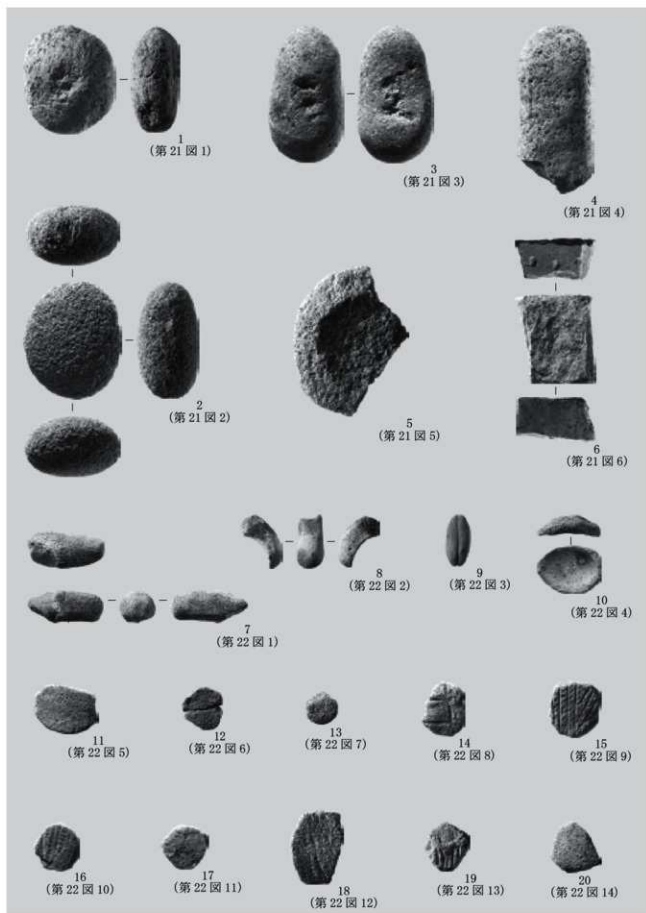
写真図版9 大野田遺跡第5次調査出土遺物(1)



写真図版 10 大野田遺跡第5次調査出土遺物(2)



写真図版 11 大野田遺跡第5次調査出土遺物(3)



写真図版 12 大野田遺跡第5次調査出土遺物(4)



写真図版 13 大野田遺跡第5次調査出土遺物(5)

## 第4章 大野田官衙遺跡の調査

### 第1節 遺跡の概要

大野田官衙遺跡は、宮城県仙台市太白区大野田に所在する。JR 仙台駅の南約 5.2 km の名取川と筑川に挟まれた標高 10～12m の自然堤防上に立地する。遺跡の範囲は、東西約 190m、南北約 260m である。

当遺跡は、平成 25 年度まで行われた富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査の中で発見された官衙遺跡であり、陸奥国府に關係した古代の役所である。これまでの調査で、6 棟の掘立柱建物跡とそれを方形に囲む溝跡が確認されている。発見された掘立柱建物跡は、概ね真北を基準とする南北棟で 2 間×4 間の総柱の掘立柱建物跡と、2 間×10 間の大型の掘立柱建物跡が東西に向かい合って配置されている。またその最も北側の建物の間の東西軸上に、東西 2 間の建物が配置されていることが確認されている。このように、遺跡の位置関係や建物の基準が真北で共通し、年代も 7 世紀末～8 世紀初頭と推定されることから、遺跡の北東約 1.5 km に所在する陸奥国府と推定される郡山Ⅱ期官衙との関係性が指摘されている。平成 21 年度にこれら官衙関連遺構が確認されている範囲が「大野田官衙遺跡」として登録された。

大野田官衙遺跡の周辺には元袋遺跡、袋前遺跡、大野田遺跡、大野田古墳群、王ノ塚遺跡、下ノ内遺跡、伊古田遺跡などが隣接して分布している。これまでの調査で縄文時代、古墳時代、古代の集落跡が確認され、さらに古墳時代の石棺墓や木棺墓、古墳、平安時代の水田跡、近世の屋敷跡も確認されている。

### 第2節 第22次調査

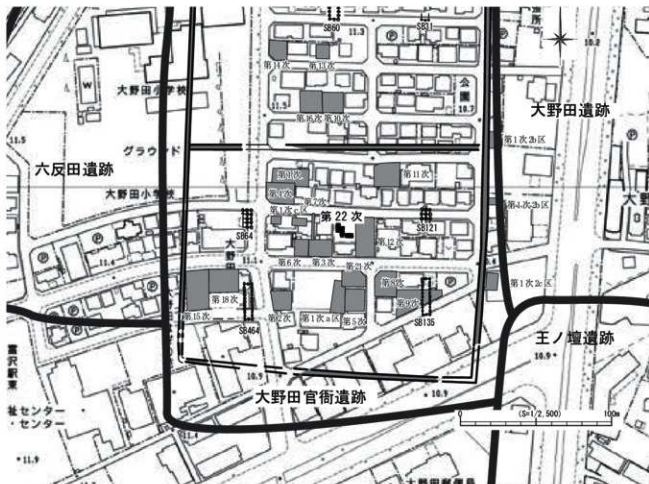
#### 1. 調査要項

遺跡名	大野田官衙遺跡 (01566)
調査地点	仙台市太白区大野田五丁目 16-15, 16
調査期間	令和4年8月23日～26日
調査対象面積	140.70 m <sup>2</sup>
調査面積	約 57.0 m <sup>2</sup>
調査原因	共同住宅の新築工事
調査主体	仙台市教育局生涯学習部文化財課
調査担当	調査調整係
担当職員	主任 堀江洋介 主事 須貝慎吾 吉田 大



番号	遺跡名	種類	立地	時代
1	大野田官衙遺跡	自然堤防	野原跡	古墳～奈良
2	大野田古墳群	自然堤防	古墳・壺巻跡	縄文～中世
3	穴尻遺跡	自然堤防	壺巻跡	縄文(中～終)～近世
4	大野田遺跡	自然堤防	壺巻跡	縄文(後)・弥生(中)・古墳～平安
5	南崎遺跡	自然堤防 後背地	水田跡・墓地	縄文(後)・弥生～古墳・平安
6	宮衣遺跡	後背地	壺巻跡・水田跡・農田跡	旧石器～近世
7	山口遺跡	自然堤防 後背地	壺巻跡・水田跡	縄文～平安
8	下ノ内遺跡	自然堤防	壺巻跡・墓地・水田跡	縄文(早～前、後)～中世
9	袋前遺跡	自然堤防	古墳地	古墳・平安
10	元袋遺跡	自然堤防	壺巻跡	奈良～平安
11	春日社古墳	自然堤防	古墳	古墳
12	鳥居塚古墳	自然堤防	古墳	古墳
13	宮衣船跡	自然堤防 後背地	船跡	縄文
14	郡山集落遺跡	自然堤防	壺巻跡	縄文・奈良～中世
15	下ノ内遺跡	自然堤防	壺巻跡・墓地	縄文(中～終)～中世
16	伊古田遺跡	自然堤防	壺巻跡	縄文～平安
17	王ノ塚遺跡	自然堤防	壺巻跡・船跡	縄文(後)～中世
18	嵐屋敷遺跡	壺巻跡・元袋遺跡・ 倉庫跡	自然堤防	奈良～平安・中世
19	宮町水田跡	古墳小	自然堤防	古墳小
20	北尾敷遺跡	壺巻跡	自然堤防	奈良～平安
21	新田遺跡	壺巻跡	自然堤防	奈良～平安
22	伊古田B遺跡	船跡	自然堤防	古墳～平安

第24図 大野田官衙遺跡と周辺の遺跡

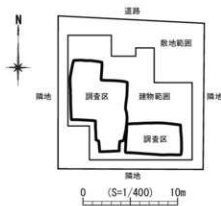


第25図 第22次調査区位置図

## 2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は令和4年4月28日付で申請者から提出された「埋蔵文化財発掘の取り扱いについて（協議）」（令和4年5月10日付R4教生文第105-18号で通知）に基づき実施した。

調査では建築範囲内の南東側に1Tとして東西6.0m×南北3.0m、北西側に2Tとして東西3.0m×南北6.0mの調査区を設定し、令和4年8月23日から調査に着手した。まず1Tを重機により盛土およびI層を除去し、II層（富沢駅周辺土地区画整理事業調査基本層V層に相当）上面で遺構検出作業を行ったところ、ビット1基が検出された。次に2Tを1Tと同様に重機により盛土およびI層を除去し、II層上面で遺構検出作業を行ったところ、ビット1基と柱痕跡を伴う柱穴1基が検出された。この周囲に同規模の柱穴で構成された掘立柱建物の存在が想定されたため、東側に東西3.0m×南北4.0mの規模で調査区の拡張をし、II層上面で遺構検出作業を行ったところ、柱痕跡を伴う柱穴1基が検出された。掘立柱建物の柱の並びを確認するため、調査区の拡張部から南側に東西3.0m×南北4.0m程度さらに拡張し、基本層II層上面で遺構確認作業を行ったところ、柱痕跡が確認される柱穴1基が検出された。令和4年8月26日までに調査区内の遺構の完掘および計測等を行い、野外調査を終了した。遺構の記録は、トータルステーションを用いて調査区の平面図（S=1/20）を、また必要に応じて各断面図（S=1/20）を作製し、一眼レフデジタルカメラにより記録写真の撮影を行った。



第26図 第22次調査区配置図



### 3. 基本層序

今回の調査では、1T・2Tともに、盛土（層厚約0.8～0.9m）の下に基本層を2層確認した。今回の遺構検出面であるⅡ層上面までの深さは約1.1～1.2mである。

- I 層：10YR5/3にぶい黄褐色粘土。炭化物、酸化鉄を斑状に含む。層厚は約4～8cmである。盛土以前の水田の耕作土と考えられる。
- Ⅱ 層：10YR4/4褐色シルト。炭化物、酸化鉄を斑状に、土器片を少量含む。I層の影響を受け、上面にマンガン粒・酸化鉄を多く含む。層厚は約45cm以上である。今回の調査の遺構検出面である。富沢駅周辺土地区画整理事業調査で確認された古代の遺構検出面であるV層に対応する。

### 4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、1TのⅡ層上面でピット1基、2Tで掘立柱建物跡1棟とピット1基が検出された。遺物は掘立柱建物跡から土師器片が1点出土した。

#### (1) 掘立柱建物跡

##### SB1（第27図）

2T南部に位置する。Ⅱ層上面で検出された。今回確認された柱穴は3基のみのため、桁行、梁行規模は不明であるが、建物の北東部にあたると推測される。柱間寸法は、SB1-P1とSB1-P2の間が2.45m、SB1-P2とSB1-P3の間が4.35mとばらつきがある。方位は南北軸でN-1.5°-W、東西軸でE-0°-Sでほぼ真北方向を基調とする。柱穴の掘方の平面形状は隅丸長方形を基本とする。規模は長軸104～115cm、短軸58～62cmで、深さは50～66cm、柱痕跡は円形を呈し、直径20～25cmである。いずれの柱穴の掘方の埋土もⅡ層を埋め戻した土を主体としている。遺物は、SB1-P2の掘方埋土から土師器片が1点出土した。

##### SB1-P1（第27図）

2T南部で検出された。平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸約104cm、短軸約58cmである。断面形状は逆台形を呈し、深さは約50cmである。直径約25cmの柱痕跡を伴う。柱痕跡は10YR3/2黒褐色粘土、掘方の埋土は10YR4/4褐色シルトである。

##### SB1-P2（第27図）

2T拡張部西部で検出された。平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸約105cm、短軸約61cmである。断面形状は逆台形を呈し、深さは約65cmである。直径約24cmの柱痕跡を伴う。柱痕跡は10YR3/3黒褐色粘土質シルト、掘方の埋土は2.5Y4/3オリーブ褐色シルトである。遺物は掘方の埋土から土師器片が1点出土した。

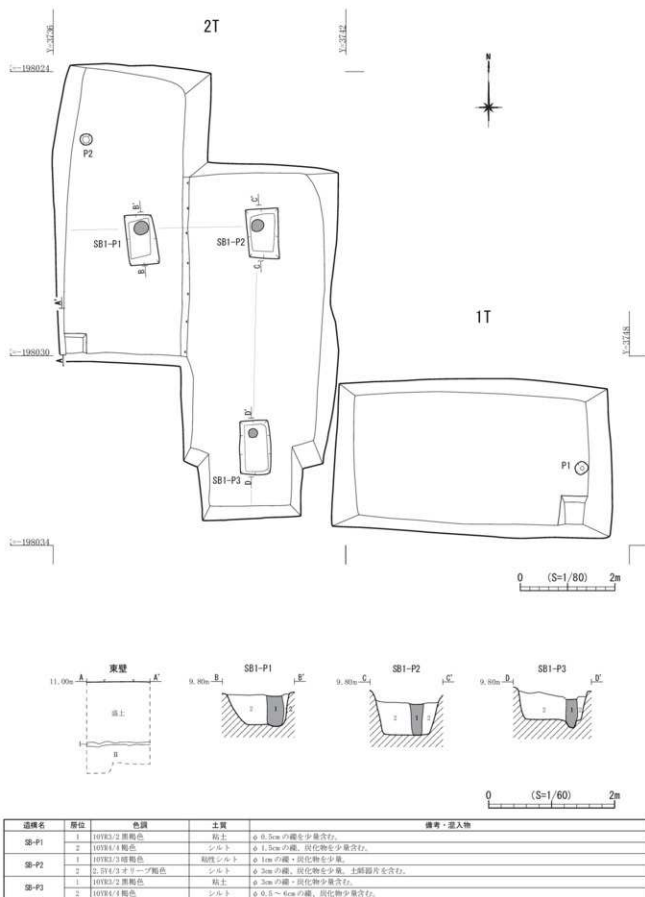
##### SB1-P3（第27図）

2T拡張部南部で検出された。平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸約115cm、短軸約62cmである。断面形状は逆台形を呈し、深さは約66cmである。直径約20cmの柱痕跡を伴う。柱痕跡は10YR3/2黒褐色粘土、掘方の埋土は10YR4/4褐色シルトである。

#### (2) ピット

##### P1（第27図）

1T東部で検出された。平面形状は円形を呈し、直径約28cmである。断面形状はU字形を呈し、深さは約27cm



第27図 第22次調査区平面・断面図

である。堆積土は単層で、10YR4/2 灰黄褐色粘性シルトである。遺物は出土していない。

#### P2 (第27図)

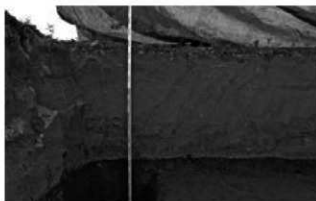
2T 北部で検出された。平面形状は円形を呈し、直径約25cmである。断面形状はU字形を呈し、深さは約10cmである。堆積土は単層で、10YR4/2 灰黄褐色粘性シルトである。遺物は出土していない。

#### 5. まとめ

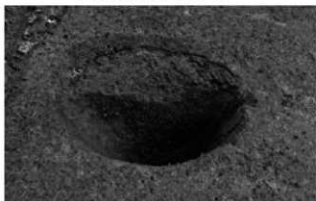
今回の調査地点は、大野田官衙遺跡の南側に位置する。周辺では平成13～21年度に本発掘調査が行われており、掘立柱建物跡6棟、区画溝が確認されている。今回の調査では、遺構検出面であるII層から、掘立柱建物跡1棟、ピット2基が検出された。SB1 掘立柱建物跡は、既に確認されている周辺の6棟の掘立柱建物跡の建物と同様に真北を基調としていることから、同時期の掘立柱建物の可能性があるが、SB1-P2とSB1-P3の柱間が4.35mと他よりも空くことから、一連の建物であると判断するにはさらに検討が必要である。



1. 1トレンチ遺構検出状況（西から）



2. 1トレンチ南壁断面（北から）



3. P1土層断面（北から）



4. 2トレンチ拡張前遺構検出状況（北から）



1. 2トレンチ西壁断面（東側から）



2. P2土層断面（東から）



3. SB1-P1土層断面（東から）



4. SB1-P1土層断面（東から）



5. SB1-P2土層断面（東から）



6. 2トレンチ南側拡張部遺構検出状況（北東から）



7. SB1-P3土層断面（東から）



8. 大野田官街遺跡第22次調査出土遺物

図面 番号	登録 番号	出土 遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)		
						口径	底径	器高
-	C-1	SB1-P2	2	土師器	片?	-	-	-
		外面		内面		備考		写真 図巻
		-		-				19-8

## 第5章 郡山遺跡の調査

### 第1節 遺跡の概要

郡山遺跡は仙台市太白区郡山二〜六丁目に所在する。北は広瀬川、南は名取川に挟まれ、河川の合流点から北に約2kmに位置する。遺跡の範囲は東西800m、南北900mで面積は約60haに及んでおり、その一部は平成18年に「仙台郡山官衙遺跡群 郡山官衙遺跡 郡山廃寺跡」として国史跡に指定されている。

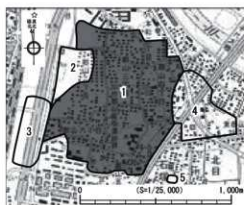
遺跡は、昭和54(1979)年に初めて発掘調査が行われて以来、継続的な調査が行われ、大きくⅠ期官衙とⅡ期官衙の2時期の変遷が確認される。Ⅰ期官衙は7世紀中頃から後半にかけて機能した陸奥国の拠点となる城柵跡と考えられる。その後Ⅰ期官衙を取り壊し、Ⅱ期官衙が造営される。Ⅱ期官衙は周囲を材木列と二重の溝によって囲われた方四町Ⅱ期官衙や、その南方には長大な建物が建ち並ぶ南方官衙地区や郡山廃寺等が造営される。Ⅱ期官衙は7世紀末から8世紀初頭にかけて造営された、多賀城創建以前の陸奥国府と考えられている。

遺跡西側は長町駅東遺跡と西台畑遺跡と接している。両遺跡では7世紀から8世紀前葉にかけての竪穴住居跡が500軒以上発見されており、郡山遺跡と関係する集落跡と考えられる。また、南西約1.5kmには方形に区画された溝跡内に大型の掘立柱建物跡が規則的に配置される大野田官衙遺跡があり、遺構の時期や規模から、郡山遺跡Ⅱ期官衙との関係性が考えられている。

### 第2節 第320次調査

#### 1. 調査要項

遺跡名	郡山遺跡(宮城県遺跡登録番号 01003)
調査地点	仙台市太白区郡山三丁目地内
調査期間	令和4年6月20日～9月30日
調査対象面積	313.4㎡(敷地面積:626.6㎡)
調査面積	230㎡(1区:140㎡、2区:90㎡)
調査原因	共同住宅建築
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育生涯学習部文化財課
担当職員	主査 菅原翔太 主任 堀江洋介 主事 妹尾一樹 吉田 大



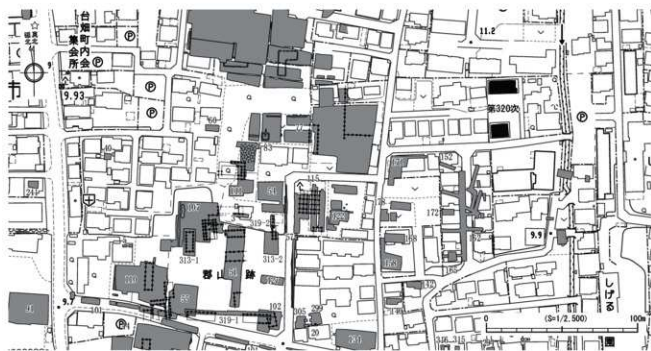
番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	郡山遺跡	官衙跡、寺院跡	自然埋没	縄文、弥生、古墳、古代
2	西台畑遺跡	集落跡、築物基	自然埋没	縄文、弥生、古墳、古代
3	長町駅東遺跡	集落跡	自然埋没	弥生、古墳、古代
4	北台畑跡	埴輪跡、築物跡、水田跡	自然埋没	縄文、弥生、古墳、古代、近世
5	阿波遺跡	聚落跡	自然埋没	古墳、古代

第28図 郡山遺跡と周辺の遺跡

#### 2. 調査に至る経過と調査方法

調査は共同住宅建築工事に伴い、令和4年3月22日付で申請者から提出された「埋蔵文化財の取扱いについて(協議)」(令和4年3月25日付R3教生文第109-161号で通知)に基づき発掘調査を実施した。

調査は令和4年6月20日に1区から着手し、建築予定範囲内に南北8m、東西17mの規模で調査区を設定した。重機により盛土およびⅠ～Ⅲ層を除去し、Ⅳ層上面(GL-0.8～1m)で遺構検出作業を行ったところ、竪穴住居跡、掘立柱建物跡等が検出された。8月17日に竪穴住居跡(S12621)の規模確認のため、調査区南東部を一部拡張し、S12621竪穴住居跡の部分を除き1区の埋め戻しを行った。続いて8月22日に2区の調査に着手した。2区では建築予定範囲内に南北8m、東西11mの規模で調査区を設定し、重機により盛土およびⅠ～Ⅲ層を除去し、Ⅳ層上面(GL-0.8m)で遺構検出作業を行ったところ、竪穴住居跡や掘立柱建物跡等が検出された。



第29図 第320次調査区位置図

調査では必要に応じて平面・断面図 (S=1/20) を作製し、記録写真はデジタルカメラを用いて撮影した。9月30日にすべての作業を終え現場の引き渡しを行い、調査を終了した。

### 3. 基本層序

基本層を大別4層、細別9層確認した。Ⅰ～Ⅱ層は現代の耕作土、Ⅲ層は旧表土と考えられる。Ⅳ層上面で遺構検出を行ったが、Ⅲ層上面が古代の遺構検出面である。Ⅲ層上面までの深さは約0.7mである。

Ⅰa層：10YR5/6 黄褐色シルト質粘土。小礫、砂を含む。現表土で樹木根により乱されている。

Ⅰb層：10YR4/4 褐色シルト質粘土。小礫とシルトブロックを含み、全体的に乱れている。グライ化している。

Ⅰc層：10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。小礫、砂を含む。2区で確認された。

Ⅰd層：10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。下層のⅡa、Ⅱb層が攪拌された層であり、2区で確認された。

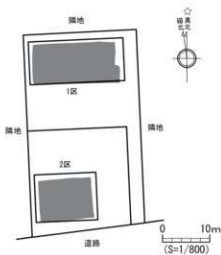
Ⅱa層：10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。細砂を含み、10YR 粘土粒を含む。旧耕作土と考えられる。

Ⅱb層：10YR6/8 明黄褐色粘土質シルト。細砂を含み、10YR4/3 粘土をブロック状に含んでいる。旧耕作土と考えられる。

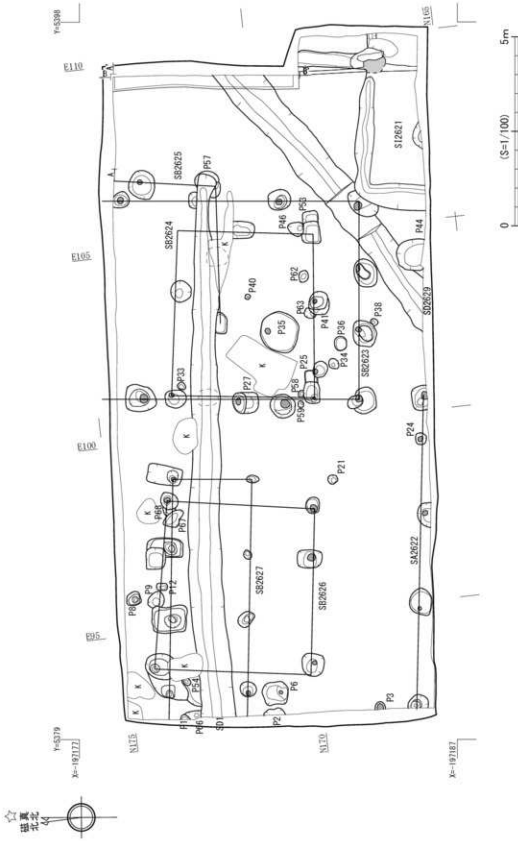
Ⅲa層：10YR4/2 灰黄褐色粘土。10YR5/6 粘土粒を含んでいる。1区東側でのみ確認された。

Ⅲb層：10YR3/2 黒褐色粘土。10YR5/6 粘土粒を含む。1・2区ともに西から東へ向かって傾斜している。旧表土と推定され、本来の遺構検出面と考えられる。

Ⅳ層：10YR6/6 明黄褐色粘土。植物由来と推定される10YR4/3 粘土を斑状に含んでいる。2区の西側ではグライ化が顕著である。本調査での遺構確認面である。



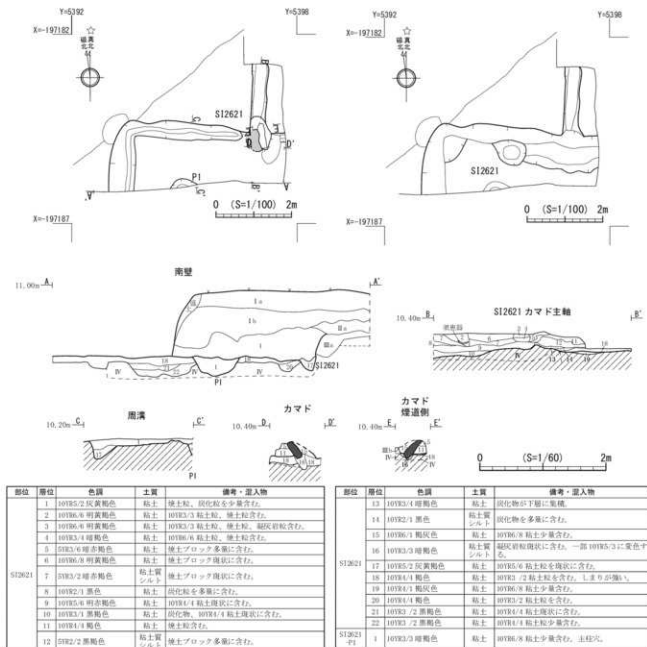
第30図 第320次調査区配置図



第31図 第320次1区調査区平面図







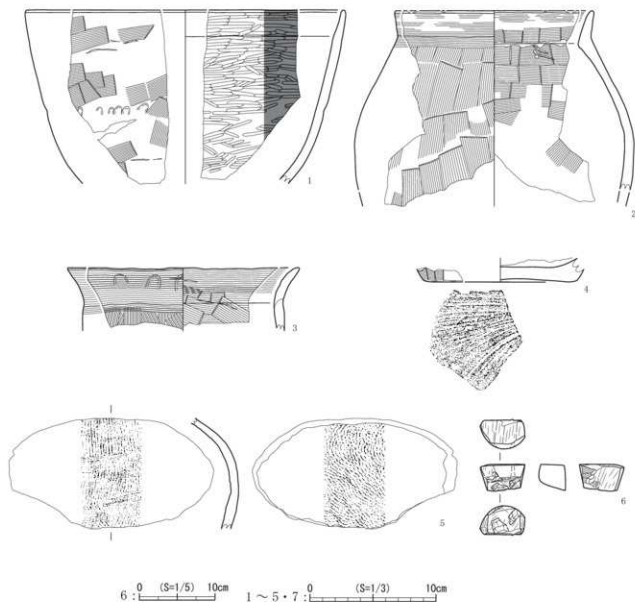
第33図 SI2621 竈穴住居跡平面・断面図

いる。6は須恵器の甕の体部である。煙道崩落土から出土しており、色調は橙色を呈している。7は用途不明の石製品である。何らかの未製品と考えられ、半円状に粗成形されており、各面は平滑に整えられ、比較的細かく磨痕が観察される。その他、小玉石が2点（写真図版19-8・9）、精錬鉄（写真図版19-10）、スサ抜け痕の認められる用途不明の土製品（写真図版19-11）が出土している。

## (2) 柱列跡

### SA2622 柱列跡（第31・35図）

調査区の南西部で検出された。掘方は一辺約60～70cmの不整形方形を呈し、深さは約25～32cm、柱痕跡が直径約15cmの柱穴で構成される。P4・13・19・30の4基が確認され、P30の底面には平坦な礫が据えられていた。方向はE-2.0°-Sで、検出長は9.3m（柱間寸法254～310cm）である。調査区外南西に展開する掘立柱建物跡の北側柱列である可能性もある。遺物は土師器15点、須恵器3点が出土しているが細片であるため掲載できなかった。

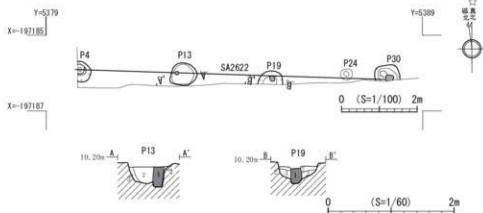


図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	C-2	S12621	床面	赤ロクソ土製器	鉢	(25.2)	-	(13.8)	ヘラナゲ 面オサユ	ヘラミボキ 黒色処理		19-1
2	C-1	S12621	-	赤ロクソ土製器	甕	(15.6)	-	(6.3)	口：ヨコナゲ 体：ヘラナゲ	口：ヨコナゲ 体：ヘラナゲ		19-2
3	C-3	S12621	-	赤ロクソ土製器	甕	(18.4)	-	(5.0)	口：面オサユ→ヨコナゲ 体：ハケタ	口：ヨコナゲ 体：ヘラナゲ		19-3
4	C-4	S12621	-	赤ロクソ土製器	甕	-	(11.2)	(1.9)	体下：ヘラナゲ→ヘラケズリ 底：ヘラケズリ	静止糸切り		19-4
5	E-8	S12621	横溝	灰黒器	甕	-	-	(14.6)	体：平行タタキ目	体：黄濁灰文		19-5

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
6	E-2	S12621	-	石製品	形迹不明	2.3	3.6	2.1	安山岩？ スリ面 工具痕あり 未製品？ 重さ 18.9g	19-6
-	E-1	S12621	盤方壇土	磁石器	磨石	17.8	13.0	4.1	安山岩？ スリ面 焼ケハジケ 重さ 1500g	19-7
-	E-9	S12621	盤方壇土	石製品	小玉石	1.5	1.3	0.5	黒色 重さ 1.5g	19-8
-	E-10	S12621	盤方壇土	石製品	小玉石	1.4	1.1	0.6	白色 重さ 1.5g	19-9
-	N-1	S12621	灰黒土	鉄製品	鉄線棒	-	-	-	重さ 8.9g	19-10
-	P-1	S12621	灰黒土	土製品	不明	-	-	-	水中掛け 受熱により赤色化 重さ 12.6g	19-11

第34図 S12621 竅穴住居跡出土遺物



第 35 図 SA2622 柱列跡平面・断面図

部位	層位	色調	土質	備考・埋人物
P13	1	10B14.3 灰色・黄褐色	粘土	ほぼ均質、柱痕跡
	2	10B14.4 褐色	粘土	10B13.1 粘土層状を含む。
	3	10B14.4 褐色	粘土	10B13.1 粘土少量含む。

部位	層位	色調	土質	備考・埋人物
P19	1	10B14.2 灰黄褐色	粘土	10B10.6 粘土・粘礫層を含む。柱痕跡。
	2	10B14.2 灰黄褐色	粘土	10B10.6 粘土少量含む。
	3	10B13.5 黄褐色	粘土	10B10.6 粘土ブロック層状を含む。

(3) 掘立柱建物跡

SB2623 掘立柱建物跡 (第 31・36 図)

調査区の東側で検出された。桁行 4 間以上、総長 7.2m 以上 (柱間寸法 208 ~ 235cm)、梁行 3 間、総長 5.8m (柱間寸法 184 ~ 209cm) の南北棟建物跡で、SD2629 より新しく、SI2621、SD2628 溝跡より古い。西桁行を基準とした方向は N-0° -E である。P26・28・29・31・37・43・48・50・52・53 で構成される。柱穴掘方は一辺 42 ~ 98cm の円形または隅丸方形を呈し、深さは 16 ~ 43cm で、柱痕跡は P50 以外で確認された。直径は約 20cm である。また、P29・37・43 で柱の抜き取り穴が確認された。遺物は土師器 4 点が出土している。

SB2624 掘立柱建物跡 (第 31・36 図)

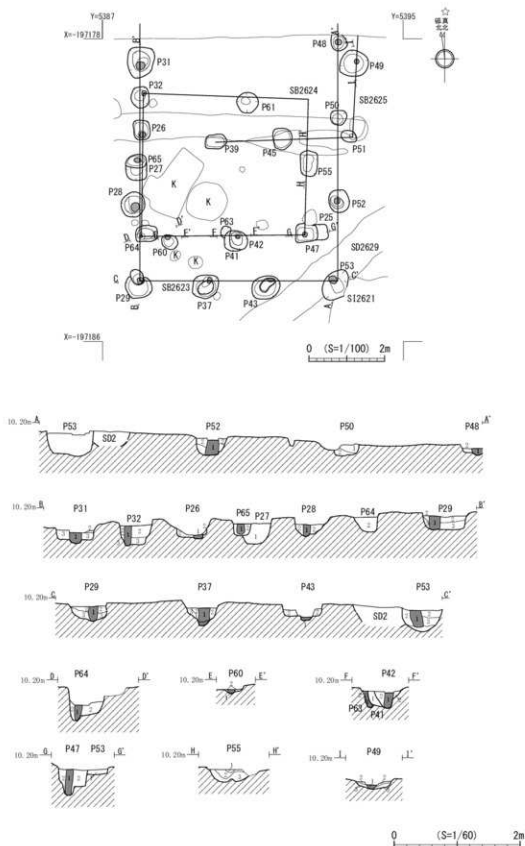
調査区の東側で検出された。桁行 2 間、総長 5m (柱間寸法 288 cm)、梁行 2 間、総長 4.3m (柱間寸法 200 ~ 225cm) の側柱建物跡で、P27・58・61・63 より新しく、P46 より古い。西桁行を基準とした方向は N-1.0° -E である。P32・42・47・55・61・64・65 で構成され、北東隅は確認されなかった。柱穴掘方は一辺 41 ~ 73cm の円形または不整形方形を呈し、深さは 32 ~ 44cm である。柱痕跡は P32・42・64・65 で検出され、直径は 12 ~ 20cm である。遺物は土師器 16 点が出土している。

SB2625 掘立柱建物跡 (第 31・36 図)

調査区の北東側で検出された。桁行 1 間以上、総長 2.2m 以上、梁行 2 間、総長 4.1m の建物跡で、SD2628 溝跡および P57 より古い。桁行を基準とした方位は N-3.0° -E である。P39・45・49・51 で構成され、L 字状に結ばれる。柱穴掘方は一辺 42 ~ 75cm の円形または不整形方形を呈し、深さは約 20cm である。柱痕跡は P49 で検出され、直径は 11cm である。遺物は出土していない。

SB2626 掘立柱建物跡 (第 31・37 図)

調査区の西側で検出された。桁行 3 間、総長 8.1m 以上 (柱間寸法 151 cm)、梁行 1 間、総長 4.3m の建物跡で、SB2627 掘立柱建物跡より新しい。南桁行を基準とした方位は E-0° -S である。P7・14・17・18・22 で構成される。柱穴掘方は一辺 41 ~ 75cm の円形または不整形方形を呈し、深さは 24 ~ 64cm である。柱痕跡は直径 15 ~ 18cm である。遺物は土師器 7 点、須恵器 1 点が出土している。

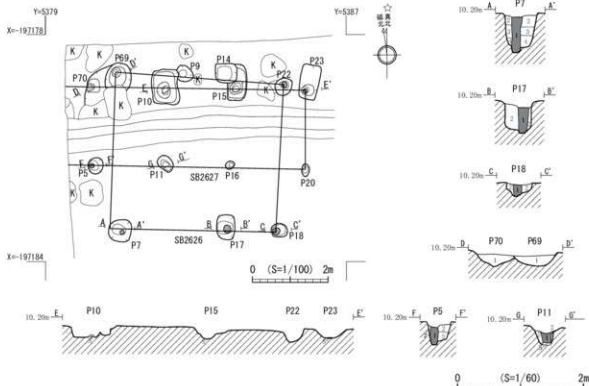


第36図 SB2623・2624・2625 掘立柱建物跡平面・断面図

表3 SB2623・2624・2625 掘立柱建物跡土層注記

層位	層位	色調	土質	備考・混入物
P52	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	2	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック塊状を含む。炭化物少量含む。
	3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック塊状を含む。
P50	1	10YR5/3 暗褐色	粘土	10YR4/2 粘土ブロック少量含む。
	2	10YR2/2 黄褐色	粘土	炭化物塊状を含む。
P48	1	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。柱痕跡。
	2	10YR3/2 黄褐色	粘土	炭化物塊状を含む。
P31	1	10YR5/6 黄褐色	粘土	10YR4/2 粘土粒少量含む。
	2	10YR3/2 黄褐色	粘土	均質。柱痕跡。
P32	1	10YR6/4 明黄褐色	粘土	10YR4/2 粘土粒塊状を含む。
	2	10YR3/2 黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	3	10YR4/1 褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒塊状を含む。柱痕跡。
P26	1	10YR5/1 褐色	粘土	10YR4/2 粘土粒塊状を含む。
	2	10YR6/6 明黄褐色	粘土	10YR4/2 粘土粒少量含む。柱痕跡。
P65	1	10YR5/1 褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	2	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒塊状を含む。
P27	1	10YR4/1 褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒塊状を含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
P28	1	10YR3/4 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒塊状を含む。
	2	10YR3/2 黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒塊状を含む。
	3	10YR5/6 黄褐色	粘土	10YR4/2 粘土粒塊状を含む。
P29	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。柱痕跡。
	2	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック塊状を含む。
	3	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック少量含む。

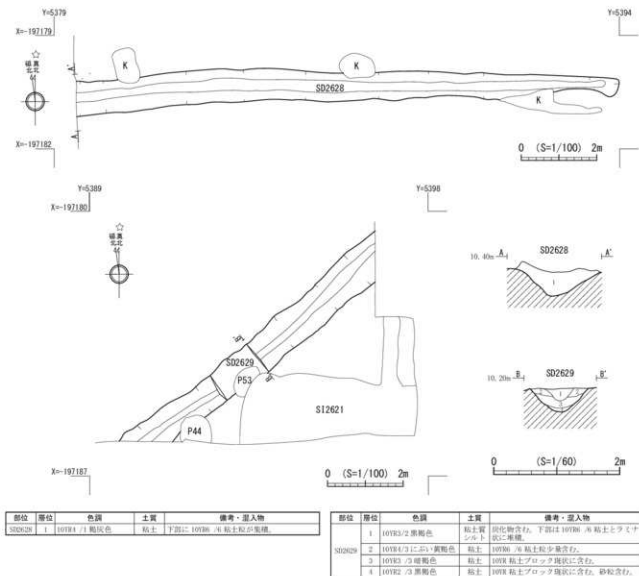
層位	層位	色調	土質	備考・混入物
P37	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。柱痕跡。
	2	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック少量含む。
	3	10YR6/6 明黄褐色	粘土	10YR4/3 粘土粒塊状を含む。
P43	1	10YR4/1 褐色	粘土	ほぼ均質。柱痕跡。
	2	10YR6/6 明黄褐色	粘土	10YR4/1 粘土粒塊状を含む。柱痕跡。
P53	1	10YR6/9 明黄褐色	粘土	10YR4/2 粘土粒少量含む。
	2	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック塊状を含む。
	3	10YR6/9 明黄褐色	粘土	10YR4/3 粘土粒少量含む。
P64	1	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック塊状を含む。
P60	1	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	2	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック塊状を含む。
P42	1	10YR3/2 黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	2	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
P49	1	10YR4/1 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
P63	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック塊状を含む。
P47	1	10YR3/2 黄褐色	粘土	ほぼ均質。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック塊状を含む。
P50	1	10YR4/1 褐色	粘土	ほぼ均質。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒。塊土粒。炭化物含む。
P46	1	10YR3/2 黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック塊状を含む。
	2	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック塊状を含む。
P48	1	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	2	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	3	10YR6/6 明黄褐色	粘土	10YR4/3 粘土粒少量含む。



層位	層位	色調	土質	備考・混入物
P7	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	2	10YR4/1 褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	3	10YR5/4 に近い黄褐色	粘土	10YR4/1 粘土粒少量含む。
P11	1	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒塊状を含む。
	2	10YR4/1 褐色	粘土	ほぼ均質。柱痕跡。
P18	1	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック塊状を含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック塊状を含む。

層位	層位	色調	土質	備考・混入物
P70	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック塊状を含む。
P69	1	10YR3/2 黄褐色	粘土	均質を含む。柱痕跡。
	2	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR4/2 粘土粒少量含む。
P11	1	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	2	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック塊状を含む。

第37図 SB2626・2627 掘立柱建物跡平面・断面図



第38図 SD2628・2629 溝跡平面・断面図

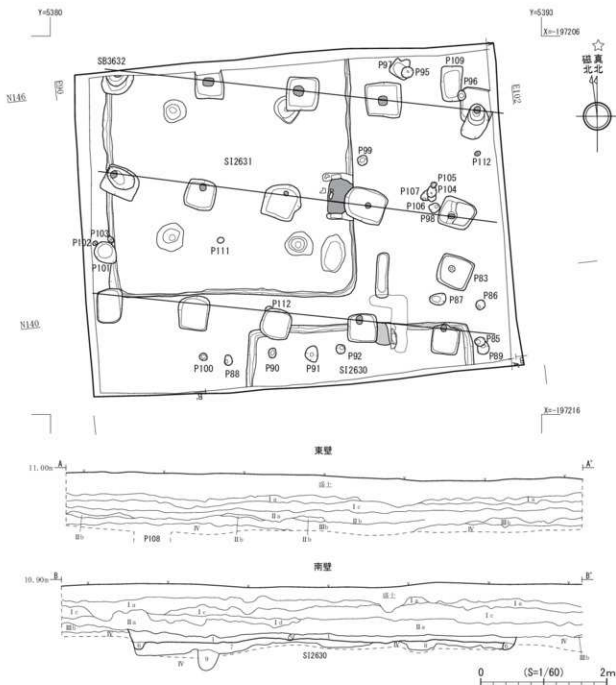
SB2627 掘立柱建物跡 (第31・37図)

調査区の西側で検出された。桁行3間以上、総長6.4m以上(柱間寸法209～213cm)、梁行1間、総長2.3m(柱間寸法228cm)の建物跡で、SB2626 掘立柱建物跡より古い。西桁行を基準とした方位はE-1.0° -Sである。P5・10・11・15・16・20・23で構成される。北側柱列の掘方が長軸1m近い隅丸方形であるのに対し、南側柱列の掘方は23～51cmの円形と規模・形状が異なっているが、位置関係と底面に礫があるという特徴から、一連の建物であると判断した。柱穴掘方は一辺23～100cmの円形または隅丸方形を呈し、深さは15～22cmである。柱痕跡は直径13cmでP5・23で確認された。柱痕跡の確認されないP10・15・23・11の底面では礎板として使用されたと考えられる平坦な礫が確認される。遺物は土師器7点が出土しているが細片であるため掲載できなかった。

(4) 溝跡

SD2628 溝跡 (第31・38図)

調査区を横断する東西方向の溝跡で、西端は調査区外へと延びる。SB2623・2625 掘立柱建物跡より新しい。方位はE-1.0° -Nであり、検出長14.5mで東側は攪乱により一部削平されている。上幅55～142cm、下幅25～38cm、深さ48cmの規模で断面形状は台形を呈する。堆積土は単層である。遺物は非クロロ土師器19点、須恵器2点、



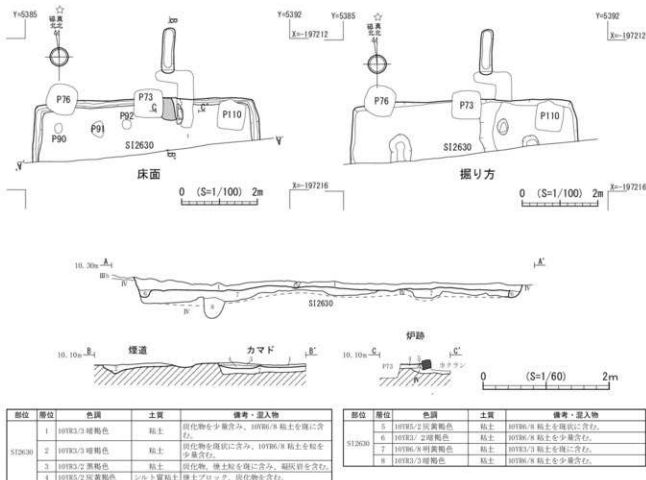
部位	層位	色調	土質	備考・遺人物	部位	層位	色調	土質	備考・遺人物
基本地	I a	10YR5.6 黄褐色	シルト質粘土	小礫、砂粒含む、厚底土。	基本地	II a	10YR3.2 黒褐色	粘土質シルト	10YR 粘土粒含む、細砂含む。
	I b	10YR4.1 褐色	シルト質粘土	小礫、10YR5.6シルト含む。		II b	10YR6.8 明黄褐色	粘土質シルト	10YR4.3 粘土粒含む、細砂含む。
	I c	10YR3.2 黒褐色	粘土質シルト	10YR 粘土粒含む、細砂含む。		II c	10YR3.2 黒褐色	粘土	10YR5.6 粘土粒含む。
	I d	10YR6.8 明黄褐色	粘土質シルト	10YR4.3 粘土粒含む、細砂含む。		IV	10YR6.8 明黄褐色	粘土	10YR4.5 粘土を強く含む。

第39図 第320次2区調査区平面・断面図

陶器2点が出土した。

#### SD2629 溝跡 (第31・38図)

調査区東側で検出された北東-南西方向の溝跡でその両端は調査区外へと延びる。SB2623 掘立柱建物跡、S12621 竪穴住居跡、P44 よりも古い。方位はN-35°~41°-Eである。検出長8.1mで、上幅78~99cm、下幅15~25cm、深さ45cmで、断面形はU字形を呈する。堆積土は4層に分層され、一度埋没後に掘り直されている可能



第40図 S12630 竪穴住居跡平面・断面図

性がある(1層)。遺物は出土していない。

## 【2区】

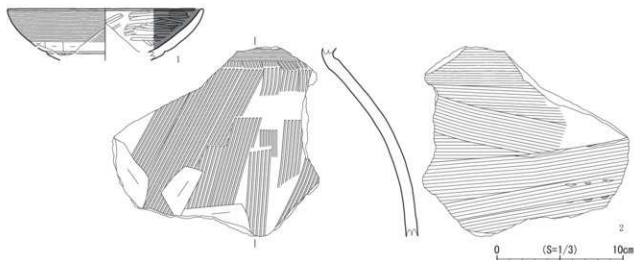
### (1) 竪穴住居跡

#### S12630 竪穴住居跡 (第39・40・41図)

調査区南部で検出された。北辺長 5.9m、東辺長 1.6m 以上の竪穴住居跡で、調査区外南へと続いている。SB2632 掘立柱建物跡より古い。方向は北壁を基準として E-2.0° -N とやや西傾している。堆積土は 8 層に分層され、1 層が住居内堆積土、2 層が煙道、3・4 層が燃焼部、5 層カマド構築土、6 層が周溝、7～8 層が掘方埋土である。床面は部分的に削平を受けていると考えられ、壁面の立ち上がりは不明瞭である。残存する壁高は東壁で 20cm を測る。

床面施設としては、主柱穴と考えられる遺構は確認されなかった。周溝はカマド周辺を除き確認された。周溝はカマド周辺は攪乱などにより削平されており、詳細は不明である。幅 16～21cm、深さ 10cm の規模であり、断面形は U 字形を呈する。カマドは北壁で検出され、袖は東側のみ検出された。東袖は一部攪乱により壊されており、検出規模は長さ 78cm、幅 20cm、高さ 8cm を測る。またカマドの芯材として利用されたと考えられる切石凝灰岩が長辺 23cm、短辺 13cm、厚さ 14cm の規模で掘方を伴って敷設されている。なお、西袖部および燃焼部の一部は SB2632 掘立柱建物跡の柱穴 (P73) により壊されている。燃焼部は奥行 59cm、幅 30cm 以上で、煙道部の長さは 111cm、幅 33cm、深さ 6～14cm である。





調査番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径	器高				
1	C-6	S12630 カマド	-	非クロコ 土師器	環	(15.4)	-	(4.1)	ヨコナダ ヘラクズリ	ヘラミヅギ 黒色処理		20-1
2	C-7	S12630 カマド	-	非クロコ 土師器	甕	-	-	(15.3)	ヨコナダ ハケメ ヘラクズリ	ヘラナダ	編織痕	20-2
-	E-1	S12630	-	須恵器	壺	-	-	(2.8)	ヨコナダ	ヨコナダヘラナダ	鈎取痕	20-3

調査番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (mm)			備考	写真図版	
						高さ	径	厚さ			
-	E-3	S12630 カマド	-	磁石器	-	(3.1)	(3.6)	(3.4)	カマド支脚の脚 重さ 40g		20-4
-	E-6	S12630	掘方埋土	石製品	小玉石	1.5	1.2	0.4	黒色 重さ 1.0g		20-5

第41図 S12630 竪穴住居跡出土遺物

掘方底面は全体的に不規則な凹凸が認められ、ビット状の落ち込みが3カ所で確認された。また北東部はさらに一段低く掘り込まれている。

遺物は土師器51点、須恵器1点、石製品1点が出土した(第41図)。土師器はいずれも非クロコ調整のもので環と甕が出土している。1は環であり、外面の口縁部と体部の境に稜や段を有さない器形である。2は甕であり、頸部との境に段を有し、外面はハケメ調整が施される。須恵器は頸部接合部付近の壺の体部が出土している(写真掲載20-3)。また、円錐状に加工された石製品がカマド付近より出土している(写真掲載20-4)。色調から被熱していると考えられ、カマド支脚の可能性もある。またそれ以外には小玉石(写真図版20-5)が出土した。

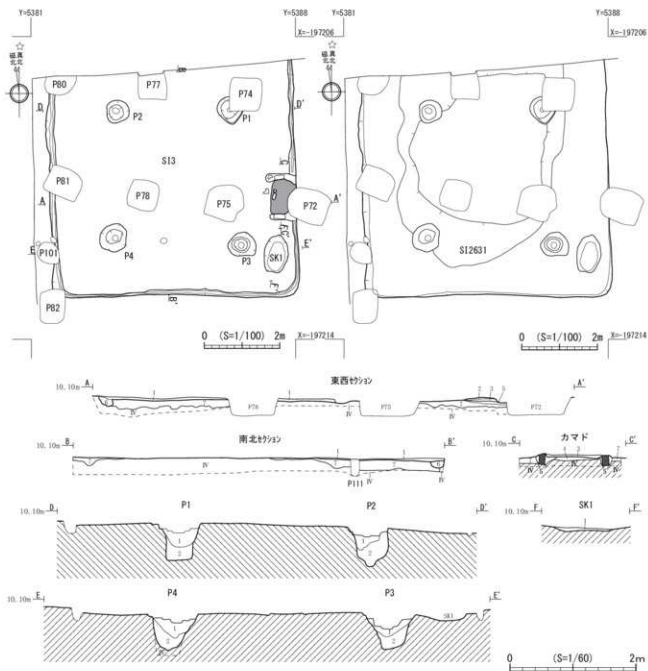
#### S12631 竪穴住居跡 (第38・42・43図)

調査区中央で検出された。東辺長6.3m以上、南辺長6.5mの竪穴住居跡で、調査区北側へ続いている。SB2632 掘立柱建物跡より古い。方向は南壁を基準としてE-0.6°-Nでほぼ真北方向を基準とする。堆積土は7層に分層され、1層が建物内堆積土、2層がカマド構築土、3・4層が燃焼部、5層がカマド構築土、6層が周溝、7層が掘方埋土である。S12630 竪穴住居跡と同様に床面は部分的に削平を受けていると考えられ、壁面の立ち上がりは不明瞭である。残存する壁高は南壁で4cmを測る。

床面施設は主柱穴と考えられる4基のビットが検出された(P1~4)。規模は直径53~72cmの円形を呈し、深さ52~55cmである。いずれも柱痕跡は確認されておらず、掘方の上部が広がる断面形状からも、最終的に柱は抜き取られたと考えられる。周溝はカマドの下部まで巡っており、周溝として掘り込んだ後に、部分的に埋め戻してカマドを構築している。幅7~21cm、深さ10cmの規模であり、断面形はU字形を呈する。

カマドは東壁で検出した。一部SB2632 掘立柱建物跡の柱穴(P72)により壊されている。カマド袖部では南袖で長辺31cm、短辺10cm、厚さ16cm、北袖で長辺26cm、短辺9cm、厚さ17cmの切石凝灰岩が掘方を伴い敷設され

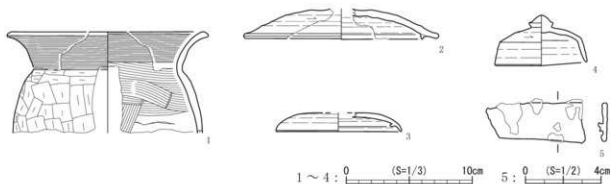
第2節 第320次調査



部位	層位	土色	土質	備考
S12631	1	1 0 YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土を少量含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	腐炭屑粒、焼土ブロック、炭化物を含む。
	3	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	焼土ブロック、炭化物多量を含む。
	4	10YR4/4 褐色	粘土	10YR6/8 粘土を少量含む。
	5	2 5YR6/8 緑色	粘土	内層の腐熟堆積。
	6	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土を少量含む。
	7	10YR 6/ 6 明黄褐色	粘土	10YR 4/ 4 粘土を塊状に含む。

部位	層位	土色	土質	備考
P1	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土を塊状に含む。
	2	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土を少量含む。
P2	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土を塊状に含む。
	2	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土を少量含む。
P3	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土を塊状に含む。
	2	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土を塊状に含む。
P4	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土を塊状に含む。炭化物を含む。
	2	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土を少量含む。
SK1	1	10YR4/4 褐色	粘土	10YR6/8 粘土を塊状に含む。

第 42 図 S12631 竪穴住居跡平面・断面図



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	口径	器高				
1	C-6	SI2631-P3	-	非ロクロ土製器	甕	(18.2)	-	(8.4)	口：ロコナダ 縁：ヘラケズリ	口：ロコナダ 縁：ヘラケズリ		20-6
2	E-2	SI2631	-	須恵器	蓋	15.0	-	12.4	ロコナダ ヘラケズリ	ロコナダ		20-7
3	E-4	SI2631	-	須恵器	蓋	10.0	-	12.1	ロコナダ	ロコナダ		20-8
4	E-2	SI2631	-	須恵器	蓋	7.2	1.9	4.9	ロコナダ ヘラケズリ	ロコナダ	白豆石あり	20-9

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						高さ	幅	厚さ		
-	K-7	SI2631	埋戻土	石製品	小玉石	1.3	1.1	0.6	白色 重さ 1.2g	20-10
-	K-8	SI2631	床面	石製品	小玉石	1.1	0.8	0.6	E-2と高伴 白色 重さ 0.8	20-11
5	N-3	SI2631	掘方埋土	鉄製品	刀子9	5.1	2.6	0.4	刀子柄部のみ 重さ 8.0g	20-12
-	N-2	SI2631	掘方埋土	鉄製品	精錬滓7	-	-	-	重さ 99.3g	20-13

第43図 SI2631 竪穴住居跡出土遺物

ており、内側は燃焼部と接する。外側に粘土を充填する形でカマドが構築されており規模は長さ76cm、幅15cm、高さ5cmを測る。燃焼部は幅60cm、奥行90cmで下面には被熱痕跡が認められる(4層)。また、煙道は確認されなかった。そのほか、カマドの南側で土坑を検出した。長軸102cm、短軸63cmの楕円形を呈し、深さ6cmと浅い。堆積土は単層で建物内堆積土と近似しているが、わずかに炭化物を含んでいる。掘方底面は外周に沿う形で溝状に掘り込まれている。

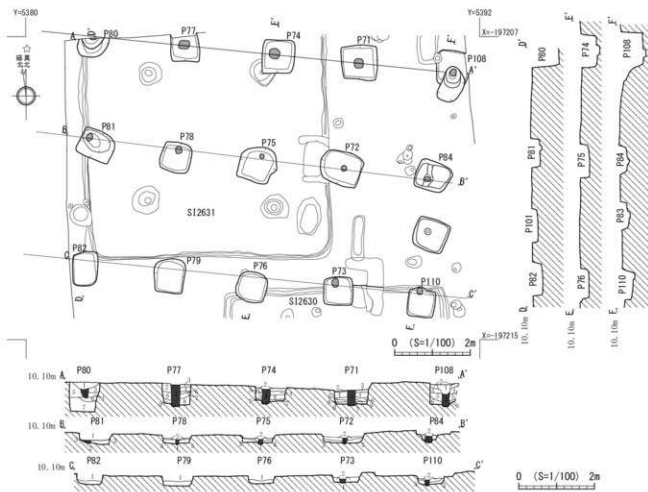
遺物は土師器が56点、須恵器が9点、石製品が2点、鉄滓、精錬滓が出土した(第43図)。土師器はいずれも非ロクロ調整のものであり、坏、甕が確認される。1は胴張形の甕であり体部外面はヘラケズリが施される。須恵器は蓋、甕、壺が出土している。2~4は蓋であり、2、3はカエリがつき、3は復元端部径が10cmと比較的小型である。4は床面近く、天地逆の状態で出土しており、小玉石(写真図版20-11)とともに出土した。カエリのない、端部径7.2cmの小型の蓋であり、宝珠型をつまみを有する。5は厚さ0.4mmの板状の鉄製品である。平面形が端部に向かって緩やかに狭まっており、刀子の可能性もある。そのほか、小玉石(写真図版20-10)、鉄滓(写真図版20-13)が出土した。

### (1) 掘立柱建物跡

#### SB2632 掘立柱建物跡 (第44・45図)

東西方向に延びる3列の柱列が確認された。P71~82、84、93、110で構成される。北側の柱列に対し、ほかの2列の柱列の掘方底面が浅いため、北柱列が側柱で、ほかの2列が東柱列となる床東建物であると推定される。SI2630・2631 竪穴住居跡より新しい。

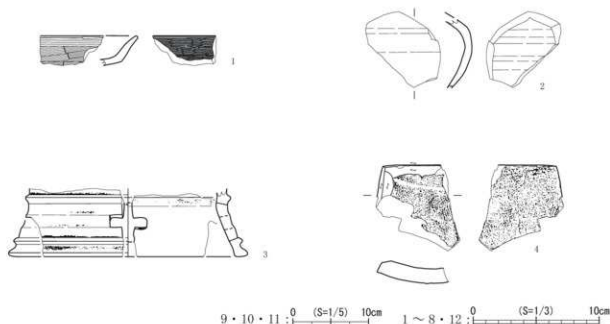
建物規模は桁行4間以上(総長9.5m以上)、柱間間隔225~249cm)、梁行2間以上(総長6m以上)で、調査区外へと続く。北桁行の建物方向はE-6.0°-Sでやや東傾している。掘方はいずれも隅丸方形を呈し、規模は側柱列で一辺79~95cm、深さ45~60cm、柱痕跡は直径20~24cmで、掘方埋土は地山ブロックを含む厚さ10~20cmの単位で層状に埋められている。東柱列は一辺75~110cmの方形を呈し、北側柱列とほぼ同規模であるが、深さ20~26cm、柱痕跡は直径12~18cmと北側柱列より規模が小さい。また、P76・79・82では柱痕跡は検出さ



部位	層位	色調	土質	備考・記入物
P80	1	10YR3/1 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒状状を含む。
	2	10YR4/1 靑灰色	粘土	10YR6/8 粘土ブロックを含む。
	3	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR4/6 粘土ブロック層状を含む。
	4	10YR4/6 靑色	粘土	10YR6/8 粘土ブロックを含む。
	5	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土。10YR1/6 粘土ブロックを含む。
	6	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土。10YR1/6 粘土ブロック少量含む。
	7	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土。10YR1/6 粘土ブロック層状を含む。
P77	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒状状を含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロックを含む。
	3	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロックを含む。
	4	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土粒状状を含む。
	5	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロックを含む。
	6	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒状状を含む。
	7	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土粒状状を含む。
	8	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	9	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒状状を含む。
P71	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒状状を含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック少量含む。
	3	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土ブロック層状を含む。
	4	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック少量含む。
	5	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック層状を含む。
	6	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土粒少量含む。
	7	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
P75	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒状状を含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒状状を含む。
	3	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒状状を含む。
	4	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	5	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	6	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	7	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	8	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	9	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土粒状状を含む。

部位	層位	色調	土質	備考・記入物
P108	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒少量含む。
	2	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土粒状状を含む。
	3	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土粒状状を含む。
P81	1	10YR4/1 靑色	粘土	10YR6/8 粘土粒状状を含む。
	2	10YR4/2 反黄褐色	粘土	ほぼ均質。
P78	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒状状を含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒状状を含む。
	3	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR3/3 粘土粒少量含む。
P72	1	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒状状を含む。
	2a	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック層状を含む。
P72	2b	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック層状を含む。横土粒を含む。
	3	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR3/3 粘土粒少量含む。
P81	1a	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒を含む。柱痕跡。
	1b	10YR3/3 黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒を含む。柱痕跡。1a層の白色化。
P82	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック層状を含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土ブロック層状を含む。砂粒を含む。
P79	1	10Y7/2 灰白色	粘土	10YR3/3 粘土粒少量含む。砂粒を含む。
	2	10YR6/8 明黄褐色	粘土	10YR3/3 粘土粒状状を含む。
P73	1	10YR4/2 反黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒状状を含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒状状を含む。
P110	1	10YR4/1 靑色	粘土質シルト	10YR6/8 粘土粒を含む。上部グライ化。
	2	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土	10YR6/8 粘土粒を含む。
	3	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR3/3 粘土粒を含む。

第 44 図 SB2632 掘立柱建物跡平面・断面図



調査番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)		外装	内装	備考	写真図版
						口径	器高				
1	C-13	SB2632-P80	-	非ロクロ土師器	環	-	(2, 4)	口: ココナダ 体~底: ヘラナダ	ヘラミガキ 黒色地埋		20-14
2	E-6	SB2632-P74	-	須恵器	平瓶	-	(6, 6)	ロクロナダ	ロクロナダ		20-15
3	E-5	SB2632-P74	-	須恵器	円面碓	-	(18, 0)	ロクロナダ 赤色顔料?	ロクロナダ 赤色顔料?		20-16 21-14

調査番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
4	B-1	SB2632-P77	1	瓦	平瓦	(11, 4)	(5, 3)	2.0	割面・布目痕 凸面: 綱叩きナダ	20-17
-	E-4	SB2632-P77	掘方埋土	石製品	小玉石	1.4	1.1	0.6	黒色 重さ 1.1g	20-18
-	E-5	SB2632-P74	掘方埋土	石製品	小玉石	1.4	1.1	0.6	白色 重さ 1.5g	20-18
-	E-7	SB2632-P71	掘方埋土	鉄製品	鉄滓	-	-	-	重さ 3.0g	20-20

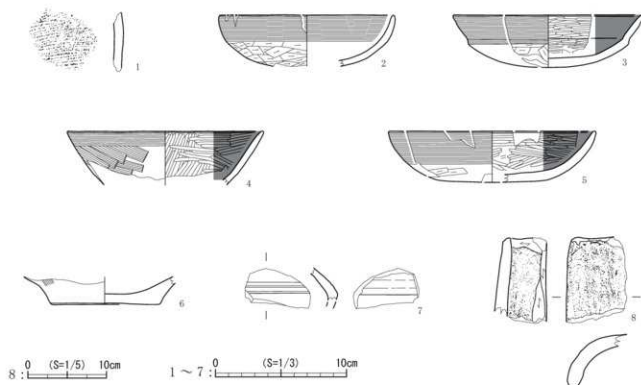
第45図 SB2632 掘立柱建物跡出土遺物

れなかった。P80・81・93では抜き取り穴が確認されている。

遺物は土師器が93点、須恵器が14点、瓦が1点、石製品が3点、鉄滓が出土している。(第45図)。土師器はいずれも非ロクロ調整のもので環、甕が確認される。1は環で口縁部と体部境界に稜をもち、口縁部は直線的に外傾する器形である。須恵器は環、壺、甕、碓が出土している。2は壺の肩部であり、平瓶の可能性もある。3は円面碓で、碓部については残っていないため詳細は分からないが、脚部がハ字形に広がる器形で、脚部の上位と下位にそれぞれ凸帯を巡らす。透かしは十字文が施されており、四方に配置されると考えられる。透かしの幅は縦方向の幅については割れているため、不明であるが横方向の幅と同じになるように図上で復元している。胎土が非常に緻密であり、在地のものとは明らかに異なるため、搬入品の可能性がある。また、凸帯の周囲は帯状にぶい赤色の顔料が付着している。内面にもわずかながら顔料が残る。瓦は平瓦が出土した。4は凹面に布目痕を残し、凸面は綱叩きの後全体的にナダ消されている。そのほか小玉石(写真図版20-18・19)、鉄滓(写真図版20-20)が出土している。

### (3) ビット (第31・39・46図)

1区、2区で柱列、掘立柱建物跡を構成する以外に51基のビットを検出した。柱痕跡はP3・6・35で検出され、直径10～15cmである。ビットは直径15～30cmの小規模な円形のもの、直径50～60cmと比較的規模のある隅丸方形または不整形のものがある。後者については柱痕跡がP6で確認されており、調査区外へと展開する可能性も考えられる。



図録番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口徑	底径	器高				
1	B-1	-	-	弥生土器	壺	-	-	(4.5)	IR			21-1
2	C-15	-	-	弥生土器	杯	(13.2)	-	(3.9)	口：ヨコナダ 体：ヘラケズリ	口：ヨコナダ	丸底	21-2
3	C-12	-	検出面	弥生土器	杯	(14.4)	-	4.8	口：ヨコナダ 底：ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理		21-3
4	C-16	-	カクラン	弥生土器	杯	(15.1)	-	(4.4)	口：ヨコナダ 体：ヘラナダ	ヘラミガキ 黒色処理		21-4
5	C-10	-	カクラン	弥生土器	杯	(15.7)	-	(3.9)	ヨコナダ ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理		21-5
6	C-14	-	検出面	弥生土器	壺	-	R.1	(2.1)	ヘラナダ			21-6
7	E-7	-	Ic	須恵器	壺	-	-	(2.9)	ヨコナダ 底縁2条 自然輪行垂	ヨコナダ 縁輪行垂		21-7

図録番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
8	F-1	-	カクラン	瓦	丸瓦	(10.8)	(7.6)	1.9	凸面：ナダ 凹面：布目瓦 周縁：ヘラケズリ	21-8
-	V-4	P6	前方埋土	鉄製品	精錬滓?	-	-	-	重さ 16.6g	21-9
-	V-5	-	検出面	鉄製品	精錬滓	-	-	-	重さ 9.0g	21-10
-	V-6	P21	-	鉄製品	精錬滓?	-	-	-	重さ 4.5g	21-11

第46図 その他の出土遺物

遺物は各ピットから土師器片、須恵器片が出土しており、P6・21からは精錬滓の可能性のある鉄滓が出土している（写真図版21・9・11）。

#### (4) その他の出土遺物（第46図）

遺構外の出土遺物として基本層および境乱から弥生土器1点、土師器105点、須恵器11点、石製品1点、陶器1点、磁器2点、丸瓦1点、鉄滓が出土している。7は須恵器の壺の肩部で、平瓶の可能性もある。内面に漆膜が付着している。また、精錬滓またはその可能性のある鉄滓が出土している（写真図版21-9～11）。

#### 5. まとめ

調査地点は方四町II期官衙の東部に位置し、石組池（SX1235）より東に約150m、大溝東II推定ラインより西に約40mの地点に位置する。

遺物は土師器、須恵器、瓦、礫石器、石製品、金属製品が出土した。出土した遺物は小片が多数を占め、全体が分かるものは極めて少ない。大半は土師器であるが、いずれも非クロコ調整のものである。確認される器種は坏、鉢、甕がある。須恵器は坏、蓋、甕、壺、碗の器種が確認された。SB2632 掘立柱建物跡からは円面硯が出土している。その特徴から、時期を絞ることは難しいが、これまで郡山遺跡で出土した円面硯と大きく特徴を異にしないため、7世紀半ばから8世紀前半にかけて、官衙の機能していた時期に収まると考えられる。

遺構は堅穴住居跡3軒、柱列跡1列、掘立柱建物跡6棟、溝跡2条などが検出された。近世以降と考えられるSD2628 溝跡を除き、ほかの遺構は方位や出土物から官衙の機能していた時期に収まる可能性が高いと考えられる。

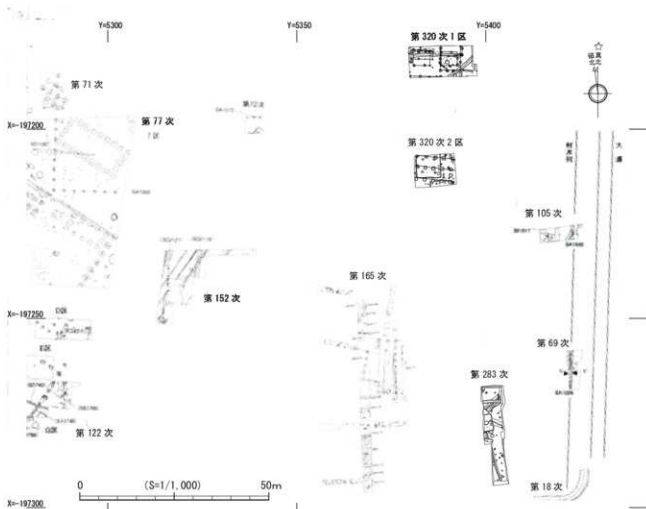
SD2629 溝跡は重複関係や方位からI期官衙の時期に属する可能性がある。SD2629 溝跡は、I期官衙の推定東辺ラインから約70～80m離れており(第152・171次調査)、官衙外に位置するが、東辺の材木列と平行する。延長上での検出はされていないため、その関連性については不明である。

I区のSA2622 柱列跡、SB2623～2627 掘立柱建物跡、SI2621 堅穴住居跡、2区のSI2630・2631 堅穴住居跡はII期官衙の時期に属する遺構と考えられる。I区の遺構については、重複関係からSB2627 掘立柱建物跡→SB2626 掘立柱建物跡、SB2623 掘立柱建物跡→SI2621 堅穴住居跡への変遷が認められる。またSB2623 掘立柱建物跡とSB2624 掘立柱建物跡も新旧関係は不明だが重複しており、2時期ないし3時期の変遷があったと推定される。

検出された3軒の堅穴住居跡は、規模がSI2630 堅穴住居跡は一辺約6m、SI2631 堅穴住居跡は一辺約6.5mで、SI2621 堅穴住居跡もカマドの位置からほぼ同規模の6m前後と推定され、単純な比較はできないが、隣接する長町駅東遺跡の同時期の堅穴住居跡と比較すると大型の規模に分類される。また、カマド構造として残存状況が良好とはいえないが、3軒ともカマドの芯材として切石凝灰岩が用いられている。これまでも周辺では長町駅東遺跡と同様の構造を有するカマドは数軒確認されている(第1次調査SI45など)。

また遺跡全体における当該期の堅穴住居跡は一定数検出されているが、方四町官衙内での検出例が少なく、通常の住居跡とは異なる性格の可能性を持っていた検出例が目立つ(及川2019)。SI2621 堅穴住居跡のカマド付近では、床面直上で炭化物の分布が確認されており、時期が異なり、全長や形態は不明であるがI期官衙の工房と構成する遺構群と考えられるSI50(第6次)、SI2323(第236次)と床面上の特徴が類似している。また、3軒からはいずれも、鉄滓や精錬滓といった遺物が少量出土しており、SI2621 堅穴住居跡だけでなく、SI2630・2631 堅穴住居跡についても工房跡などといった通常の住居跡と異なる機能を持っていた可能性も考えられる。調査区周辺でも堅穴住居跡は検出されており(昭和54年度調査区・第105・286次)、今回の調査では明らかにし得なかったが、前述したカマドの構造を含めて、住居構造と出土物の整理を行い、その機能および、周辺の機能について検討が必要となる。なお、各住居跡の燃焼部の土については、ふるい掛けを行い、磁石を用いて、鍛造剥片等の微小遺物の確認に努めたが、これらの遺物は確認されなかった。

これらの遺構に後続する遺構として、SB2632 掘立柱建物跡がある。SB2632 掘立柱建物跡は、床東建物と推定され桁行9.5m以上と長大な規模を持つ。建物主軸は北桁行でE-6.0°-Sである。これまで、II期官衙の建物方位については真北およびやや東偏する建物(N-0°-5°-EおよびN-0°-2.1°-W)からなるII-A期と、真北からやや西に偏した建物からなるII-B期(N-3°-4.6°-WおよびN-8.3°-10°-W)で大別されてきた(仙台市教育委員会2005a、平岡・齊藤2008)。SB2632 掘立柱建物跡はII-A期の建物と比べやや東傾していることになる。調査区周辺で真北より5°以上東に振れる掘立柱建物跡は、第162次調査SB2110(N-10°-E)、第134次調査SB1925(N-8°-E)、SB1930(N-5°-E)、SB1935(N-7°-E)がある。第134次調査で検出された3棟の掘立柱建物跡は重複関係を有し、もっとも古いSB1930 掘立柱建物跡の掘方埋土に灰白色火山灰が含まれていることから、これら3棟の建物跡は官衙廃絶後にやや時期を経て、10世紀前半以降に屋敷などの建物が存在していたこと



第47図 周辺の調査区

が想定されている（仙台市教育委員会 2001）。また、SB2110 掘立柱建物跡については明確な時期について検討資料がないが、官衙と異なる時期の建物跡である可能性をあげている（仙台市教育委員会 2005b）。SB2632 掘立柱建物跡は出土遺物からは官衙の機能していた時期に収まる可能性を棄てきれないため、現段階ではⅡ期官衙に属する可能性がある遺構と捉え、詳細な時期の比定については、周辺での調査の蓄積をまって再検討したい。

参考文献

及川謙作 2019 「陸奥国府の造営と社会」『第45回城柵官衙遺跡検討会—資料集—』pp. 79-98  
 仙台市教育委員会 2001 『郡山遺跡 21』仙台市文化財調査報告書第250集  
 仙台市教育委員会 2005a 『郡山遺跡発掘調査報告書—総括編—』仙台市文化財調査報告書第283集  
 仙台市教育委員会 2005b 『郡山遺跡—第162次1区・第164次発掘調査報告書—』仙台市文化財調査報告書第288集  
 仙台市教育委員会 2008 『長町駅東遺跡第1・2次調査』仙台市文化財調査報告書第324集  
 奈良文化財研究所 2003 『官衙の官衙遺跡 1 遺構編』  
 平間亮輔・齋藤義彦 2008 「郡山遺跡の遺構変遷」『第34回城柵官衙遺跡検討会—資料集—』  
 村田晃一 2000 「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺—移民の時代—」『宮城考古学』第2号 pp. 45-80  
 村田晃一 2018 「陸奥中部における陶硯の生産と消費（1）」『宮城考古学』第20号 pp. 165-186





1. I区調査区完掘状況（直上から）



2. I区 SB2623～2625 掘立柱建物跡完掘状況（直上から）



3. I区 SB2626・2627 掘立柱建物跡完掘状況（東から）

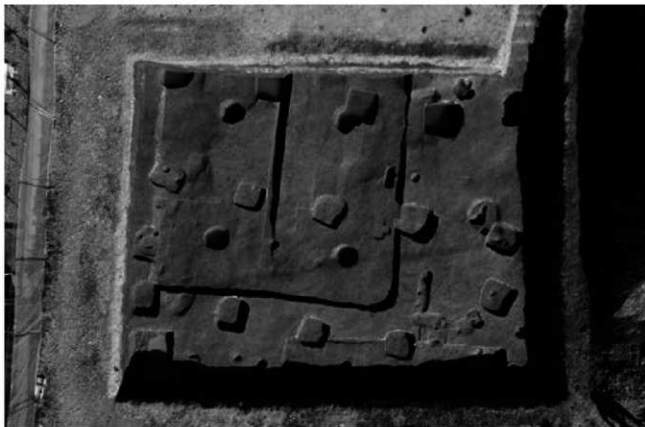


4. I区 S12621 竪穴住居跡完掘状況（南西から）



5. I区 S12621 カマド土層断面（南から）

写真図版 16 郡山遺跡第 320 次調査（1）



1. II区調査区完掘状況（直上から）



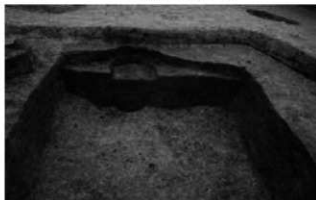
2. II区 SB2632 掘立柱建物跡完掘状況（東から）



3. II区 SB2632-P71 土層断面（南から）



4. II区 SB2632-P78 土層断面（南から）



5. II区 SB2632-P10 土層断面（南から）

写真図版 17 郡山遺跡第320次調査（2）



1. S12631 竪穴住居跡（西から）



2. S12631 カマド検出状況（西から）



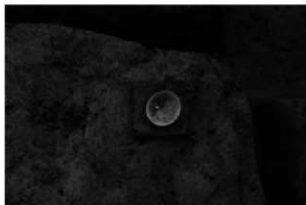
3. S12631 カマド燃焼部土層断面（南から）



4. S12631 カマド土層断面（西から）



5. S12631-P4 土層断面（南から）



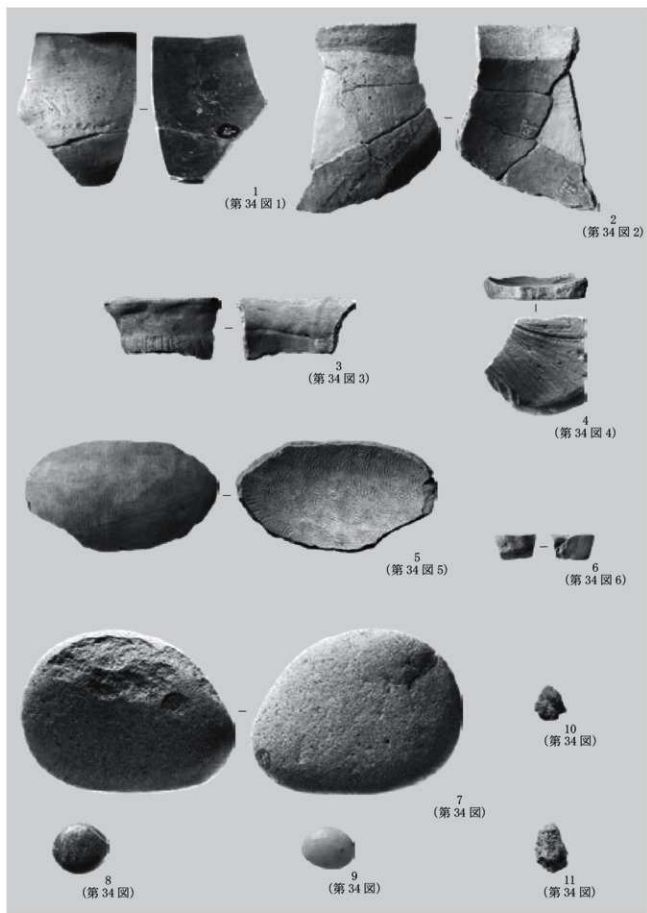
6. S12631-E2 出土状況（北から）



7. S12630 竪穴住居跡（北東から）



8. S12630 カマド検出状況（南西から）



写真図版 19 郡山遺跡第320次調査出土遺物(1)



写真図版 20 郡山遺跡第320次調査出土遺物(2)



写真図版 21 郡山遺跡第320次調査出土遺物(3)

## 第6章 北目城跡の調査

### 第1節 遺跡の概要

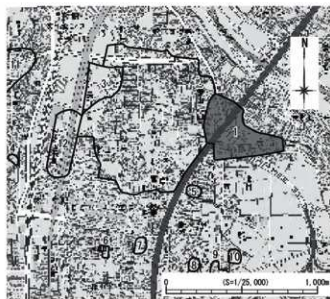
北目城跡は仙台市太白区郡山四丁目から東郡山二丁目にかけて所在する平城跡である。郡山低地の東側、広瀬川右岸の標高約9～12mの自然堤防上に立地し、遺跡の範囲は東西約480m、南北約450mにおよぶ。現在、遺跡の中央部分は国道4号線仙台バイパスと仙台南部道路の長町インターチェンジから通じる都市計画道路の交差点となっている。

北目城は延宝年間(1670年代)に記された「仙台領古城書上」によると、城主は16世紀後半までは粟野氏とされ、粟野氏は永禄年間以降(1570年～)に伊達氏の家臣化したものと考えられており、「北目給衆」と呼ばれる伊達氏の家臣たちが粟野領に派遣されている。また、城跡は東西四十六間(約83m)、南北五十六間(約101m)の規模で四方に幅8間(約15m)の堀があったと記されているが、これまでの調査成果やかつての地籍図から見ると、城の痕跡はさらに広域に広がっていると推定され、これは主郭部分についてののみ記していたと考えられる。その後、慶長5(1600)年の関ヶ原の戦いの際には、伊達政宗はこの北目城に入り、ここを拠点として会津の上杉景勝方と対峙した。政宗はその翌年には仙台北城に居を移し、北目城に関わった家臣たちも仙台北城下に移封され、城は廃城となる。仙台北城下にも「北目」という地名があるのはそのためである。昭和40年代以前までは土塁や堀の痕跡が田畑の区割りなどに残されており、その周囲の字名には「館ノ内」「出丸」「矢来」「矢口」といった城館に関連する地名が残っていた。

### 第2節 第21次調査

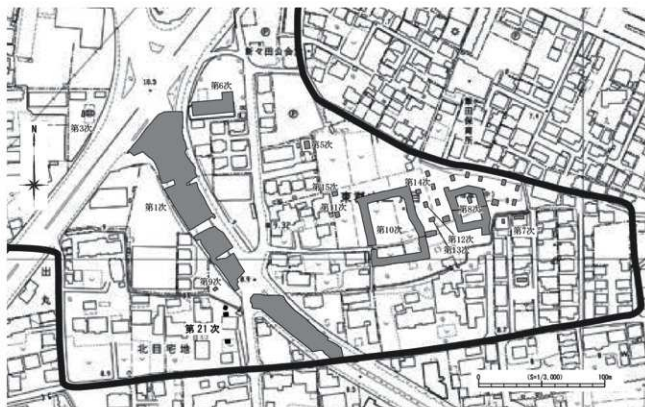
#### 1. 調査要項

遺跡名	北目城跡 (01029)
調査地点	仙台市太白区郡山字北目宅地 34番6・8・9
調査期間	1 トレンチ: 令和4年5月23日 ～5月24日 2 トレンチ: 令和4年8月22日 ～8月25日
調査対象面積	168.92 m <sup>2</sup>
調査面積	33.0 m <sup>2</sup>
調査原因	L型RC擁壁設置工事および建売住宅(3棟)新築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課
担当職員	調査調整係 主任 堀江洋介 主事 狩野佑介 須貝慎吾 早川太陽 吉田 大



番号	遺跡名	種類	立地	時代
1	北目城跡	城郭跡、堀跡、水田跡	自然堤防	縄文～古世
2	郡山遺跡	官署跡、寺院跡	自然堤防	縄文～中世
3	西台遺跡	塹壕跡、堀跡	自然堤防	縄文～中世
4	長町六丁目遺跡	堀跡	自然堤防	奈良、平安
5	丸木遺跡	聚布地	自然堤防	古墳、古代
6	的場遺跡	堀跡	自然堤防	奈良、平安
7	榎ノ森遺跡	堀跡	自然堤防	古墳～平安
8	穴ノ上1遺跡	水田跡	埋没窪地	古墳～中世
9	穴ノ上2遺跡	堀跡	自然堤防	古墳～平安
10	穴ノ上3遺跡	堀跡、包合地	自然堤防	古墳～平安
11	富沢遺跡	堀跡、水田跡、聚布地	埋没窪地	古石器～近世
12	長町東遺跡	堀跡	自然堤防	弥生～奈良

第48図 北目城跡と周辺の遺跡



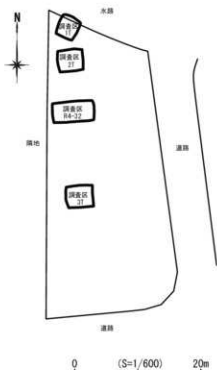
第49図 第21次調査区位置図

## 2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、L型RC擁壁設置工事に伴い申請者から提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（令和4年3月7日付R3教生文第108-519号で通知）と、同じ対象地内で建売住宅（3棟）新築工事に伴い申請者から提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（令和4年8月2日付R4教生文第104-173, 175, 176号で通知）に基づき実施した。

調査では、先にL型RC擁壁設置工事範囲を対象に1Tを設定し、3.0m×3.0mの調査区を設定し調査を行った。まず重機によりGL-0.8mまで掘り下げ、遺構検出作業を行った。その結果、東西方向の堀跡SD1と南北方向の堀跡SD2が確認された。その後、堀の肩と堆積土の落ち込みを確認するため、調査区北部と南西部の一部をGL-1.0mまで掘り下げた。

建売住宅（3棟）新築工事の2T（1号棟）では、東西4.0m×南北3.0mの調査区を設定し、基本層IV層（GL-1.3m）で遺構検出作業を行った。南半部が攪乱で不明瞭であり、北壁断面で南北方向のSD2堀跡の延長を確認した。3T（3号棟）では、東西4.0m×南北3.0mの調査区を設定した。重機によりI・II層を除去後、基本層III層（GL-1.1～1.2m）上面で遺構検出作業を行った。その結果、土坑1基、ピット1基が検出された。また、同時並行で行っていた2Tと3Tとの間に位置する調査区R4-32ではSD2堀跡が2号棟まで延長しないことが判明したため2号棟部の調査は省略している。



第50図 第21次調査区配置図



遺構の記録は、トータルステーションを用いて調査区平面図 (S=1/20) および調査区断面図 (S=1/20) を作製し、一眼レフデジタルカメラにより記録写真の撮影を行った。記録作業終了後、重機で埋め戻しを行い、調査を終了した。

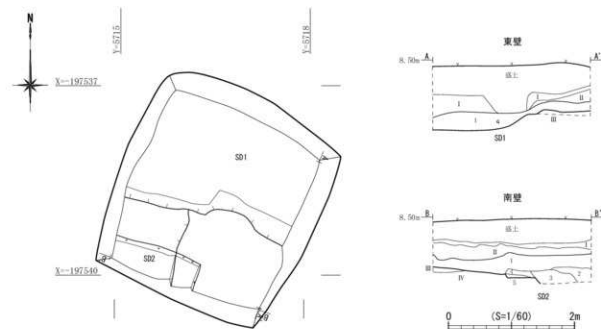
### 3. 基本層序

今回の調査では、既存建物の整地層である1層をはじめ、基本層は大別で4層、細別で5層確認した。遺構検出面であるⅢ層上面までの深さはGL-1.1mである。

- I 層：10YR6/4 にぶい黄褐色砂質シルト。礫 (φ 1~2 cm)、酸化鉄粒、炭化物粒を含む。層厚は約 29 ~ 52 cmである。調査前に解体された建物に伴う造成盛土である。
- II a 層：10YR3/1 黒褐色粘土。炭化物粒、植物根、礫 (φ 0.1 ~ 0.5 cm) を含む。層厚は約 9 ~ 14 cmである。畑の耕作層である。
- II b 層：10YR4/4 褐色粘土質シルト丸礫 (φ 1 ~ 10 cm)、炭化物粒を含む。層厚は約 19 ~ 30 cmである。畑の耕作層である。
- III 層：10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。酸化鉄、炭化物粒を含む。IV層ブロックを少量含む。層厚は約 15 ~ 30 cmである。今回の調査の遺構検出面である。
- IV 層：10YR7/6 明黄褐色粘土質シルト。酸化鉄多量に含む。層厚は約 10 cm以上である。

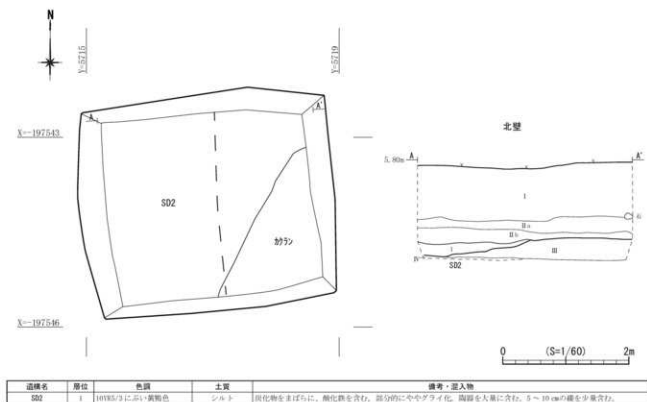
### 4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、基本層Ⅲ層上面で堀跡2条、土坑1基、ピット1基が検出された。遺物は土師質土器1点、陶磁器片多量、漆器碗1点が出土した。

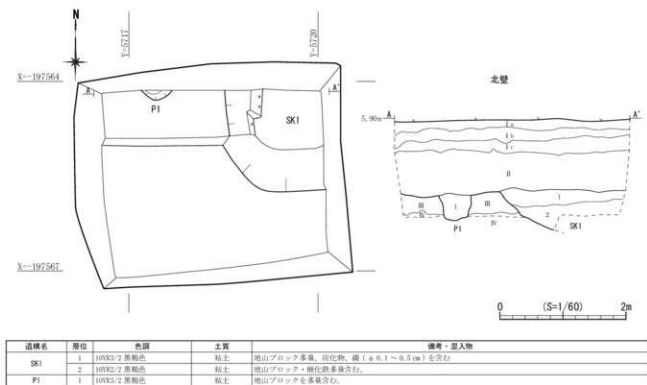


遺構名	層位	色相	土質	備考・混入物
S01	1	10YR6/2 黄褐色	粘土質シルト	炭化物粒、酸化鉄粒を含む。
	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	炭化物をまばらに、酸化鉄を含む。部分的にややグライ化。陶器を大量に含む。5 ~ 10 cmの礫を少量含む。
	3	10YR3/1 暗褐色	粘性シルト	炭化物・酸化鉄・地山ブロックをまばらに含む。
S02	1	10YR5/2 黄褐色	粘性シルト	炭化物・酸化鉄・地山ブロックを少量含む。
	2	10YR4/4 褐色	粘土	地山ブロック、炭化物を少量、酸化鉄をまばらに含む。
	3	10YR4/1 暗褐色	粘土	酸化鉄、地山ブロックをまばらに含む。

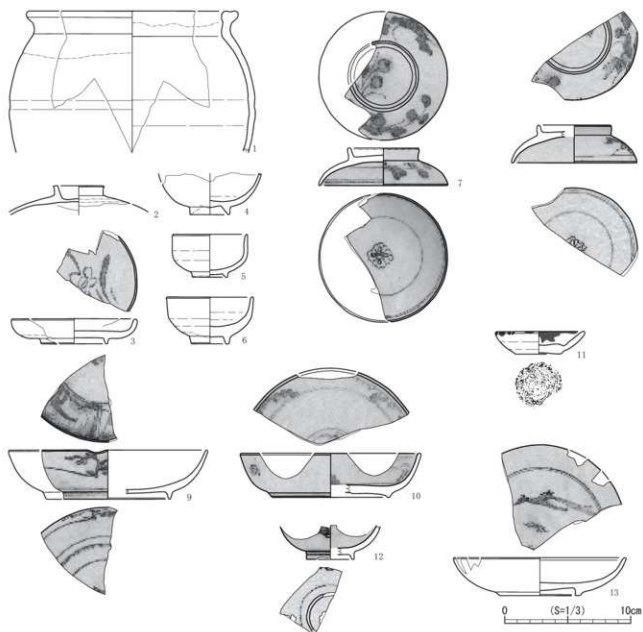
第51図 1T調査区平面・断面図



第52図 2T調査区平面・断面図



第53図 3T調査区平面・断面図



図録番号	発掘番号	出土遺構	階位	種別	器種	寸法 (cm)			外面	内面	備考	写真図録
						口径	口径	器高				
1	1e-1	S01	-	陶器	小型甕	(16.2)	-	(11.2)	鉄輪	鉄輪	大塚相馬? 19c? ロ: 灰輪	23-1
2	1e-2	S01	1	陶器	鉢蓋	-	4.0	(2.3)	復焼: 鉄輪	白高輪	大塚相馬 19c 前~中	23-2
3	1e-3	S01	1	陶器	小型皿	(9.7)	(5.2)	2.0	灰輪 高台に墨青 緑色 黄赤	灰輪 鉄輪 草花文	19c 前半	23-3
4	1e-4	S01	1	陶器	小鉢	-	3.2	(3.3)	白高輪	白高輪	大塚相馬 19c 後半以降	23-4
5	1e-5	S01	3	陶器	小鉢	5.5	2.8	3.4	白高輪	白高輪	大塚相馬 19c 後半以降	23-5
6	1e-10	S01	1	陶器	小鉢	(6.8)	(2.9)	3.7	灰輪	灰輪	大塚相馬 19c 後半	23-6
7	1-2	S01	1	磁器	碗の蓋	10.2	5.6	3.0	染付 草文	染付 見込み: 花文	肥前 18c 後半	23-7
8	1-3	S01	1	磁器	碗の蓋	(10.0)	(5.0)	3.0	染付 草文	染付 見込み: 花文	肥前 18c 後半	23-8
9	1-4	S01	1	磁器	碗の蓋	(15.0)	(8.0)	3.9	染付 草文 高台: 漆塗	染付 見込み: 草花	肥前 18c 前半 ロ: 口縁	23-9
10	1-1	S01	1	磁器	皿	(14.0)	(8.0)	3.5	染付 源氏寺範 鞍の目系付	染付 見込み: 花弁文	瀬戸美濃 19c 中頃	23-10
-	1b-1	S01	3	瓦質土器	-	-	-	-	穿孔1方角 周縁部焼熟	ケール収付着物	-	24-1
-	1e-6	S01	1	陶器	人形(赤土)	-	-	-	色絵	-	瀬戸美濃? 19c 後半以降	24-2
-	1e-7	S01	3	陶器	壺鉢	-	-	-	鉄輪	鉄輪	肥 19c	24-3
-	1e-8	S01	1	陶器	中口径	(30.0)	-	(11.0)	赤高輪	赤高輪 鉄輪 鉄輪	肥 19c 中頃 漆成負目	24-4
-	1e-9	S01	-	陶器	壺鉢	-	-	-	鉄輪	鉄輪	肥 19c 榎木鉢に転写	24-5
11	1a-1	S01	1	土師質土器	打明器	6.9	3.7	1.6	ロクロナガ 底: 刷毛糸切	ロクロナガ	スズ目書	24-6
-	1e-13	S01	1	陶器	壺鉢	-	-	-	鉄輪	鉄輪	肥 19c	24-7
12	1-6	II	磁器	小型碗	-	(5.0)	(2.7)	-	染付 文様不明	鉄輪	肥前 18c? 漆塗りの痕跡あり	24-8
13	1-5	II	磁器	皿	(13.0)	6.4	3.0	-	染付 高台: 雲市	染付 山水文(遠山)	肥前 17c 中頃 景行: 鈔付着	24-9
-	1e-11	-	-	陶器	碗	-	-	-	鉄輪 ハケ目	鉄輪 ハケ目	肥前 17c 後半?	24-10
-	1e-12	II	陶器	鉢	(10.0)	(6.0)	4.2	-	鉄輪	鉄輪	産地不明 19c? 輪形 底: 刷毛糸切	24-11

第54図 第21次調査出土遺物

(1) 堀跡

SD1 堀跡 (第51図)

1 トレンチのⅢ層上面で検出された。調査区の北半部に位置する東西方向の堀跡である。両端は調査区外へ延びる。調査区内での検出長は約2.6m、上端幅約1.9m以上、下端幅約1.7m以上、掘り込み面からの深さは約0.3m、方向はW-17°-Nである。確認された堆積土は1層で、にぶい黄褐色シルトである。堆積土1層から近世瓦(平瓦)や近世陶器が多量に出土した。19世紀前～中期の大堀相馬産、鍋蓋(第54図2)など19世紀代の陶磁器が出土していることから、遺構の埋没年代は、江戸時代後半以降と推測される。

SD2 堀跡 (第51・52図)

1 トレンチと2 トレンチのⅢ層上面で検出された。調査区の南西部に位置するSD1堀跡に直交する南北方向の堀跡である。SD1堀跡に北側は切られているため、SD1堀跡よりも古い。両端は調査区外へ延びる。検出長は約4.2m、上端幅約1.2～1.7m、下端幅約0.8m以上、深さは約20cm、方向はN-13°-Sである。確認された堆積土は5層で、堆積土1・2層から近世陶器が多量に出土した。

(2) 土坑

SK1 土坑 (第53図)

3 トレンチの東側で検出された。平面形状は円形を呈する。検出規模は南北約1.6m、東西約1.7m、深さは約60cmである。断面形状はやや開いた皿形を呈する。堆積土は2層である。遺物は土坑の壁面直上で土師質土器1点と漆器椀1点が共伴して出土した。土師質土器(第54図11)に漆器椀が覆いかぶさった状態で検出され、漆器椀は内面の漆のみ残存していた。

(3) ビット

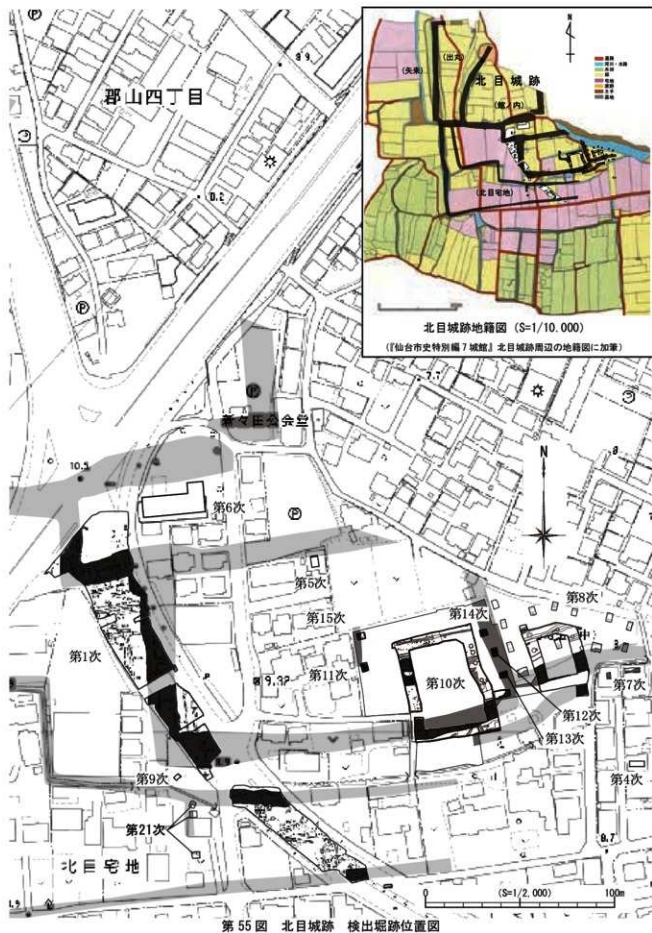
3 トレンチの北側で検出された。平面形状は円形を呈し、規模は42～50cm、深さは40cmである。遺物は出土していない。

5. まとめ

今回の調査地点は、北目城跡の南側に位置している。今回の調査では堀跡2条が検出された。そのうち、堆積状況や位置関係から、SD1堀跡は第1次調査のSD15堀跡の延長部分と考えられる。SD2堀跡は1・2トレンチで検出され、SD2堀跡はSD1堀跡よりも古く、SD2堀跡が埋没した後にSD1堀跡が構築されたと考えられる。さらに南側に延長が想定される3トレンチでは、堀跡の延長は確認できなかったため、堀跡が途切れることが考えられる。南側の3トレンチの調査では、土坑1基、ビット1基を確認した。出土遺物は、土坑堆積層から土師質土器灯明皿と漆器が共伴して出土している。周辺の調査例との繋がりについて、詳細は不明である。

参考文献

- 仙台市教育委員会 1995『北目城跡』仙台市文化財調査報告書第197号  
仙台市史編さん委員会 2006『仙台市史 特別編7 城跡』





1. 1T 全景遺構検出状況（東から）



2. 1T 全景完掘状況（西から）



3. 1T 東壁（西から）



4. 1T 南壁断面（北から）



5. 2T 北壁（南から）



6. 2T 全景写真（東から）



7. 3T 北壁（南から）



8. 3T SK1 検出写真（東から）

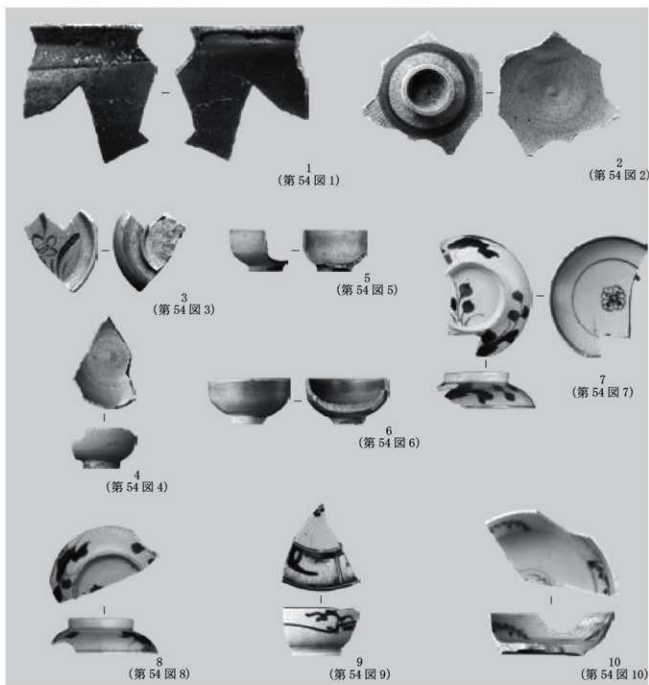
写真図版 22 北目城跡第21次調査（1）



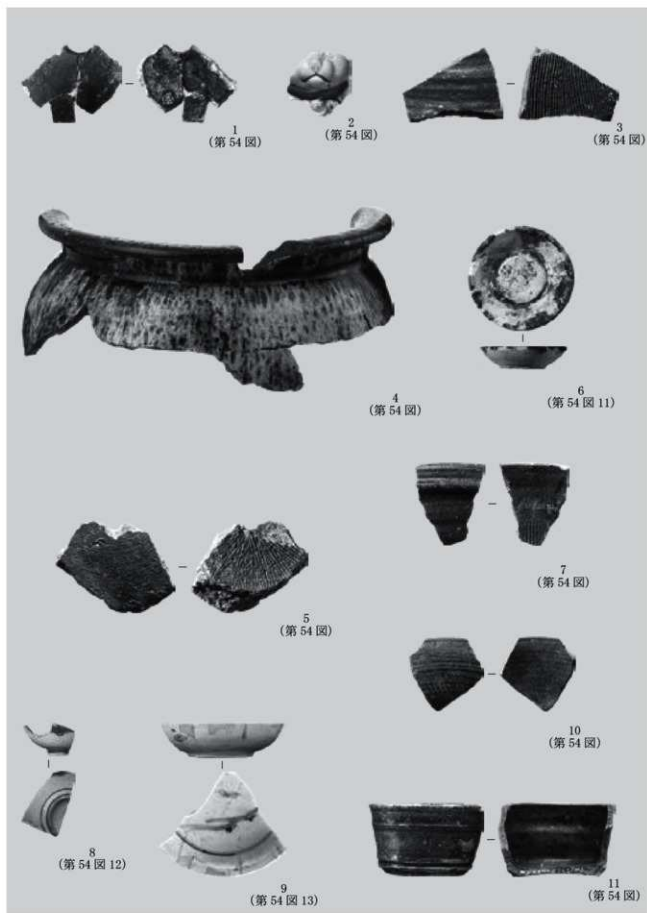
9. 3T SK1 遺物出土状況（北東から）



10. 3T 全景写真（東から）



写真図版 23 北目城跡第 21 次調査（2）・出土遺物（1）



写真図版 24 北目城跡第21次調査出土遺物(2)



## 第7章 富沢遺跡の調査

### 第1節 遺跡の概要

富沢遺跡は、仙台市南東部の太白区富沢、長町南、泉崎、鹿野等に広くまたがる、水田跡を中心とする大規模な複合遺跡である。遺跡北西側には青葉山丘陵、南西には高館丘陵が東に向かって張り出し低地部と面している。また、青葉山丘陵南東縁には長町・利府構造線と呼ばれる活断層が北へ伸び、それによって低地と丘陵部はより明確に分けられる。青葉山丘陵と高館丘陵の間から平野部に流れ込む名取川の下流域西半部は沖積平野となっており、左岸は郡山低地、右岸は名取低地と呼ばれる。

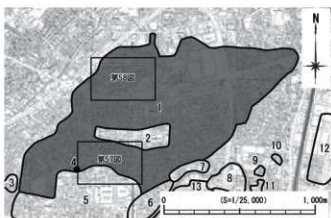
本遺跡は郡山低地の中央西寄りに位置し、仙台平野を南東方向に流れる広瀬川と、名取川の支流である沢川の自然堤防に挟まれた後背湿地上に立地する。地質や富沢遺跡における土地条件の変遷については、富沢遺跡第15次調査報告書が詳しいため、そちらを参照していただきたい。

富沢遺跡の発掘調査次数はこれまで152回を数え、弥生時代から近世にかけての水田が重層的に検出されている。特に1987～1988年の第30次調査では古代の条里型土地区画に関わる大畦畔たいせいはんの検出に加え、旧石器時代の遺構や遺物も発見されており重要である。今回の153次・155次調査地点の周辺でも、それぞれ水田とともに多くの畦畔や溝などが検出され学史的に大きな成果を上げている。また、富沢遺跡周辺には数々の遺跡が分布しており通時的に見て生活に適した場所であったと考えられる。以下、主要な近辺の遺跡に触れ富沢の歴史環境を概観したい。

下ノ内浦遺跡：富沢遺跡の南に隣接する縄文時代早期～前期・後期・弥生～古代にかけての集落跡および水田跡である。日計式土器とともに堅穴遺構と7基の土壌が検出されていることから、縄文早期にも近辺では生活の痕跡が確認できる。また、平安時代と考えられる水田跡が検出されている。

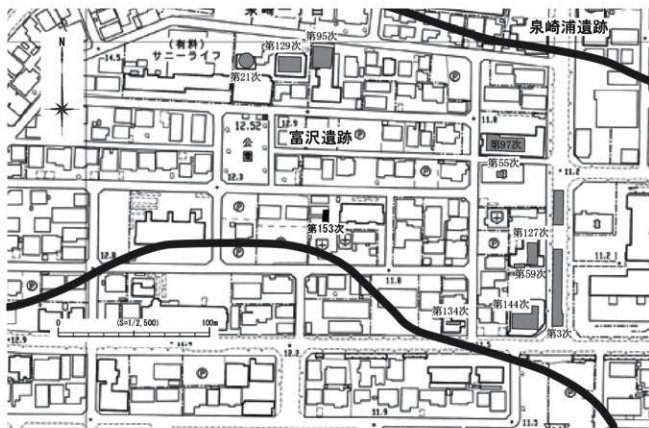
山口遺跡：富沢遺跡に南接、下ノ内浦遺跡に西接する縄文時代早期末～後期・弥生・中世にかけての集落跡および水田跡である。山口遺跡で検出された平安時代の水田跡は10世紀前半とされる火山灰層で覆われており、真北方向を基準とする大畦畔と直交する小畦畔によって区画される。この大畦畔は富沢遺跡の各調査でも検出されており、条里型土地割に関わる畦畔であると考えられている（平間 1991）。

泉崎浦遺跡：富沢遺跡のほぼ中心部に位置する、縄文～古墳・平安・近世にかけての集落跡および水田跡である。後背湿地と微高地に位置し、後背湿地側で弥生時代と平安時代の水田跡が検出された。畦畔は東西と南北が意識されているが、弥生時代の水田は水田規模、枚数などは不明である。

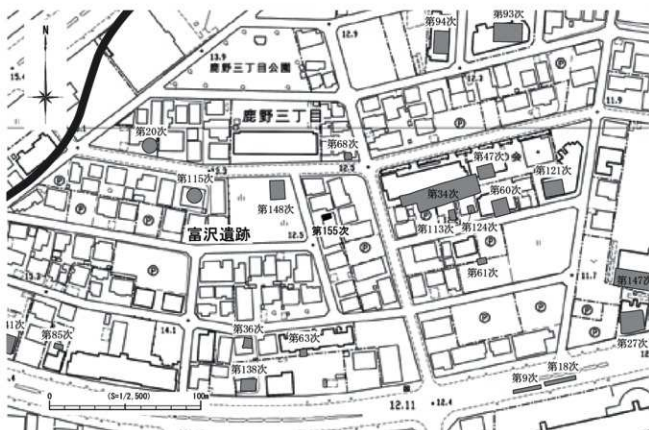


番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	富沢遺跡	包含地、水田跡	後背埋地	後期新石器～中世
2	泉崎浦遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背埋地	縄文～古墳、平安、近世
3	富沢清水遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～平安
4	鹿野古墳	古墳	後背埋地	古墳
5	山口遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背埋地	縄文～中世
6	下ノ内浦遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	縄文～中世
7	泉崎遺跡	散布地	自然堤防	古墳～古代
8	三股遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	弥生、古代～近世
9	長町南遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～平安
10	長町六丁目遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～平安
11	新田遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～平安
12	長町東遺跡	包含地	自然堤防	弥生、古墳、古代
13	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～古代、近世

第56図 富沢遺跡と周辺の遺跡



第57図 第153次調査区位置図



第58図 第155次調査区位置図

## 第2節 第153次調査

### 1. 調査要項

遺 跡 名	富沢遺跡（宮城県遺跡登録番号：01369）
調 査 地 点	仙台市太白区泉崎一丁目 29-10
調 査 期 間	令和4年3月14日～3月24日
調査対象面積	203.08 m <sup>2</sup>
調 査 面 積	約 32 m <sup>2</sup>
調 査 原 因	共同住宅建築工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局长生涯学習部文化財課調査調整係
担 当 職 員	主任 堀江洋介 主事 早川太陽



第59図 第153次調査区配置図

### 2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、令和3年10月26日付で事業者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（令和3年11月1日付 R3 教生文第108-475号で通知）に基づき実施した。

調査では対象地内に東西4.0m×南北8.0mの調査区を設定し、重機により盛土および現代の水田耕作土を除去した後、安全管理のためGL-1.5mを目安に中段をつけた。今回は調査可能面積と期間を考慮すると広範囲な面的調査が難しく断面観察での調査が主体であるため、土層観察用および排水用の側溝を調査区東側と南側、西側の一部に設定して掘削し、水田耕作土の有無を確認した。その後、古代のものと考えられる水田耕作土を掘削し、調査を終了した。

遺構の記録は調査区平面図および東壁、南壁土層断面図（S=1/20）を作製し、記録写真の撮影はデジタルカメラを用いて行った。記録作業終了後、重機により調査区を埋め戻し、調査を終了した。

### 3. 基本層序

今回の調査では、盛土下に基本層を9層確認した。このうち、I～IV層が水田耕作土である。遺構検出作業を行ったIV層上面までの深さは1.6mである。

- I 層：10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。盛土前の水田耕作土である。下層ブロック（φ10mm）を層下面に少量含む。層厚は約8～16cmである。
- II 層：10YR2/1 黒色粘土。近世～近代の水田耕作土と推定される。層下面には凹凸がある。層厚は約0～14cmである。
- III 層：10YR3/2 黒褐色粘土。層下面に下層ブロックを少量含む、下層由来の灰白色火山灰ブロック（φ5～10mm）を少量含むことから、灰白色火山灰降下以降の古代～中世の水田耕作土と推定される。層下面の凹凸は激しい。層厚は約2～16cmである。
- IV 層：7.5YR3/1 黒褐色粘土。古代の水田耕作土である。層上面と層中に灰白色火山灰ブロック（φ10mm）を多く含む。層下面の凹凸は激しい。層厚は約6～27cmである。
- V 層：10YR2/1 黒色泥炭質粘土。植物遺体を含む。層厚は約0～30cm以上である。
- VI 層：10YR2/2 黒褐色粘土と10YR4/6 褐色粘土の互層。部分的に層下面に7.5YR3/1 黒褐色の細粒砂が帯状に含まれる。層厚は約4～20cm以上である。

- Ⅶ 層：10YR2/2 黒褐色泥炭質粘土。層中に植物遺体を少量含む。層厚は約3～18 cm以上である。
- Ⅷ 層：10YR6/2 灰黄褐色砂層。東壁両端と南壁の一部で確認された。埋没した自然流路を構成する土層である。層厚は約30 cm以上である。
- Ⅸ 層：10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。層中に植物遺体を少量含む。層厚は約30 cm以上である。

#### 4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では平安時代の条里型土地区画に伴う大畦畔の検出が想定されていた。調査の結果、現代の水田を除いて水田耕作土が3面確認され、水田に伴う区画やその他の施設などは確認されなかった。遺物が出土していないため、詳細な時期の確定は困難である。想定される各水田耕作土の帰属時期は以下の通りである。

I層（現代）—II層（近世～近代?）—III層（古代～中世?、灰白色火山灰降下以降）—IV層（古代）

##### (1) II層水田耕作土

###### 1. 検出・遺存状況

畦畔などは確認されなかったが、土質と下面の凹凸により水田耕作土と判断された。東壁の一部と南壁で確認された。上層の耕作によって攪拌され壊されているため、遺存状況は極めて悪い。

###### 2. 耕作土

耕作土は黒色の粘土である。層厚は約0～14 cmで一定でない。下面には凹凸がある。

##### (2) III層水田耕作土

###### 1. 検出・遺存状況

畦畔などは確認されなかったが、土質と下面の凹凸により水田耕作土と判断された。調査区東壁、南壁ともに確認され、遺存状況はやや良好である。

###### 2. 耕作土

耕作土は黒褐色の粘土である。層厚は約2～16 cmで一定でない。下面の凹凸が激しい。下層を攪拌しているため、層中に灰白色火山灰ブロックを含む。

##### (3) IV層水田耕作土

###### 1. 検出・遺存状況

畦畔などは確認されなかったが、土質と下面の凹凸により水田耕作土と判断した。層上面に灰白色火山灰ブロックが良好に残存し、最大で径30 cm前後の範囲を覆っている。耕作土の遺存状況も良好である。

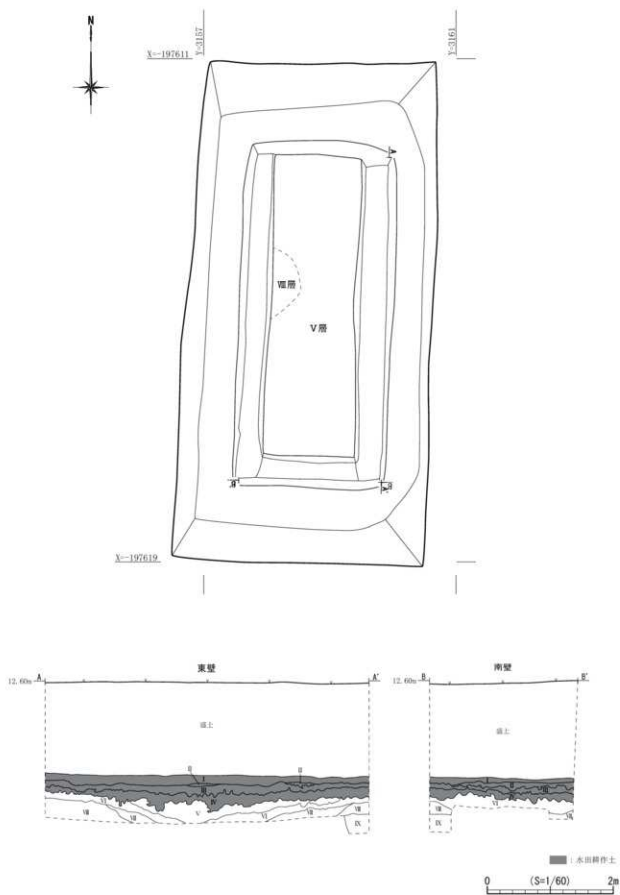
###### 2. 耕作土

耕作土は黒褐色の粘土である。層厚は6～27 cmで一定でない。下面の凹凸が激しい。

#### 5. まとめ

今回の調査地点は富沢遺跡の南側に位置する。今回の調査では、盛土下に現代の水田を除いて水田耕作土が3面確認された。このうち、IV層上面の一部では灰白色火山灰が径30 cm前後のブロック状に検出された。条里型土地区画に関わる大畦畔の検出が想定されていたが、畦畔やそれに伴う施設等は確認されなかったことから推定されている畦畔の区画が東西どちらかに傾いているか途切れていることが予想される。

また、今回の調査における断面観察の結果、粗砂主体の流路跡（Ⅷ層）が粘土（Ⅴ～Ⅶ層）の堆積によって埋没し平坦になった湿地状の環境にIV層～I層の水田が構築されていることが明らかになった。富沢遺跡の中でも、南



第60図 第153次調査区平面図・断面図

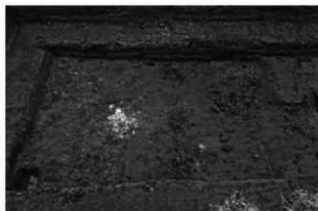
第2節 第153次調査

部の泉崎周辺の土地の形成過程と利用の一端が明らかになった点は、今回の調査の成果である。

【引用・参考文献】

仙台市教育委員会 2022 「第3章 富沢遺跡の調査」『穴田東窯跡ほか発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書  
第498集 pp35 - 60

平間亮輔 1991 「(ウ)条里型土地割について」『富沢遺跡—第30次調査報告書第1分冊—縄文～近世編』仙台市  
文化財調査報告書第149集 第6章第3節 pp366～371



1. IV層水田耕作土 確認状況（東から）

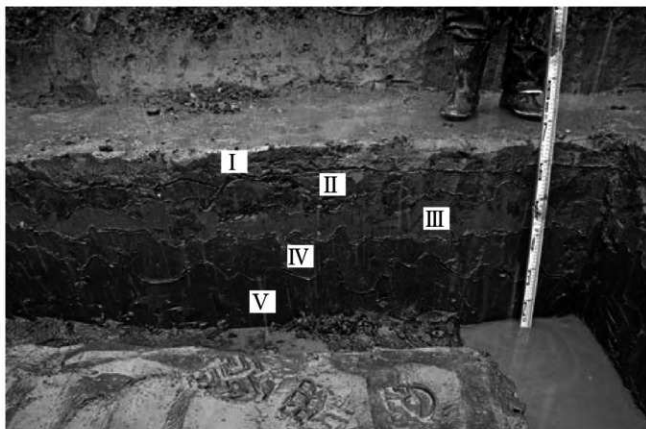


2. IV層水田耕作土 完掘状況（北から）

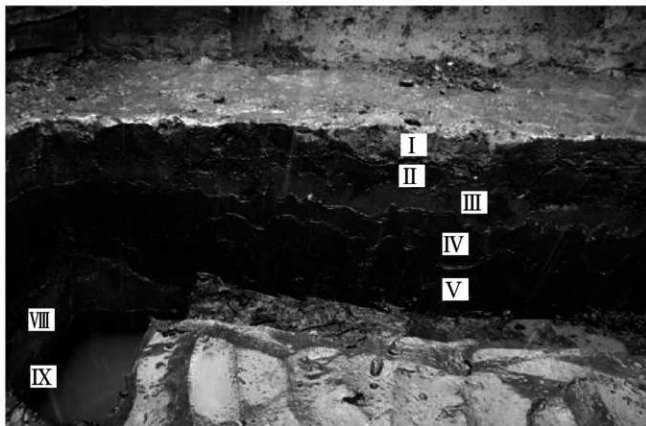


3. 調査区東壁断面（西から）

写真図版 25 富沢遺跡第153次調査（1）

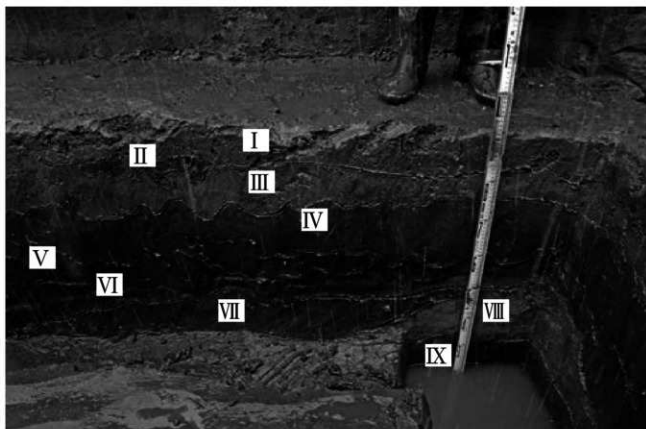


1. 調査区南壁断面 (1) (北から)

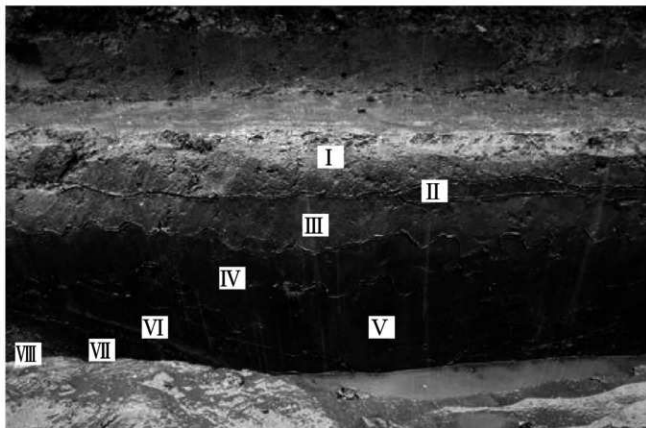


2. 調査区南壁断面 (2) (北から)

写真図版 26 富沢遺跡第 153 次調査 (2)



1. 調査区東壁基本層序（1）（西から）



2. 調査区東壁基本層序（2）（西から）

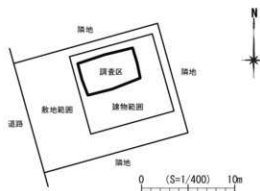
写真図版 27 富沢遺跡第153次調査（3）



### 第3節 第155次調査

#### 1. 調査要項

遺 跡 名	富沢遺跡（宮城県遺跡登録番号：01369）
調 査 地 点	仙台市太白区鹿野3丁目222番6
調 査 期 間	令和4年6月1日～6月8日
調査対象面積	79.12 m <sup>2</sup>
調 査 面 積	18 m <sup>2</sup>
調 査 原 因	事務所建築工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局长生涯学習部文化財課調査調整係
担 当 職 員	主事 早川太陽 山口沙織



第61図 第155次調査区配置図

#### 2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、令和4年2月15日付で事業者から提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（令和4年2月17日付R3教生文第109-145号で通知）に基づき実施した。

調査では対象地内に東西3.0m×南北6.0mの調査区を設定し、重機により盛土および現代の水田耕作土を除去した。今回は調査可能面積と期間を考慮すると広範囲な面的調査が難しく断面観察での調査が主体であるため、土層観察用および排水用の側溝を調査区北側と西側に設定して掘削し水田耕作土の有無を確認した。悪天候により調査区壁面が崩壊の恐れがあり危険と判断されたため、古代の水田耕作土を検出し完脱せず、下層確認のために一部分を深掘りし調査を終了した。

遺構の記録は調査区平面図および北壁断面図(S=1/20)を作製し、記録写真の撮影はデジタルカメラを用いて行った。記録作業終了後、重機により埋め戻し、調査を終了した。

#### 3. 基本層序

今回の調査では盛土下に基本層を大別で5層、細別で6層確認した。このうち、I～IV層が水田耕作土である。遺構検出作業を行ったIV層上面までの深さは約1.2mである。

- I 層：10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。盛土前の水田耕作土である。小円礫（φ 10 mm）を少量含む。層下面に酸化鉄が大量に集積する。層厚は約12～24cmである。
- II 層：10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。近代の水田耕作土と推定される。層下面には若干の凹凸がある。層厚は約0～19cmである。
- III 層：10YR2/1 黒色粘土。近世の水田耕作土である。層下面には凹凸がある。層厚は約5～17cmである。
- IV 層：2.5YR3/1 黒褐色粘土。古代の水田耕作土である。層下面には凹凸があるが部分的に平坦である。層中に灰白色火山灰ブロックを少量含む。また、層下面に下層ブロックを少量含む。層厚は約4～29cmである。
- V a 層：10YR1.7/1 黒色泥炭質粘土と10YR3/1 黒褐色泥炭質粘土の互層。植物遺体を層中に大量に含む。層厚は約35cmである。
- V b 層：10YR6/2 灰黄褐色泥炭質粘土。植物遺体を層中に大量に含む。層厚は約15cm以上である。

#### 4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、平安時代の条里型土地区画に伴う大畦畔の検出が想定されていた。調査の結果現代の水田を除いて水田耕作土が3面確認され、水田に伴う区画やその他の施設などは確認されなかった。遺物はⅢ層水田耕作土中から急須の把手が出土した。想定される各水田耕作土の帰属時期は以下の通りである。以下、調査対象である近世以前の水田耕作土について詳述する。

I層（現代）—II層（近代?）—Ⅲ層（近世?）—IV層（古代）

##### (1) Ⅲ層水田耕作土

###### 1. 検出・遺存状況

断面観察によって確認された。土質と下面の凹凸により水田耕作土と判断された。調査区東壁、南壁ともに確認され、遺存状況はやや良好である。北壁の一部で水田耕作土が途切れてⅢ層との境目が確認された部分があり、疑似畦畔Bであった可能性があるが面的には確認できなかった。

###### 2. 耕作土

耕作土は黒褐色の粘土である。層厚は約6～27cmで一定でない。下面には凹凸がある。

###### 3. 出土遺物

Ⅲ層水田耕作土の検出の際に陶器の急須把手部分が1点出土した。詳細な年代や産地は不明である。

##### (2) IV層水田耕作土

###### 1. 検出・遺存状況

畦畔などは確認されなかったが、土質と下面の凹凸により水田耕作土と判断された。層中に灰白色火山灰ブロックを含む。耕作土の遺存状況は良好である。

###### 2. 耕作土

耕作土は黒褐色の粘土である。層厚は6～27cmで一定でない。下面には凹凸がある。

###### 3. 水田面の標高と傾斜

全体的に南西方向に傾斜している。標高は10.798～11.132mである。

#### 5. まとめ

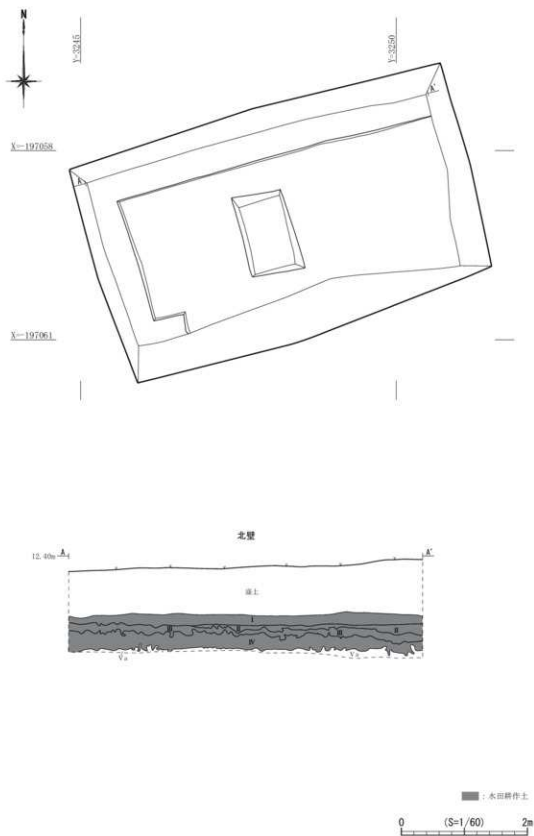
今回の調査地点は富沢遺跡の北西側に位置する。今回の調査では水田耕作土が現代の水田を除き3面確認された。条里型土地区画に関わる大畦畔の検出が想定されていたが、水田耕作土のみが確認され畦畔は確認されなかったことから、畦畔は推定されているラインよりも東西に傾いているか途切れている可能性が高い。推定される土地区画は第63図の通りである。

また、古代より古い時期の水田跡は確認されなかった。調査地点の北西約10mの地点で行われた第148次調査では古墳時代以前の水田跡が確認されているが、今回の調査地点ではその様相と異なっているため、この地点までは水田が形成されなかったと推測される。

#### 【引用・参考文献】

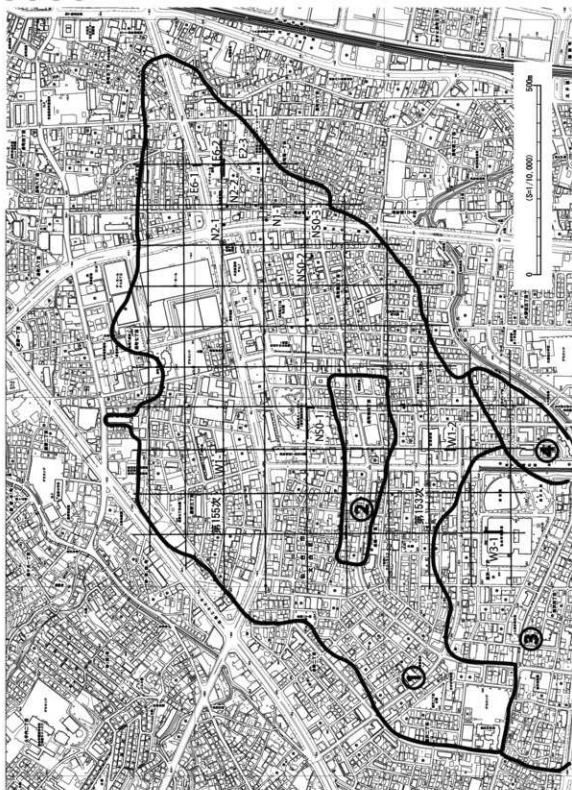
仙台市教育委員会 2022 「第3章 富沢遺跡の調査」『穴田東照跡ほか発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書 第498集 pp35～60

平間亮輔 1991 「(ウ)条里型土地区画について」『富沢遺跡—第30次調査報告書第1分冊—縄文～近世編』仙台市文化財調査報告書第149集 第6章第3節 pp366～371



第62図 第155次調査区平面・断面図

- ①富沢遺跡
- ②泉崎浦遺跡
- ③山口遺跡
- ④下ノ内浦遺跡



第63図 富沢遺跡における条里型土地区画復元図



1. IV層水田耕作土 検出状況（西から）



2. 調査区北壁断面（1）



3. 調査区北壁断面（2）



4. 調査区北壁断面（3）

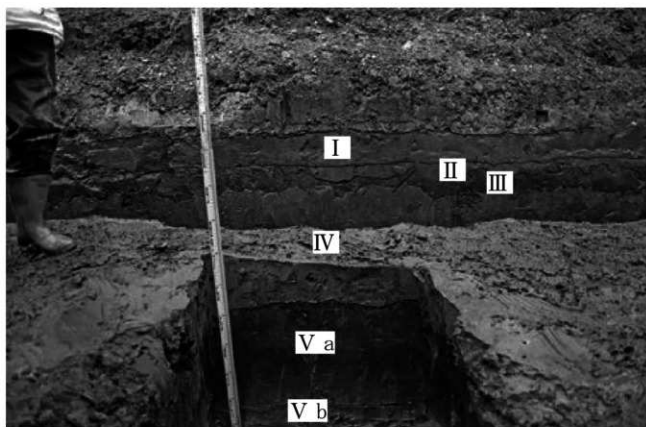


5. 調査区西壁断面

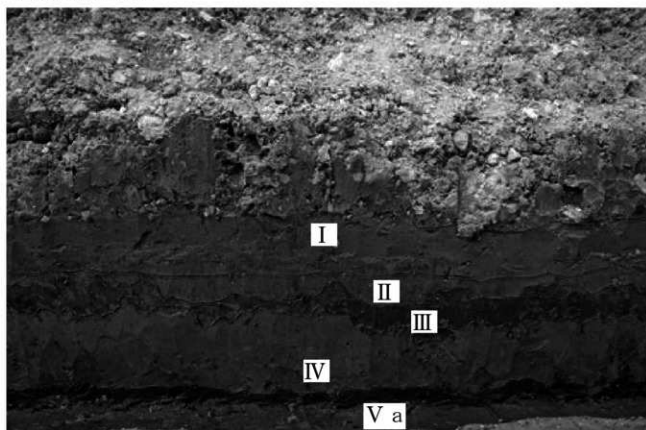


図面 番号	発見 番号	出土 遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)		写真 図版
						口径	底径	
-	1c-1	-	Ⅲ	陶器	急須	2.1	-	(57)
		外面		内面			備考	
		-		-			把手 産地・時期不明	28-6

6. 富沢遺跡第155次調査出土遺物



1. 調査区北壁基本層序



2. 調査区西壁基本層序

## 第8章 富沢館跡の調査

### 第1節 遺跡の概要

富沢館跡は仙台市太白区富沢字館、熊野前に所在する。仙台市の南部、地下鉄南北線富沢駅から西へ約700mに位置し、名取川の支流の笹川によって形成された標高約14～18mの自然堤防上に立地する。

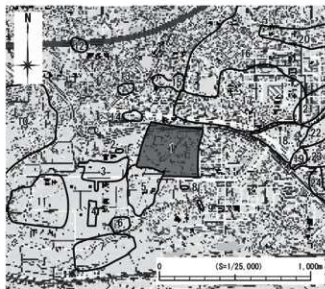
縄文時代では、後期中葉の宝ヶ峰式の時期を主体として、竪穴住居跡などの遺構が確認されており、縄文土器のほか土偶やスタンプ形土製品なども出土している。

古代では跡を伴う竪穴遺構が複数確認され、鉄滓が多数出土した竪穴遺構もあることから鍛冶関連の遺構であると考えられている。これらの時期は9世紀から10世紀と推定される。また同様の遺構は、隣接する鍛冶屋敷A遺跡、鍛冶屋敷前遺跡などでも確認されており、鍛冶屋敷A遺跡からは「謹啓 申請請事 合□□」「大田部」などと刻書された砥石が出土している（仙台市教育委員会2018）。

中世になると、この地域は国人領主栗野氏の支配下となり、城館が造営される。この館の詳細な造営時期や造営者は不明だが、入生田家に残る『入生田家之故実』と『館記』においては、北目城主であった栗野大膳の造営によるものとされ、地域の伝承では栗野氏家臣の富沢伊賀守が居住したと伝わる。

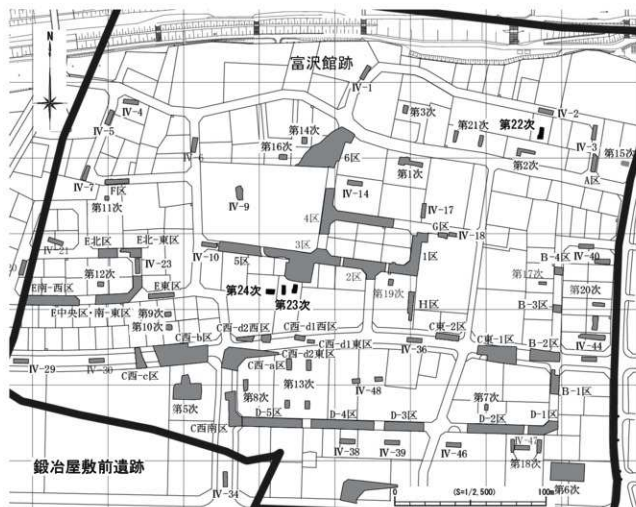
平成25年度から始まった土地区画整理事業に伴い、館跡の様相の大部分は変化したが、中心部分の土塁は現在も保存され、その姿を残している。発掘調査により館跡の周囲には1～4条に渡る堀跡が巡らされていたことが判明した。主郭部の東側では門跡が検出され、また南西側では土塁が筋違いに配置されていることから、虎口を形成していたものと考えられる。その他2基の火葬遺構が検出され、骨片のほか古銭などが出土した（仙台市教育委員会2018）。

近世になると入生田家の在郷屋敷となり、『館記』には仙台藩二代藩主伊達忠宗の時、堀や土塁があつては城や要害のようで誤解を招くとのことから、土塁を崩し、堀を埋めたとの記述がある。その後は一部の土塁を残して、この地を畑や水田として利用したと考えられる。



番号	遺跡名	種別	地態	時代
1	家茂館跡	堀跡	自然堤防	縄文、平安～近世
2	宮前遺跡	集落跡	石段	平安
3	鍛冶屋敷A遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古代～中世
4	宮ノ中遺跡	集落跡	自然堤防	平安
5	鍛冶屋敷前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、奈良～中世
6	鍛冶屋敷B遺跡	付立地	自然堤防、後背覆地	縄文、古代～近世
7	六本松遺跡	集落跡	自然堤防	古代～平安
8	川崎遺跡	集落跡	自然堤防	縄文後、古代
9	川崎遺跡	集落跡	自然堤防	縄文後
10	上野遺跡	集落跡	段丘	縄文中、古代～平安
11	唐ノ東遺跡	集落跡	自然堤防	弥生、平安
12	西台遺跡	竪跡	段丘	奈良、平安
13	富沢上ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文
14	堀ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安
15	富沢清水遺跡	集落跡	空地、堀	奈良、平安
16	富沢遺跡	水田跡、包合地	後背覆地	田石跡～近世
17	山口遺跡	集落跡、水田跡、付立地	自然堤防、後背覆地	縄文～近世
18	下ノ内遺跡	集落跡、墓、埋跡	自然堤防	縄文、弥生、奈良～近世
19	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古墳、奈良、平安
20	原崎遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背覆地	縄文～古代、近世
21	下ノ内遺跡	付立地	自然堤防	縄文、弥生、奈良、平安
22	六反田遺跡	集落跡、古墳、堀、埋跡	自然堤防	縄文～古墳、平安～近世
23	大野田古墳群	古墳群跡	自然堤防	古墳～平安
24	伊古田B遺跡	埋跡	自然堤防	古墳～平安

第64図 富沢館跡と周辺の遺跡

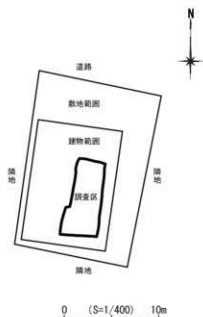


第 65 図 第 22 次・23 次・24 次調査区位置図

## 第2節 第22次調査

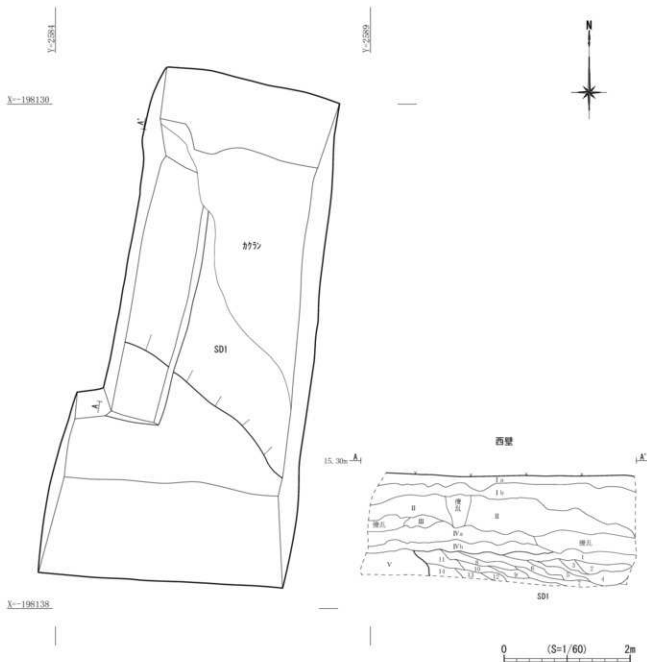
### 1. 調査要項

遺 跡 名	富沢館跡 (01246)
調 査 地 点	仙台市太白区富沢西一丁目2-19
調 査 期 間	令和4年1月31日～2月1日
調 査 対 象 面 積	118.27㎡
調 査 面 積	約 32.0㎡ (4.0m × 8.0m)
調 査 原 因	共同住宅建築工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部 文化財課調査調整係
担 当 職 員	主査 菅原翔太 主任 堀江洋介 主事 柳澤 楓



第 66 図 第 22 次調査区配置図





遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD1	1	10YR4/1 褐色	砂質シルト	炭化物少量、酸化鉄を多量含む。
	2	10YR4/1 褐色	砂質シルト	炭化粒・酸化鉄少量、砂ブロックを含む。
	3	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄少量、炭化物を含む。
	4	10YR4/1 褐色	粘土質シルト	炭化物・酸化鉄少量、灰黄褐色砂を零星状を含む。
	5	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	炭・酸化鉄少量含む。
	6	10YR4/1 褐色	粘土質シルト	酸化鉄多量、炭化物少量、褐色砂を帯状を含む。
	7	10YR4/1 褐色	粘土	酸化鉄、灰黄褐色砂を帯状に含む。
	8	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	マンガン粒・酸化鉄・白色砂・炭化粒を含む。
	9	10YR4/1 褐色	粘土	酸化鉄を含む。
	10	10YR3/1 黒褐色	粘土	酸化鉄、砂を零星状に褐色砂を帯状に含む。ややグライ化。
	11	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト	酸化鉄多量、褐色砂を帯状に含む。
	12	10YR3/1 黒褐色	粘土	灰黄褐色砂を多量含む。グライ化。
	13	10YR3/1 黒褐色	粘土	酸化鉄を含む。グライ化。
	14	10YR4/1 褐色～ 10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄・砂を多量含む。
	15	10YR3/1 黒褐色	粘土	ややグライ化。

第 67 図 第 22 次調査区平面・断面図

## 2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、申請者から令和3年12月16日付で提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（令和3年12月20日付R3教生文第109-121号で回答）に基づき実施した。

調査では対象地内に東西4.0m×南北8.0mの調査区を設定し、重機により盛土（調査区全体ではなく東側と北側の一部で確認した）および基本層Ⅰ～Ⅳ層除去後、Ⅴ層上面（GL-1.3m程度）で遺構検出作業を行ったところ堀跡1条が検出された。

調査では必要に応じて、調査区平面図（S=1/20）および調査区断面図（1/20）を作製し、デジタルカメラにより記録写真の撮影を行った。

## 3. 基本層序

今回の調査では、基本層を大別で5層、細別で7層確認した。遺構検出面であるⅤ層上面までは、GL-1.3m程度である。

Ⅰa層：10YR3/3 暗褐色シルト。炭化物を少量、礫を少量含む。層厚10～20cm程度。

Ⅰb層：10YR4/6 褐色シルト。炭化物を少量含む。層厚10～70cm程度。

Ⅱ層：10YR4/4 褐色粘土質シルト。10YR5/8 粘土ブロックを含む。炭化物を含む。層厚0～60cm程度。

Ⅲ層：10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。ややグライ化した黒褐色粘土ブロックを含む。炭化物を少量含む。部分的に確認した。層厚0～20cm程度。

Ⅳa層：10YR4/4 褐色砂質シルト。白色砂を含む。部分的にややグライ化している。層厚30cm程度。

Ⅳb層：10YR3/4 暗褐色砂質シルト。炭化物を少量、酸化鉄を少量含む。部分的にグライ化。層厚20cm程度。

Ⅴ層：10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト。酸化鉄を多く含む。炭化物少量。層厚不明。

## 4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、基本層Ⅳc層上面で堀跡1条を確認した。

### (1) 堀跡

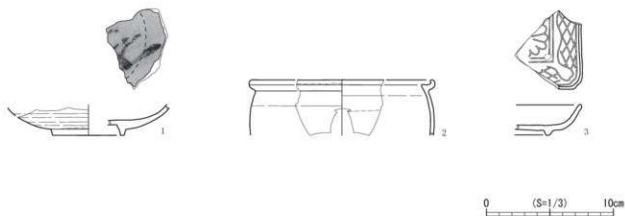
#### SD1 堀跡

調査区のほぼ北半分が堀跡である。北西から南東方向に伸び、調査区外北側に広がる。今回の調査では、堀の南辺を確認した。検出した幅は調査区西壁で幅3.5m、長さ3.3mである。安全面を考慮し、底面までの調査は行わなかったため、断面形は不明である。深さは0.6m以上で、堆積土は15層確認した。遺物は堆積土上層部と下層部から陶磁器、堆積土7層から瓦が出土した。

## 5. まとめ

今回の調査地点は、富沢館跡の北東部に位置する。これまでの調査で確認されていたSD87堀跡（第466集-A区）と一連の堀が通ると推定されている箇所であった。

調査では、Ⅴ層上面で北西から南東にかけて伸びる堀跡（SD1堀跡）が1条確認された。この堀跡は位置や方向からSD87堀跡と一連のものであると考えられる。今回の調査で確認できたのは堀の南岸部で、想定よりも北側を通ることが確認された。遺物は近世以降の瓦、陶磁器が出土した。瓦は部分的な破片資料であるため詳細は不明であるが、凸面に水切溝が確認できる。陶磁器は方形の小皿などが堀堆積土の上層部と下層部でそれぞれ出土した。



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	部種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真図版
						口径	口径	器高				
1	1a-1	-	基本層	陶器	小形皿	-	(5.6)	(2.4)	灰釉	灰釉 数物・灰釉	大塚相馬 19c 前葉～中葉	30-1
2	1e-1	SH1	-	陶器	土鍋	14.2	-	(4.3)	灰釉	灰釉	大塚相馬 19c 前葉～中葉	30-2
3	子-1	SH1	-	陶器	手取皿	-	-	2.4	灰釉	灰文(型押し) 目録1	切込壁 19c 前葉～中葉 裏入り	30-3

図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種別	部種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
-	G-1	SH1	-	瓦	平瓦	-	-	-	凸部水切溝 粉土灰色	30-4

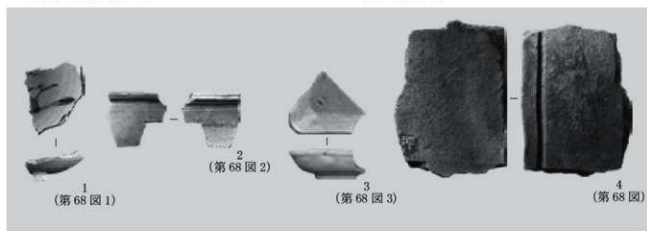
第 68 図 第 22 次調査出土遺物



1. 調査区全景 (南から)



2. 堀跡 (東から)

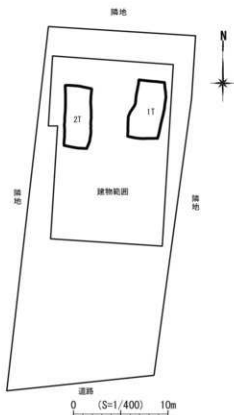


写真図版 30 富沢館跡第 22 次調査・出土遺物

### 第3節 第23次調査

#### 1. 調査要項

遺 跡 名	富沢跡跡 (01246)
調 査 地 点	仙台市太白区富沢西1丁目10-5、 10-6、10-15、10-16
調 査 期 間	令和4年4月25日～27日
調査対象面積	237.09㎡
調 査 面 積	約36.0㎡ (3.0m×6.0m×2箇所)
調 査 原 因	共同住宅建築工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部 文化財課調査調整係
担 当 職 員	主任 堀江洋介 主事 狩野佑介 須貝慎吾 早川太陽 吉田 大 山口沙織



第69図 第23次調査区配置図

#### 2. 調査に至る経過と調査方法

本件は令和4年1月14日付で申請者から提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（令和4年1月21日付R3教生文第109-139号で通知）に基づき実施した。

建築範囲内の東側に2箇所の調査区（1トレンチ（幅3.0m×長さ6.0m）、2トレンチ（幅3.0m×長さ6.0m）を設定し、令和4年4月25日に調査を開始した。重機により盛土、基本層Ⅰ～Ⅱ層を除去後、Ⅲa層上面で遺構検出作業を行った。その結果、1トレンチ・2トレンチのⅢa層上面で東西方向のSD1堀跡1条が検出された。SD1堀跡は両トレンチで検出され、概ね東西方向に延びるが南西方向にやや傾いている様子が確認された。令和4年4月27日までに調査区内の計測等を行い、野外調査を終了した。

遺構の記録は、トータルステーションを用いて調査区平面図（S=1/20）、遺構断面図（S=1/20）を作製し、一眼レフデジタルカメラにより記録写真の撮影を行った。

#### 3. 基本層序

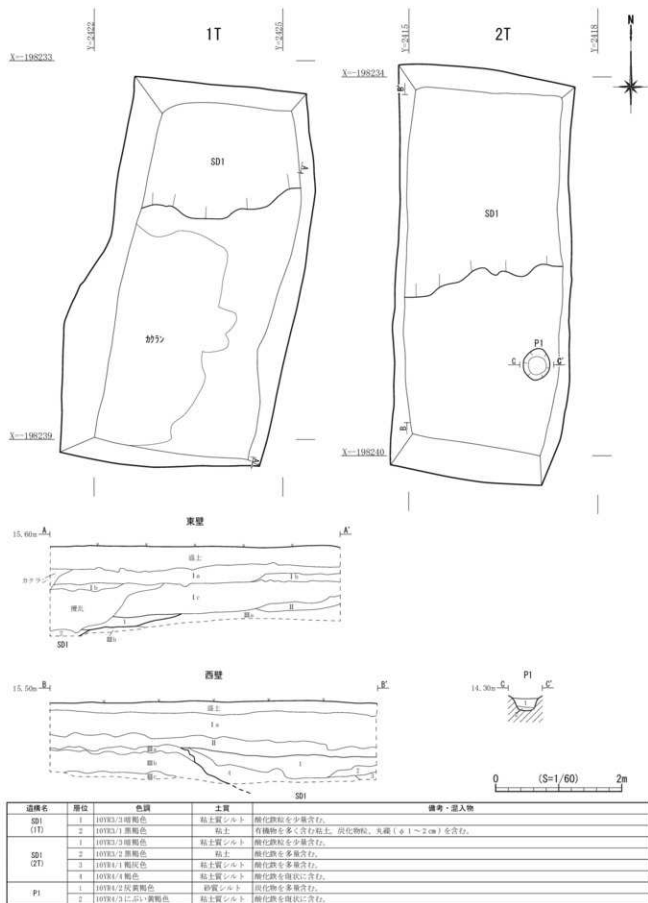
今回の調査では、厚さ約20～50cmの盛土の下に大別で3層、細別7層の基本層を確認した。遺構検出面であるⅢa層上面までの深さは約1.1mである。

I a層：10YR4/1 褐色粘土質シルト。炭化物、マンガン粒を少量含む。酸化鉄を少量斑状に含む。盛土以前の  
水田耕作土である。

I b層：10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト。炭化物を少量含む。I c層由来の粘土質シルトブロックを含む。近現  
代の耕作土である。

I c層：10YR4/4 褐色粘土質シルト。炭化物、マンガン粒を少量含む。酸化鉄を含む。近現代の耕作土である。

II 層：10YR4/4 褐色シルト。炭化物を少量含む。Ⅲa層由来の粘土質ブロックを含む。



第70図 第23次調査区平面・断面図

Ⅲ a 層：10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。炭化物を少量含む。白色砂を少量含む。

Ⅲ b 層：10YR3/2 黒褐色砂質シルト。炭化物を少量含む。植物由来の粘土を含む。径1～2cmの円礫を少量含む。

Ⅲ c 層：10YR4/4 褐色粘土質シルト。炭化物を少量含む。白色砂を少量含む。

#### 4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、堀跡1条とピット1基が検出された。

##### (1) 堀跡

###### SD1 堀跡（第70図）

1、2 トレンチのⅢ a 層上面で検出した堀跡である。両調査区の北側で検出し、東西方向の堀跡で大半が調査区外へ延びる。規模は1 トレンチでは、長さ2.6m以上、幅1.8m以上、深さ0.3m以上で、2 トレンチでは、長さ2.5m以上、幅3.2m以上、深さ0.4m以上である。断面形は、安全面を考慮し、底面までの調査は行わなかったため不明である。堆積土は4層確認した。

遺物は堆積土から土師器片と須恵器片が出土している。その中から、ロクロ成形の土師器坏2点と土師器甕1点を図化した（第70図1～3）。

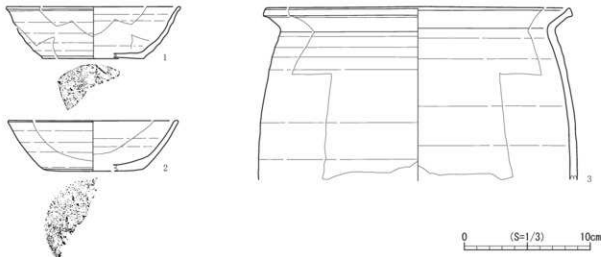
##### (2) ピット

ピットは2 トレンチから1基検出された。平面形は円形を呈し、直径は40～50cm、深さは20cmである。遺物は土師器片と須恵器片が出土したが、細片であることから掲載しなかった。

#### 5. まとめ

今回の調査地点は、富沢館跡の南西部に位置する。これまでの調査で確認されていたSD79堀跡（第466集-3区）の南岸が想定される場所である。

調査では、Ⅲ a 層上面で東から西にかけて延びる堀跡（SD1堀跡）が1条検出された。この堀跡は、位置や方向からSD79堀跡の南岸であると考えられ、今回の調査区からSD79堀跡の堀幅は10～11mであることが確認された。



調査番号	発見番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)		器高	外面	内面	備考	写真図版
						口径	底径					
1	D-1	SD1	-	土師器	坏	(13.0)	(8.0)	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	粘土織成 砂粒含む	31-1
2	D-2	SD1	-	土師器	坏	(13.6)	(8.0)	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	粘土織成 砂粒含む	31-2
3	D-3	SD1	-	土師器	甕	(28.0)	-	(13.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	粘土織成 砂粒含む	31-3
-	1b-1	表塚		瓦質土器	鉢	-	-	-	ハケメ 胎ナデ			31-4

第71図 第23次調査出土遺物

遺物は、SD1 堀跡の堆積層から土師器坏と土師器甕が出土しており、年代は9世紀中頃～後半頃と考えられる。

参考文献

- 仙台市教育委員会 2018『鍛冶屋敷A遺跡・富沢館跡・川前遺跡ほか』仙台市文化財調査報告書第466集  
 仙台市史編さん委員会 2006『仙台市史 特別編7 城館』



1.1区調査区東壁断面（西から）



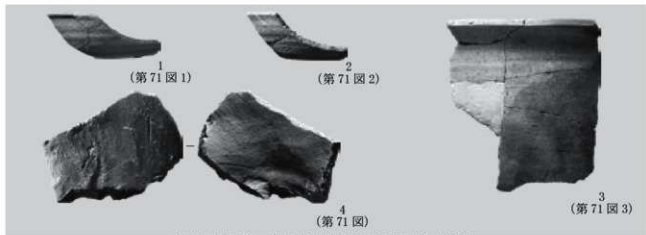
2.1区調査区全景（南から）



3.2区調査区西壁断面（東から）



4.2区調査区全景（南から）

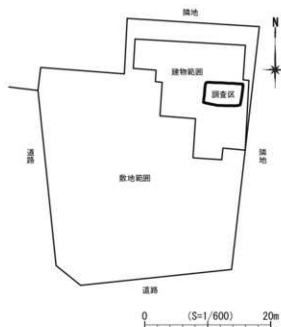


写真図版 31 富沢館跡第23次調査・出土遺物

## 第4節 第24次調査

### 1. 調査要項

遺跡名	富沢館跡 (01246)
調査地点	仙台市太白区富沢西1丁目10番15、 10番20の各一部
調査期間	令和4年4月27日～4月28日
調査対象面積	228.31㎡
調査面積	約18.0㎡
調査原因	共同住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部 文化財課調査調整係
担当職員	主任 堀江洋介 主事 狩野佑介 須貝慎吾 早川太陽 吉田 大 山口沙織



第72図 第24次調査区配置図

### 2. 調査に至る経過と調査方法

本件は令和4年3月28日付で申請者から提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（令和4年4月4日付R3教生文第109-163号で通知）に基づき実施した。

調査では建築範囲内の東側に幅3.0m×長さ6.0mの調査区を設定し設定し、令和4年4月27日に調査を開始した。重機により盛土、基本層Ⅰ～Ⅱ層を除去後、Ⅲa層上面で遺構検出作業を行った。その結果、Ⅲa層上面で、土坑1基、西から北東方向に折れるSD1堀跡1条が検出された。西側に位置し、同時に調査を行っていた第23次調査で検出されたSD1堀跡の延長部分である。SD1堀跡は検出のみにとどめ、SK1土坑は半裁し、令和4年4月28日までに調査区内の計測等を行い野外調査を終了した。

遺構の記録は、トータルステーションを用いて調査区平面図（S=1/20）、遺構断面図（S=1/20）を作製し、一眼レフデジタルカメラにより記録写真の撮影を行った。

### 3. 基本層序

今回の調査では、厚さ約20～30cmの盛土の下に大別で3層、細別で5層の基本層を確認した。遺構検出面であるⅢa層までの深さは0.5mである。

Ⅰa層：10YR4/1 褐色粘土質シルト。炭化物、マンガン粒を少量含む。酸化鉄を少量斑状に含む。盛土以前の  
水田耕作土である。

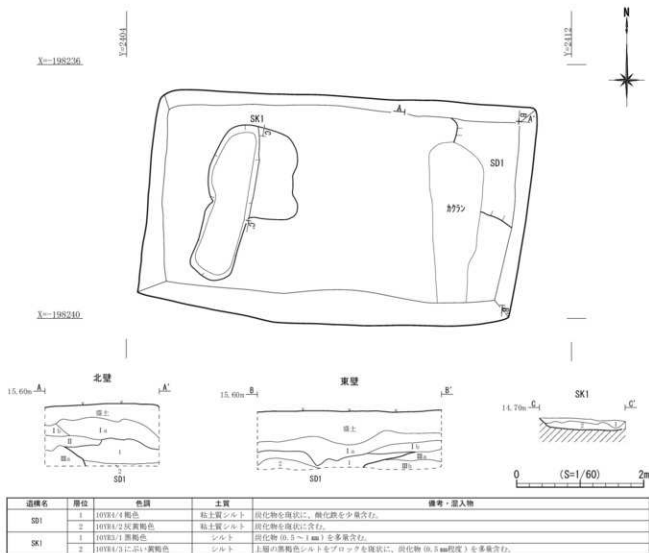
Ⅰb層：10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト。炭化物を少量含む。Ⅰc層由来の粘土質シルトブロックを含む。近現  
代の耕作土である。

Ⅱ層：10YR4/4 褐色シルト。炭化物を少量含む。Ⅲa層由来の粘土質ブロックを含む。

Ⅲa層：10YR3/4 暗褐色粘土質シルト。炭化物を少量含む。白色砂を少量含む。

Ⅲb層：10YR3/2 黒褐色砂質シルト。炭化物を少量含む。植物由来の粘土を含む。径1～2cmの円礫を少量含む。





第73図 第24次調査平面・断面図

## 4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、堀跡1条と土坑1基を検出した。遺物はSD1堀跡とSK1土坑および基本層中から土師器、須恵器、陶磁器、瓦片、レンガが出土した。

## (1) 堀跡

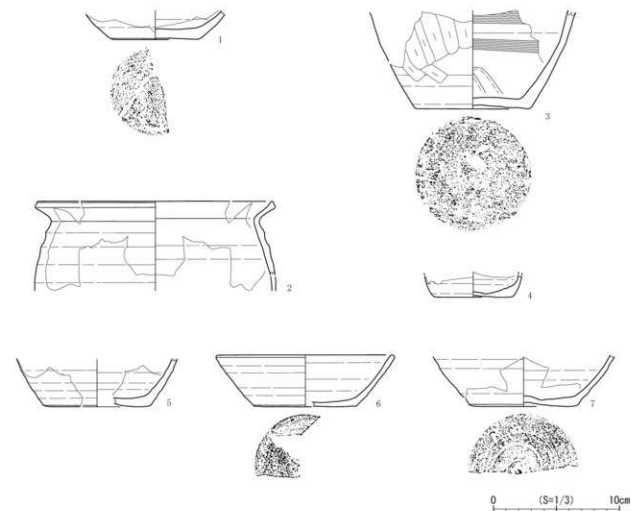
## SD1堀跡 (第73図)

北東側で検出された堀跡である。西から北東方向に折れる堀跡で大半が調査区外へ延びる。規模は、長さ2.0m以上、幅1.1m以上、深さ15cm以上である。断面形は、安全面を考慮し、底面までの調査は行わなかったため不明である。堆積土は2層確認した。遺物は堆積土から土師器片と須恵器、磁器片、瓦片が少量出土している。その中から、須恵器皿1点を図化した(第74図4)。

## (2) 土坑

## SK1土坑 (第73図)

西側で検出された。平面形は楕円形に南側が突出した不正形を呈し、規模は、南北2.5m、東西1.3m、深さは18cmである。堆積土は2層確認した。遺物は堆積土中から土師器片と須恵器片が出土している。その中から、ロクロ成形の土師器杯1点と土師器甕2点と須恵器杯3点を図化した(第74図1~3、5~7)。



調査 番号	登録 番号	出土 遺構	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真 図版
						口径	底径	器高				
1	D-2	SK1	1	土師器	片	-	(1.0)	(2.3)	ロクロナデ 底面：羽織曲切り	ロクロナデ	粘土継ぎ 砂粒含む	33-1
2	D-1	SK1	1	土師器	甕	(18.6)	-	(7.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	粘土継ぎ 砂粒含む	33-2
3	D-3	SK1	2	土師器	甕	-	5.2	(7.8)	ロクロナデ 底面：ヘラケズリ	ロクロナデ 底ナデ カキ目	粘土継ぎ 砂粒含む	33-3
4	E-1	SD1	-	須恵器	皿	(6.2)	(2.0)	(2.0)	ロクロナデ 底面：羽織ヘラケズリ	ロクロナデ	粘土継ぎ 砂粒含む	33-4
5	E-4	SK1	2	須恵器	片	(5.4)	(3.3)	(2.0)	ロクロナデ 底面：羽織ヘラケズリ	ロクロナデ	粘土継ぎ 砂粒含む	33-5
6	E-2	SK1	1	須恵器	片	(13.8)	(8.0)	4.1	ロクロナデ 底面：羽織ヘラケズリ	ロクロナデ	粘土継ぎ 砂粒含む	33-6
7	E-2	SK1	2	須恵器	片	-	3.6	(2.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	粘土継ぎ 砂粒含む	33-7
-	E-6		Ⅱ	須恵器	甕	-	-	(5.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	粘土継ぎ 砂粒含む	33-8
-	J-1	SD1	-	磁器	灰存	-	-	(4.0)	染付 龍尻り模本			33-9

第74図 第24次調査出土遺物(1)

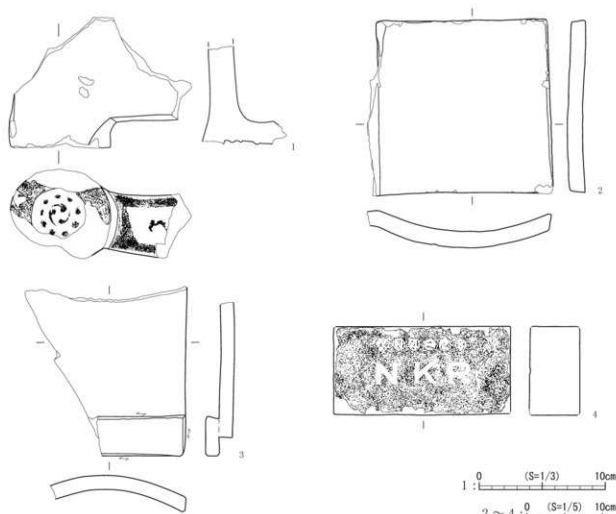
## (3) 出土遺物 (第74・75図)

基本層中および各遺構から天箱1箱分の遺物が出土しており、なかでもSK1土坑の堆積層から土師器片と須恵器片が全体で60点している。大部分は9世紀中頃から後半期と推定される。

第74図2・3はロクロ土師器の甕である。内外面ともロクロナデで、第74図3の甕は、内面にカキ目の痕跡と底部はユビナデ痕跡が確認できる。第74図の5～7は須恵器の坏である。体部がやや丸みをもって外傾するものと、直線的になっているものが認められる。いずれも内外面ともロクロナデでロクロ目が明瞭に確認できる。

第75図1～3は近世以降の<sup>しよ</sup>瓦である。1は軒椀瓦で、丸瓦当部の文様は、珠文を有した三巴文(左巻き)である。椀瓦当部は唐草文が施される。2は椀瓦で、左側欠損部が椀にあたる。3は丸椀伏間瓦である。

第75図4は耐火レンガである。上部に「YN4-28」、中央に「NKR」の刻印が印字されている。岡山県備前市の中村窯業所(現株株式会社テクノ窯工、昭和8年設立)の製品と推定される。



図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種類	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
1	B-1	-	-	瓦	軒瓦	瓦当径 08.00 内区径 (4.2) 筒線幅 1.8 筒線深 0.7 瓦当厚 1.6 内区高 2.8 巻れ部 / 内区高 2.6 瓦当厚 2.2				30-10
2	B-2	-	-	瓦	椀瓦	前幅 (21.8) 後幅 22.7 長さ 23.0 高さ 4.7 厚さ 2.0				30-11
3	B-3	-	-	瓦	椀瓦	幅 (21.3) 長さ (22.3) 厚さ 1.9				30-12
-	B-4	-	-	瓦	平瓦	幅 23.0 長さ (19.2) 高さ 3.6 厚さ 2.0				30-13
図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種類	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
						長さ	幅	厚さ		
4	X-1	-	I	レンガ	耐火レンガ	23.4	11.7	6.7	C面みに「M4-28」、中央に「M4」の刻印	30-14

第75図 第24次調査出土遺物(2)

## 5. まとめ

今回の調査地点は、富沢館跡の南西部に位置する。調査では、基本層Ⅲ a 層上面で西から北東方向に折れる堀跡(SD1堀跡)を1条確認した。この堀跡は、位置や方向から隣接する23次のSD1堀跡の西側延長であり、SD79堀跡(第466集-3区)の南岸の角部にあたる。今回の調査区によりSD79堀跡の角部が南西側に膨らみ想定よりも堀幅が広いことが確認できた。

遺物は、土師器、須恵器、瓦、耐火レンガが出土した。土師器は、ロクロ成形のものが大半で9世紀中頃から後半期と推定される。瓦は、軒椀瓦、椀瓦、伏間瓦が出土し、近世以降に近隣で瓦を用いた土地利用があったことが示唆される。耐火レンガは刻印が印字されており、昭和期以降に生産されたものと推察される。

## 参考文献

仙台市教育委員会 2018『鍛冶屋敷A遺跡・富沢館跡・川前遺跡ほか』仙台市文化財調査報告書第466集



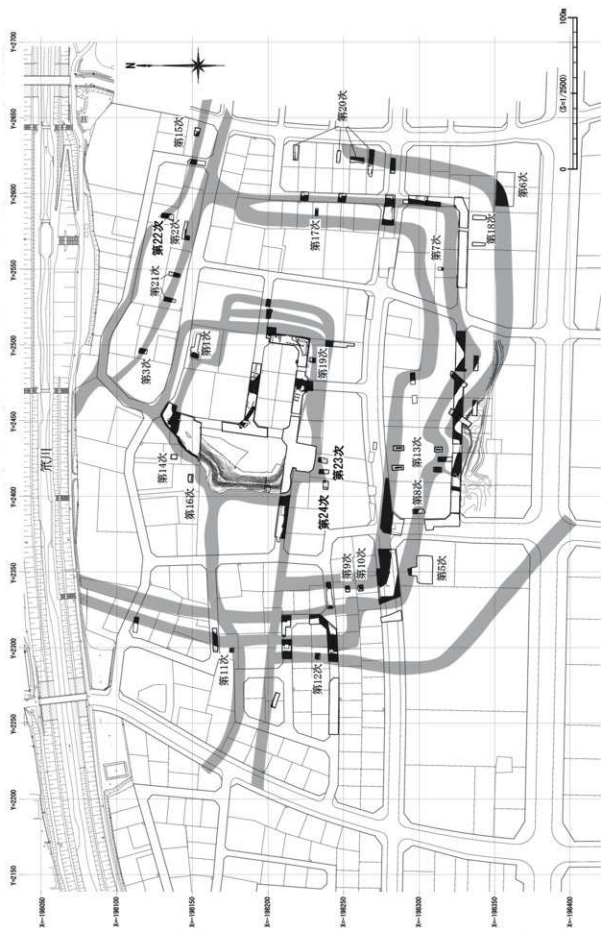
1. 調査区北壁断面（南から）



2. 調査区全景（西から）



写真図版 33 富沢館跡第24次調査出土遺物



第76図 富沢館跡 検出掘跡位置図

## 第9章 総括

### 1. 今泉遺跡第17次調査

調査地点は、今泉遺跡の中央部のやや北側に位置する。調査の結果、堀跡2条と井戸跡1基、さらにそれよりも古い時期の水田耕作土層が検出された。1・2トレンチで確認されたSD1堀跡は隣接する第16次調査でも確認された堀跡や、第8・11次調査でも検出された堀跡同様、現在の道の内側に、道に並行する形で確認されている堀の一部であると推測される。また3・4トレンチで検出されたSD2堀跡は、SD1堀跡のさらに内側を区画する堀跡であると推測されるが、堆積土の一部は人為的に埋め戻されているのが確認された。その後18世紀以降は、自然堆積で埋没していったものと推測される。

### 2. 大野田遺跡第5次調査

調査地点は、大野田遺跡の北側に位置する。調査の結果、溝跡3条、土坑2基、ピット22基が検出されたことから周辺一帯は居住域であったと考えられる。遺物は縄文時代の遺物包含層から縄文時代後期初頭の南境式に類する土器、土製品、石器、石製品などが出土した。これらは遺構に伴うものではなく、河川の流れ込みによるものと考えられる。

### 3. 大野田官衙遺跡22次調査

調査地点は、大野田官衙遺跡の南側に位置する。調査は2箇所のトレンチで行い、ピット2基、掘立柱建物跡1棟が検出された。掘立柱建物跡はすでに確認されている周辺の掘立柱建物跡と同様に真北を基準としていることから、同時期の遺構の可能性がある。

### 4. 郡山遺跡第320次調査

調査地点は郡山遺跡方四町II期官衙の東部で、石組池(SX1235)より東に約150m、大溝東辺推定ラインより西に約40mの地点に位置する。遺物は土師器、須恵器、瓦、礫石器、石製品、金属製品が出土し、遺構は竪穴住居跡3軒、柱列跡1列、掘立柱建物跡6棟、溝跡2条、ピット52基が検出された。近世以降と考えられるSD1溝跡を除き、ほかの遺構は方位や出土遺物から官衙の機能していた時期に収まる可能性が高いと考えられる。

調査で検出された3軒の竪穴住居跡からはいずれも、鉄滓や精錬滓といった遺物が少量であるが出土しており、S11竪穴住居跡のカマド付近では床面直上に炭化物の分布が確認された。このことから工房跡などといった通常の住居跡と異なる機能を持っていた可能性が考えられ、周辺を含めその機能についての検討が必要である。

### 5. 北目城跡第21次調査

調査地点は遺跡南部に位置し、3か所のトレンチで調査を行った。土坑1基、ピット1基と城跡に伴う堀跡2条が検出され、そのうち東西方向に延びるSD1堀跡は、第1次調査のSD15堀跡の延長部分と考えられる。現在も水路として利用され、その南岸部を確認している。南北方向に延びるSD2堀跡は1・2Tで検出され、SD1堀跡よりも古く、SD2堀跡が埋没した後にSD1堀跡が構築されたと考えられる。検出されたSD1堀跡の堆積土からは、近世の陶磁器、瓦が出土した。

## 6. 富沢遺跡第 153・155 次調査

調査地点は、富沢遺跡の南側と北西側に位置し、各地点で古代の条里型土地区画に関わる大畦畔の検出が想定されていた。

第 153 次調査では、現代のものを含めて水田耕作土が 4 面確認された。大畦畔やその他の区画施設等は確認されておらず、遺物も出土していない。水田耕作土の下には自然堆積の泥炭質粘土と、自然流路とみられる粗砂主体の落ち込みがある。したがって、流路が完全に埋没し土地が平坦になった後に古代以降の水田が形成されている。

第 155 次調査では、現代のものを含めて水田耕作土が 4 面確認された。大畦畔やその他の区画施設等は確認されていない。遺物はⅢ層水田耕作土中から近世陶器が 1 点出土した。

## 7. 富沢館跡第 22 次

調査地点は、富沢館跡の北東部に位置する。調査の結果、北西から南東にかけて延びる堀跡 1 条が検出された。位置や方向から SD87 堀跡（第 466 集-A 区）と一連のものであると考えられる。今回の調査で確認できたのは堀の南岸部にあたり、想定よりも北側を通ることが明らかとなった。遺物は近世以降の瓦、陶磁器が出土した。

## 8. 富沢館跡第 23 次

調査地点は、富沢館跡の北東部に位置する。2 箇所のトレンチで調査を行った結果、ビット 1 基と東から西にかけて延びる堀跡 1 条が検出された。位置や方向から SD79 堀跡（第 466 集-3 区）と一連のものであると考えられる。

今回の調査で確認できたのは堀の南岸部にあたり、想定よりも南側に配置されており、堀幅は 10～11m を測ることが明らかとなった。遺物は堀跡の堆積土内から、9 世紀中頃～後半頃の土師器杯と土師器甕が出土した。

## 9. 富沢館跡第 24 次

調査地点は、富沢館跡の北東部に位置する。調査の結果、土坑 1 基と西から北東方向に折れる堀跡 1 条が検出された。位置や方向から SD79 堀跡（第 466 集-3 区）と一連のものであると考えられる。隣接する 23 次の SD1 堀跡の西側延長とみられ、SD79 堀跡（第 466 集-3 区）の南岸の角部にあたる。今回の調査により SD79 堀跡の角部が南西側に膨らみ想定よりも堀幅が広いことが想定される。遺物は土坑の堆積土内から、9 世紀中頃～後半頃の土師器杯と土師器甕が出土した。



# 報告書抄録

ふりがな	こおりやまいせきほか						
書名	郡山遺跡ほか						
副書名	発掘調査報告書						
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第505集						
編著者名	須貝慎吾 早川太陽 及川謙作 吉田 大 妹尾一樹 柳澤 楓 荒井裕						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-0011 仙台市青葉区上杉一丁目5-12 仙台市役所 上杉分庁舎10階 TEL: 022-214-8894						
発行年月日	令和5年3月31日						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	種別	市町 遺跡 村 番号	主な遺構		主な遺物		特記事項
	要約						
いづみいせき遺跡 (第17次)	宮城県仙台市若林区 今泉二丁目	04103 01235	38° 12' 39"	140° 55' 37"	2021.10.25 ~ 2021.12.24	約97.1㎡	記録保存調査 (宅地造成)
	集落跡、城館跡、包 含地	中世～近世	堀跡、井戸跡		陶磁器		
中～近世の城館に伴うと考えられる、堀跡が検出された。							
おおのうで遺跡 (第5次)	宮城県仙台市太白区 大野田五丁目	04104 01094	38° 13' 04"	140° 52' 39"	2021.10.25 ~ 2021.12.24	約120.0㎡	記録保存調査 (事務所建築)
	集落跡	縄文～	溝跡、土坑、ピット、遺物包 含層		縄文土器、石器、土製品		
溝跡3条、土坑2基、ピット22基が検出された。縄文時代の遺物包含層から縄文時代後期初頭の南境式に類する土器、土製品、石器、石製品などが出土した。							
おおのうで官街遺跡 (第5次)	宮城県仙台市太白区 大野田五丁目	04104 01566	38° 12' 57"	140° 52' 33"	2021.10.25 ~ 2021.12.24	約57.0㎡	記録保存調査 (共同住宅建築)
	官衙跡、包含地	中世～近世	掘立柱建物跡		土器		
ピット2基、掘立柱建物跡1棟が検出された。掘立柱建物跡は真北を基準としており、官衙に伴う建物跡と考えられる。							
郡山遺跡 (第320次)	宮城県仙台市太白区 郡山三丁目	04104 01003	38° 13' 24"	140° 53' 41"	2022.6.23 ~ 2022.9.30	約230.0㎡	記録保存調査 (共同住宅建築)
	官衙跡、寺院跡、包 含地	縄文～古代	竪穴住居跡、柱列跡、掘立柱 建物跡、溝跡、ピット		土師器、須恵器、石製品、瓦、 鉄滓		
竪穴住居跡3軒、柱列跡1列、掘立柱建物跡6棟、溝跡2条、ピット52基が検出された。							
きたみち遺跡 (第21次)	宮城県仙台市太白区 北目宅地	04104 01029	38° 13' 12"	140° 53' 55"	2022.3.14 ~ 2022.3.24	約33.0㎡	記録保存調査 (L型擁壁設置工事・ 建売住宅建築)
	城館跡、集落跡、水 田跡	縄文・平安 ～近世	堀跡、土坑		陶磁器		
中～近世の城館に伴うと考えられる、堀跡が検出された。							
富沢遺跡 (第153次)	宮城県仙台市太白区 泉崎一丁目	04104 01369	38° 13' 11"	140° 52' 09"	2022.3.14 ~ 2022.3.24	約32.0㎡	記録保存調査 (共同住宅建築)
	水田跡、包含地	旧石器～近 世	水田耕作土、自然流路		なし		
水田耕作土を4面確認した。自然流路が埋没した後、水田を構築している土地利用の状況が明らかとなった。							
富沢遺跡 (第155次)	宮城県仙台市太白区 鹿野3丁目	04104 01369	38° 13' 29"	140° 52' 13"	2022.6.1 ~ 2022.6.8	約18.0㎡	記録保存調査 (共同住宅建築)
	水田跡、包含地	旧石器～近 世	水田耕作土		陶器		
水田耕作土を4面確認した。畦畔等は確認されなかった。							

<small>宮城県仙台市太白区 富沢西一丁目</small> 富沢館跡 (第22次)	<small>宮城県仙台市太白区 富沢西一丁目</small>	04104	01246	38° 12' 54"	140° 51' 44"	2022.1.7～ 2022.2.1	約 32.0 m <sup>2</sup>	記録保存調査 (共同住宅建築)
	城館跡、集落跡	縄文・ 平安～近世		溝跡		陶磁器、瓦		
	中～近世の城館に伴うと考えられる、堀跡が検出された。							
<small>宮城県仙台市太白区 富沢西一丁目</small> 富沢館跡 (第23次)	<small>宮城県仙台市太白区 富沢西一丁目</small>	04104	01246	38° 12' 50"	140° 51' 39"	2022.4.25～ 2022.4.27	約 36.0 m <sup>2</sup>	記録保存調査 (共同住宅建築)
	城館跡、集落跡	縄文・ 平安～近世		溝跡		土師器、瓦質土器、陶磁器		
	中～近世の城館に伴うと考えられる、堀跡が検出された。							
<small>宮城県仙台市太白区 富沢西一丁目</small> 富沢館跡 (第24次)	<small>宮城県仙台市太白区 富沢西一丁目</small>	04104	01246	38° 12' 51"	140° 51' 39"	2022.4.25～ 2022.4.27	約 18.0 m <sup>2</sup>	記録保存調査 (共同住宅建築)
	城館跡、集落跡	縄文・ 平安～近世		溝跡、土坑		土師器、須恵器、瓦、陶磁器、 耐火レンガ		
	中～近世の城館に伴うと考えられる、堀跡が検出された。							

仙台市文化財調査報告書第505集

## 郡山遺跡 ほか

発掘調査報告書

2023年3月

発行 仙台市教育委員会  
 仙台市青葉区上杉1丁目5-12  
 仙台市役所上杉分庁舎10階  
 文化財課 TEL. 022 (214) 8894

印刷 株式会社 仙台紙工印刷  
 仙台市宮城野区善竹三丁目1-14  
 TEL. 022 (231) 224590



